SPECIAL GIFT : BABYMETAL DOUBLE SIDED POSTER

METAL HAMMER JAPAN

メタルハマー・ジャパン　第4号

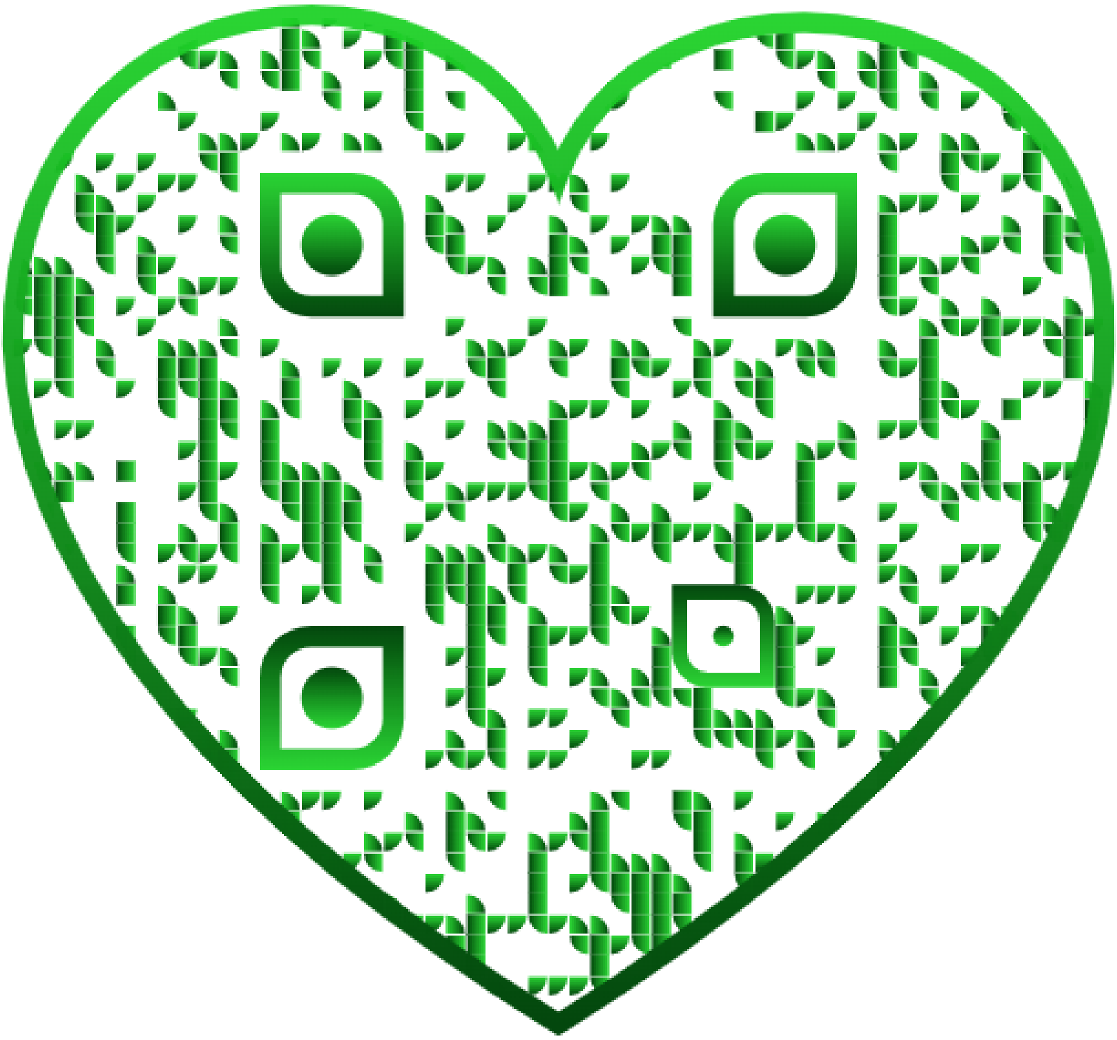
Vol.4

BABYMETAL

DECADE of METAL RESISTANCE ...and FUTURE!

BLACK SABBATH
CARCASS
POWER TRIP
GHOSTEMANE
IRON MAIDEN
NAPALM DEATH
BRING ME THE HORIZON
LOVEBITES
MAKI MIZUNO
...and More!

Rittor Music Mook



METAL HAMMER JAPAN

[Vol.1]、[Vol.2]&[Vol.3]好評発売中!

METAL HAMMER JAPAN Vol.1

価格：1,500円（＋税）

◎ CONTENTS

Special Feature
オジー・オズボーン
　最新インタビュー
　40年目の『ブリザード・オブ・オズ～
　血塗られた英雄伝説』
　オリジナル&ソロ・ギター・スタイルで
　弾く「グッバイ・トゥ・ロマンス」

フィリップ・H・アンセルモ
BABYMETAL
スリップノット
アウトレイジ
デイヴィッド・エレフソン
トリヴィアム
KORN
エヴァネッセンス&ウィズイン・テンプテーション
アモン・アマース
バロネス
LOVEBITES

METAL HAMMER JAPAN Vol.2

価格：1,500円（＋税）

◎ CONTENTS

Special Feature
ドリーム・シアター／ジェイムズ・ラブリエ

プログレッシブ・メタル・スペシャル
　1992年のドリーム・シアター
　アイアン・メイデンはいかにして
　プログレッシブになっていったのか!?
　『メタル・ジャスティス』は
　どうプログレッシブなのか？
　インテリジェント・アグレッシブ＝
　ジェントの進撃
　...and more!

メガデス
キング・ダイアモンド
MYRKUR
メシュガー
コード・オレンジ
ディジー・ミズ・リジー
ジューダス・プリースト
サバトン

METAL HAMMER JAPAN Vol.3

価格：1,500円（＋税）

◎ CONTENTS

Special Feature
from 1985 to 2001
アイアン・メイデン LIVE の刻印

メタル的 LIVE IN JAPAN アルバムの
歩き方
ビリー・シーンが振り返る MR.BIG と
"ライヴ・アルバムの時代"
Memorable Show in Japan
　マイケル・ヴァイカート
　マイケル・アモット
　キコ・ルーレイロ
スラッシュ・メタル名ライヴ作を探求せよ!

ラム・オブ・ゴッド
ペリー・トゥモロー
メイク・ゼム・サファー
KORN

『ブリティッシュ・スティール』40周年
炎立つスラッシュ・メタルの1986年
今、このヘッドフォン&イヤフォン
でメタルが聴きたい
　…and More

[Vol.5]は2021年3月発売予定!

□編集部からの叫び!　日々のオフィシャル Twitter はこちら>> @MetalHammer_Jp

METAL HAMMER JAPAN

1周年記念
2号連続オリジナルTシャツ
合計500名様プレゼント企画発動!

2020年3月に創刊した『METAL HAMMER JAPAN』は、読者諸兄&世界各国のメタル・ミュージシャンの応援のおかげで、本Vol.4をもって無事1年分を締めくくることができました。皆様、ありがとうございます★

そこで、本号および1周年となるVol.5（2021年3月発売号）と合わせ、2号連続で＜合計500名様＞にオリジナル・デザインTシャツをドドンとプレゼント!

これが『METAL HAMMER JAPAN Vol.4』限定Tシャツだっ!

- ●カラー：ブラック・ボディ×ホワイト・プリント
- ●サイズ：Lのみ
- ● Vol.4用プレゼント数：250枚

※画像はイメージです。実際の製品では多少の変更がある場合があります。

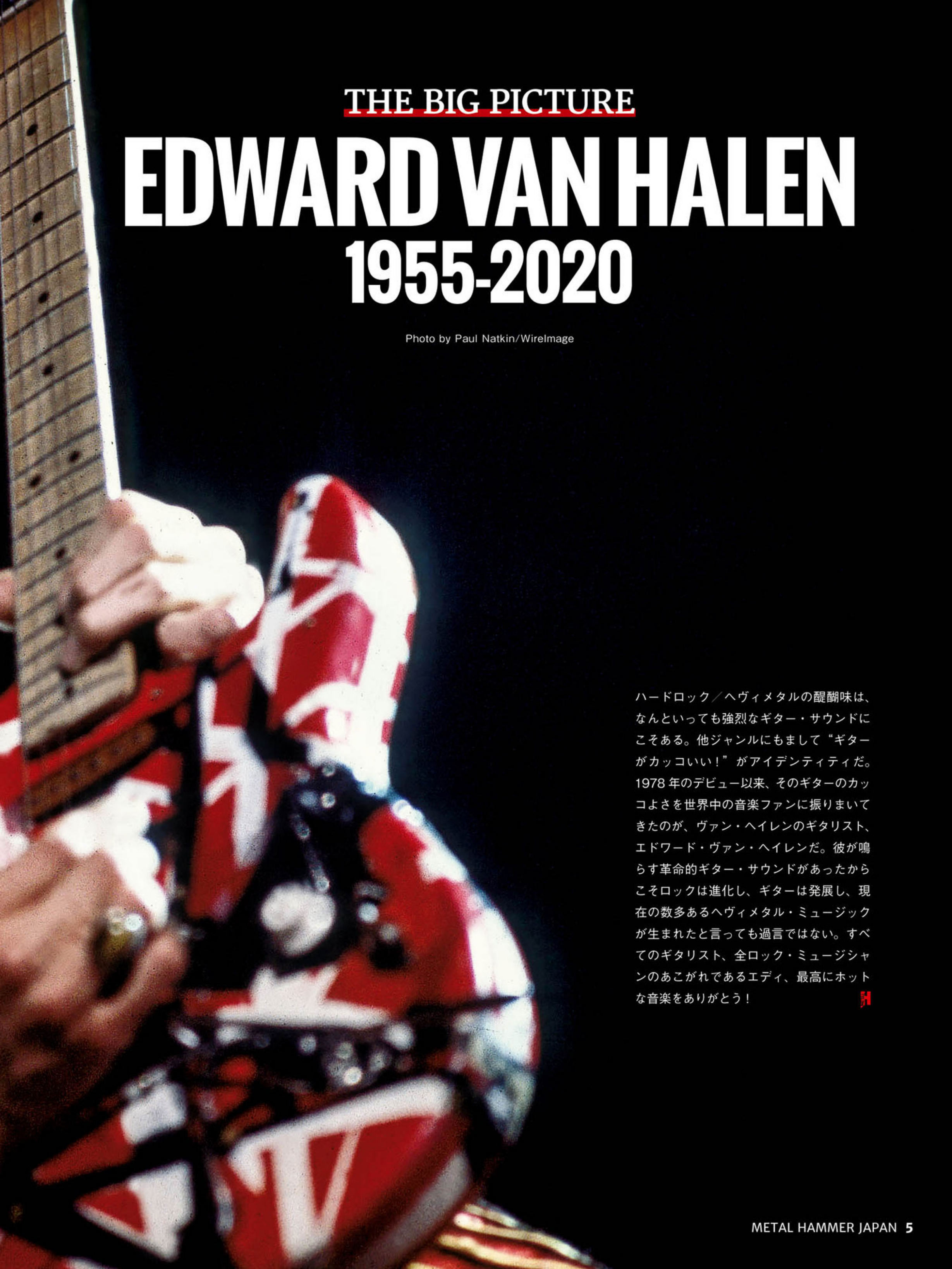
この迫力満点のデザインを担当してくれたのは、ルーマニア人アーティストのコスティン・キオレアヌ氏だ。アーチ・エネミーやアット・ザ・ゲイツ、ゴーストなど著名バンドのアートワークを担当しており、彼の作品を目にしている人も多いだろう。本イラストでは“ジャパン”と“ヘヴィメタル”のテイストが融合し、とてもラウドかつクールな1枚に仕上がっている!

【応募方法】

希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、プレゼント枠に《①Vol.4オリジナルTシャツ》と記入してご応募ください。

- ●締め切り：2021年3月10日（水）
- ●プレゼント発送予定日：2021年4月上旬

当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております!



THE BIG PICTURE

EDWARD VAN HALEN 1955-2020

Photo by Paul Natkin/WireImage

ハードロック／ヘヴィメタルの醍醐味は、なんといっても強烈なギター・サウンドにこそある。他ジャンルにもまして“ギターがカッコいい！”がアイデンティティだ。1978年のデビュー以来、そのギターのカッコよさを世界中の音楽ファンに振りまいてきたのが、ヴァン・ヘイレンのギタリスト、エドワード・ヴァン・ヘイレンだ。彼が鳴らす革命的ギター・サウンドがあったからこそロックは進化し、ギターは発展し、現在の数多あるヘヴィメタル・ミュージックが生まれたと言っても過言ではない。すべてのギタリスト、全ロック・ミュージシャンのあこがれであるエディ、最高にホットな音楽をありがとう！

CONT

Special Feature

BABYMETAL P.10

DECADE of METAL RESISTANCE…and FUTURE!

2020年で結成10周年を迎えたBABYMETAL。本邦はもとより、世界各国で絶賛される彼女たちの楽曲とパフォーマンスは、まさにメタルの未来へとつながる架け橋なのだ。最新インタビューでのSU-METAL、MOAMETALの言葉から、彼女たちが駆け抜けてきた10年の軌跡に迫る。そして、ふたりがその先に見据えるものとは……。

巻末付録：
オリジナル
両面ポスター

無限の可能性を持って～ BABYMETAL“世界征服”への軌跡　P.24

10周年記念ベスト・アルバム　Tracks Analysis of『10 BABYMETAL YEARS』 P.28

BLACK SABBATH P.30

『パラノイド』50年目のドゥーム・ロード

1970年9月18日にドロップされた2ndアルバム『パラノイド』が、発売50周年を迎えた。1st &本作を持ってブラック・サバスは名だたるバンドに肩を並べ、“ヘヴィメタルのパイオニア”としての地位を確固たるものにした。メンバーの証言、1970年という時代から、“サバス流ヘヴィ・ミュージック”の源流をたどる。

OH, LORD YEAH!
メンバー、関係者が語る『パラノイド』全曲。P.32

1970年――
ブラック・サバスは何に生み出され、何を生み出したのか。P.38

英式闇滅低音を継ぐ男
リー・ドリアンの『パラノイド』考察 P.42

名曲は誰が弾いても名曲なり！
「パラノイド」カバー大全
P.46

水野真紀

P.102

去る8月、オフィシャル・ブログにて突如“メタルの魅力”を発信した女優、水野真紀。彼女はどのようにしてメタルに行き着き、メタルに魅せられたのか？　日本を代表する女優への、異色のメタル的インタビュー！

P.81

メタルだったら部屋でも激音 最強の"卓上&小型" ギター・アンプを探せ！

まだまだステイ・ホームが続きますが、メタル・ギタリストだったら家でも激音でギターが弾きたい！　そこで各メーカーが誇る卓上&小型サイズ・アンプ11台を、LOVEBITESのmidoriとmiyakoがメタル的視点でじっくりとチェック！

ENTS

ヘヴィの流儀
CARCASS P.52

ヘヴィメタルをプレイするということは、つまりは“ヘヴィな音”を追求するということ。先人たちの影響を咀嚼し、独自のサウンドを作っていくミュージシャンたちだが、そこにはそれぞれが思う自分だけのヘヴィ・サウンドがある。シリーズ１回目は、伝説的グラインド・コア・バンドにて激濁を創出し続けるビル・スティアーが登場！

From UK
P.66
IRON MAIDEN

アイアン・メイデンからは、近年は執筆業にも力を入れているエイドリアン・スミスが登場！　長きに渡るライヴ生活、そして趣味である釣りから得た人生訓を我々に伝えてくれるぞ。メイデン・シャツを着た人はたくさんいるが、街中では彼らに気づかれないこともあるらしい。

POWER TRIP P.58 From UK

去る８月、34歳という若さでこの世を去ったライリー・ゲイル。スラッシュ／クロスオーバー界次代の担い手＝パワー・トリップのフロントマンとして多くのオーディエンスを沸かせてきたライリーだが、彼の魅力はなによりもその人間性にあった。生前の言葉とともに、彼のミュージシャンとして、いち人間としての素顔に触れたい。Rest In Peace, Riley.

NAPALM DEATH P.70 From UK

人生の教訓を示してくれる本コーナーふたり目は、ナパーム・デスよりマーク“バーニー”グリーンウェイだ。自らナパームは政治的なバンドであると語り、その主義・主張をハッキリと公言するバーニー。彼の曲がらない信念が、あの激音を作り出すのだ！

HALESTORM P.74 From UK

グラミーをも受賞するヘイルストームのフロント・ウーマン、リジー・ヘイルは、幼少時よりメンタルヘルスの問題に悩まされていた。それを公言することを恐れず、そして今は同じ苦しみを持つ仲間を救うため《Raise Your Horns》活動を牽引する。その力強い言葉に耳を傾けてほしい。

THE HU P.78 From UK

今年３月、待望の初来日を果たすはずだったモンゴルきってのロック軍団、THE HU。彼らはその旅の途中、母国に帰れずオーストラリアにて逗留することとなった。ガラーが語るその滞在記、ラストはザ・フー流モンゴル式点心の作り方もレクチャー。

BRING ME THE HORIZON P.108

サウンド・イメージを変化させつつも、そこには変わらぬラウド・グルーヴが存在する。BABYMETAL の参加も話題の新作 EP を発表したブリング・ミー・ザ・ホライズンより、オリヴァー・サイクスの［オフィシャル・インタビュー］をお届け。

GHOSTEMANE

P.112
From UK

1990 年代に興ったニュー・メタルの息吹を深く吸い込んだゴーストメーン……ヒップホップ・アーティストでもあるエリック・ホイットニーによるこのプロジェクトは、新たなる刺激を欲している日本のメタル・ファンが今すぐに聴くべき音である！

FENDER MADE IN JAPAN MODERN SERIES で鳴らす最新ラウド・サウンド！＜ Vol.4 ＞ P.98

格別のラウド・サウンドを創出するフェンダーの新シリーズより、今回はテレキャスター HH を BREAKERZ の AKIHIDE がプレイ。メタル・ギタリストにはやや馴染みの薄いテレキャスターだが、その印象を塗り替える１本だった！

STARS' WORDS P.65
DISC REVIEWS P.118
METAL NEW GEAR P.122
CROSSFAITH×SLIPKNOT WHISKEY P.126

A BRIDGE to the FUTURE of the METAL!

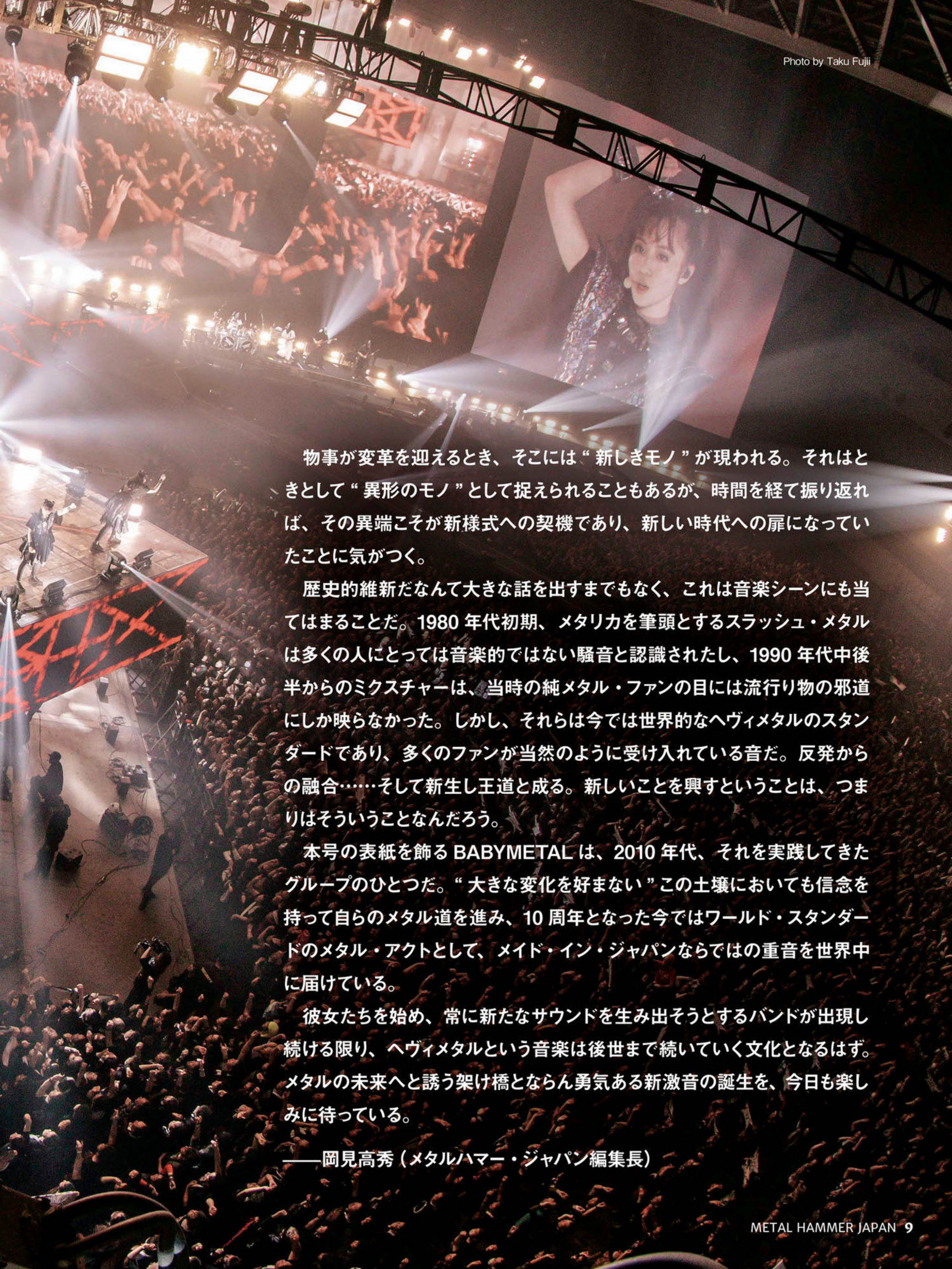


Photo by Taku Fujii

物事が変革を迎えるとき、そこには“新しきモノ”が現われる。それはときとして“異形のモノ”として捉えられることもあるが、時間を経て振り返れば、その異端こそが新様式への契機であり、新しい時代への扉になっていたことに気がつく。

歴史的維新だなんて大きな話を出すまでもなく、これは音楽シーンにも当てはまることだ。1980年代初期、メタリカを筆頭とするスラッシュ・メタルは多くの人にとっては音楽的ではない騒音と認識されたし、1990年代中後半からのミクスチャーは、当時の純メタル・ファンの目には流行り物の邪道にしか映らなかった。しかし、それらは今では世界的なヘヴィメタルのスタンダードであり、多くのファンが当然のように受け入れている音だ。反発からの融合……そして新生し王道と成る。新しいことを興すということは、つまりはそういうことなんだろう。

本号の表紙を飾るBABYMETALは、2010年代、それを実践してきたグループのひとつだ。“大きな変化を好まない”この土壌においても信念を持って自らのメタル道を進み、10周年となった今ではワールド・スタンダードのメタル・アクトとして、メイド・イン・ジャパンならではの重音を世界中に届けている。

彼女たちを始め、常に新たなサウンドを生み出そうとするバンドが出現し続ける限り、ヘヴィメタルという音楽は後世まで続いていく文化となるはず。メタルの未来へと誘う架け橋とならん勇気ある新激音の誕生を、今日も楽しみに待っている。

——岡見高秀（メタルハマー・ジャパン編集長）

Special Feature

BABY
DECADE of METAL RE

彼女たちが突き進んだ10年……

METAL SISTANCE...and FUTURE!

その視線の先にある未来

取材・文：岡見高秀
写真：宮脇進（PROGRESS-M）
ヘアメイク：aya watanabe
スタイリング：Shohei Kashima (W INC.)

――初めて BABYMETAL の音楽を聴いたときの衝撃はすごかったし、何か起こるんじゃないかという期待もすごかった。

SU-METAL

2010年の始動から10年。決して平坦ではない道をひた走り続け、BABYMETALがたどり着いた場所から見えるものとは。SU-METALとMOAMETALが、ここまでの歩みを、そしてこれから目指すべき姿についてじっくりと語ってくれた。ふたりの言葉からは、彼女たちの視線のその先にあるヘヴィメタルの未来がのぞき見られた気がした。

時間の流れというものは、誰にでも平等に訪れる。ただ、その時間のなかをどのような密度で進むかによって、その先の道は次々と変わっていくものだ。未来に見据えた姿を捉えられるか否かは、いつも自分次第。2020年で結成10周年を迎えたBABYMETAL……彼女たちはこの月日をどのように走ってきたのだろうか。

SU-METAL BABYMETALは目の前にある壁をガムシャラに越えていくことをずっと頑張って突き進んできたグループだったので、まさか10年間もBABYMETALをやっているなんて思ってもいなくて。なので、10年も経ったんだってことにとても驚いています。私がBABYMETALを始めたのは13歳のときで、成長期をともにしてきたっていうのもあって。私にとっては人生の半分くらいをBABYMETALですごしているんですけど、普通だったら絶対に体験できないようなことをたくさん経験させていただいて。そのなかでいろいろなことを学んで、いろいろなことを吸収して……今の私を作ったものがBABYMETALなんじゃないかなと思いますね。

MOAMETAL SU-METALが言ったとおり、10年前の自分は10年間もやっているなんて思ってはいなくて。だから、10年間一緒に頑張ってくれたSU-METALと私を褒めてあげたいです（笑）。

ふたりにとってこの10年は、文字どおり脇目を振らずガムシャラに走り続けてきた日々と言え、その時間の濃度は他者には計り知れないものだろう。ある瞬間は刹那に過ぎ、またある時間は雄大な川の流れのように進んでいったに違いない。

SU-METAL ここまでの10年は、長かったと言われれば確かに長かったのかもしれない。あるときは“これって1年間で起きた出来事なの？”ってぐらい濃密で、この1年で2～3年くらいのことを経験したんじゃないかと思うこともあれば、早かった！というときもあって、1年が均等に流れていない感じがするんです。

MOAMETAL 本当に、長いようで早くもあったんですよね。どっちもなんです。とにかくすごく早くて、ゆっくりで……すごかったとしか言えないんです。1年の密度が違うんですよ。日の密度も全然違う。この10年間でいろいろな経験をしすぎたから、今自分が何歳なのかもわからなくなるくらい。

まさに怒濤の10年を過ごし、日本を、そして世界を席巻するメタル・アクト／ミュージシャンとなったBABYMETAL。ただし、もちろんそれはその一歩目から快適な絨毯の上を歩いてきたわけではない。しかも彼女たちが主戦場と目するステージが、特に“異分子”を苦手とする本邦のメタル・シーンであるからなおさらだ。

SU-METAL 通して言えることとしては、まずBABYMETALは批判的な意見もたくさんいただいて……というところからスタートしていて。だから、まずは日本国内で“BABYMETALは本気でメタルと向き合っています”ということを知ってもらうことから始まっていきました。海外に行くことになったときは言語だったりとか、たくさんの壁を乗り越えなきゃいけないっていうことがずっとあったので。常に試練は与えられ続けていたのかなと思いますね。

ただしそんな試練の連続も、SU-METAL、MOAMETALにとっては自分を鼓舞する着火剤の役割になったようだ。

SU-METAL でも、批判されるから不安になるとか、自信がなくなるということはあまりなくて。逆に私自身もBABYMETALのデビュー曲「ド・キ・ド・キ☆モーニング」のデモ・テープを聴いたときに“なんじゃこりゃ”って思ったんですよ。それがいいのか悪いのかも全然わからないけど、とにかく衝撃的だったというか。だから、もしかしたら初めての出来事に戸惑っている人もいるんじゃないかなっていう捉え方で。だから批判してくれるってことは無視してるんじゃなくて、ちゃんと反応してくれているということ。それだけ影響を与えることができているってことは、BABYMETALの音楽って結構すごいのかもしれないっていうポジティブな気持ちで。それくらい、自分が初めてBABYMETALの音楽を聴いたときの衝撃はすごかったし、何かおもしろいことが起こるんじゃないかっていう期待もすごかったんですね。

MOAMETAL とても楽しくやってましたね。批判的な声があったのはもちろん理解していたんですけど、あの頃は何も知らなくて、それだけ無知だったんですよ。無知って強いなって思いました。世間を知らなさすぎて逆に良かったんじゃないかなって。10年の間にいろいろなものを見て経験していくなかで、それとともにちょっとずつ怖いものも認識するようになった感じなんです。活動初期よりも、大人になるにつれて怖さとか不安を感じる部分は増えてきたのかなと思います。ソニスフィア（※2014年7月5日［ソニスフィア・フェスティバルUK］）のときなんて、私たちはイギリスに来れたことが嬉しすぎて、ケータリングのご飯が美味しいとか、イカツイお兄さんがいっぱいいる景色とかが新鮮で、ワクワクしてたくらい（笑）。まわりのスタッフさんのほうが不安になっていたみたいで。私たちはルンルンと楽しんでいたから、それはやっぱり無知だったおかげなのかも。私たちって不安を楽しめるって言うか、“自分たちの信じてる道を進むしかないな”って思っているグループだから。そのときから“不安なんてふっとばせばいいね”みたいな感じでした。

今では世界各国がツアーのレギュラー・ルートであり、海外公演自体も2013年から行なっているBABYMETALであるが、自他ともに大躍進のひとつとして挙げられるのが、MOAMETALも引き合いに出した［ソニスフィア・フェスティバルUK］への登壇だ。

SU-METAL 段階的にいろいろなきっかけがあったんです。まずはソニスフィアのライヴで、国境を超えて日本語で歌っているはずなのに、私たちの音楽がちゃんと世界に届いたんだってわかった瞬間だったりとか。それから徐々に、世界での見られ方が変わっていることに気づいて。それまでのBABYMETALってまったく知られていなかったのに、2016年くらいからメタル・

——たくさんの国をまわって怖さを覚える反面、
メタルのハートもいろいろなアーティストさんに教えてもらった。

MOAMETAL

フェスに行くと“BABYMETAL っておもしろい音楽やってる子なんでしょ”っていう認識に変わっているのを感じたり。

本人の言葉どおり、ソニスフィア UK 公演を皮切りに、ヨーロッパ圏での反応は本格的に熱気を帯びていった。

SU-METAL あのライブがあったから今私たちはアウェイも恐れないし、あの時期の無知な私たちだったからこそあのステージに立てたと思う。それが大きな成功体験として大きな自信につながって、今があると思います。

MOAMETAL すごくアウェイだったとは思うんです。でも海外のステージに立って、徐々にうしろのほうまでキツネ・サインが広がっていくのがすごく快感だったな。

SU-METAL ソニスフィアに出た瞬間は多くの方が睨んでるようにも思えて、“なんだこの子たち”ってところからライヴが始まったんです。でも音楽を通してだんだんとうしろのほうまで人が集まりだしてきて、それがステージ上からすごくきれいに見えるんですよ。前からうしろへだんだんと手が広がっていき、声が大きくなっていくっていう光景を実際に目にすることができたんですね。それこそ最初は批判的だったところから、最後は BABYMETAL ってすごいじゃんっていうのを、あのたった 30 分くらいの間に見ることができたんです。“私たちって、人の心を動かしたんだ”って。異国の地で、しかも昔からメタルを聴いてきた人たちの心を動かしたんだっていうのを見ることができたのがソニスフィアでしたから。“あれができたら大丈夫でしょ”っていう、それぐらい大きな自信につながったライヴがソニスフィアだと思いますね。

この“アウェイも楽しんで、いつの間にか全体を巻き込んでしまう”というのが何よりも BABYMETAL の強みであり、その魅力があってこそ成せる業と言えるだろう。昨年参加した［グラストンベリー・フェスティバル（UK）］もその好例のひとつだ。

MOAMETAL メタルじゃないフェスに参加するので、正直どういう反応なのか心配はしていました。周りの人たちがすごくポップなのに対して私たちはメタルなので、ちゃんと伝わるかとか、伝わってもそんなに盛り上がらないんじゃないかなという気持ちもあったんです。でも実際にやってみたら楽しかったですね。どんどん盛り上がっていく感覚は、今でも鮮明に思い出せます。

こんな MOAMETAL のハートの強さも、BABYMETAL に不可欠な強力な武器なのである！

MOAMETAL 難しいところに行けば行くほど楽しめちゃう（笑）。昔から、なんでも楽しめちゃう性格ではありますね。たくさんの国をまわって怖さを覚える反面、メタルのハートみたいなものもいろんなメタルのアーティストさんたちに教えてもらったので。そこも成長できてたのかなと思います。

彼女たちにとっての大いなる糧となっているのが、メタル・シーンのトップ・バンドと多数共演し、そのパフォーマンスを間近で観てきたこと。彼らから託されたアティチュードは、ふたりのなかにも宿り赤々と燃えている。

SU-METAL 多くのレジェンドたちのライヴを目の当たりにしてきて……まずメタルの音楽ってなんなんだろう？というところから勉強させてもらったんです。［SUMMER SONIC 2013］でメタリカさんのライヴを観たときに、心に直接ズドンと響く音楽というものを初めて聴いて。耳じゃなくて心で聴く音楽っていうか、直接体にストレートに刺さってくるっていう感覚を初めて感じたんですね。それまでメタルという音楽についてまだよくわかっていなかったんですけど、心からの叫びで、心を突き動かすもの……これがメタルなのかということを知って。だからこその重たい音だったり激しいリズムだったり、そういうものに対する意味っていうのはちゃんとあるんだなっていう。

MOAMETAL レディ・ガガさんとか、レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、ブリング・ミー・ザ・ホライズン、メタリカさんも思い浮かぶんですけど、私たちにとってメタル・ゴッド、メタル・マスターっていうか、神的存在なのはジューダス・プリーストさん。形を変えても、ずっとメタルの魂を大切にしているグループじゃないですか。それを知ってたし、メタルの道を切り開いてくれた人だから、正直ちょっと怖かったらどうしようと思っていたんですけど、実際初めて会ったらすごく優しくて。イカツイ衣装を着ているのに、こんなに温かい心を持っている人なんだって。そこからメタルの人たちって本当に温かい人ばかりだなってことに気づけたんです。しかも“ステイ・メタル”って、自分たちのメタルを貫いてって言葉をかけてくれたので。もう、私たちにとってはいつまでも先輩で、いつまでもカッコイイ人たちだなと思います。だからジューダス・プリーストさんを含めて私たちと出会ってくれた大御所のメタラーさんたちは、みんな温かくて自分たちの信じてる音楽を大切にしていて、音楽だけじゃなく人として尊敬できるなと思っています。

そう、ヘヴィメタルとは信念であり、そこに向かい突き進んでいく音楽なのである！

MOAMETAL そこは通ずるところだなって思います。形が変わっても自分たちの信念は変わっていないじゃないですか。それはほかのグループでも言えると思うんです。どんな形でも自分たちの信じるものを突き詰めて、自分たちをちゃんと表現できるグループってカッコイイなと思うので、BABYMETAL もそうでありたいなと思います。

また SU-METAL はフロント・ウーマンとして、ラムシュタインからサウンド面以外にも大きなヒントを得たようだ。

SU-METAL ラムシュタインさんって、ドイツ語で歌われているじゃないですか。それがちゃんと届いている。大規模なフェスのトリでライヴをやって、ドイツ語圏じゃないはずなのに、なぜかホームになっているっていうその感覚がすごくて。だから私たちが目指すべきものって、こういうところなのかもしれないっていうのが見えたライヴでしたね。

見る者の印象を次々と塗り替え、日々新しい姿を見せてくれるふたり。では自分たち自身による BABYMETAL への認識の変化とは？

SU-METAL 2018 年は BABYMETAL というものを改めて考え直すことにもなって。今まで BABYMETAL がやってきたことってなんだったんだろう？と振り返るきっかけになったタイミングで、BABYMETAL って結構すごいことやってるんじゃない？っていうのを知ることができたりとか（笑）。いろんなタイミングで少しずつ、気づいていったという感じですね。

MOAMETAL 私はいまだに客観視できているのかわからないです。ステージの上には別の自分がいる……というか、BABYMETAL の MOAMETAL はステージ

を降りた自分とは別の人間だなと思っていたりもして。別の自分がパフォーマンスをしてくれていたり、冷静に見つめてトラブルに対処していたり、無意識に動いていたり……ステージって不思議な場所だなと思いますね。

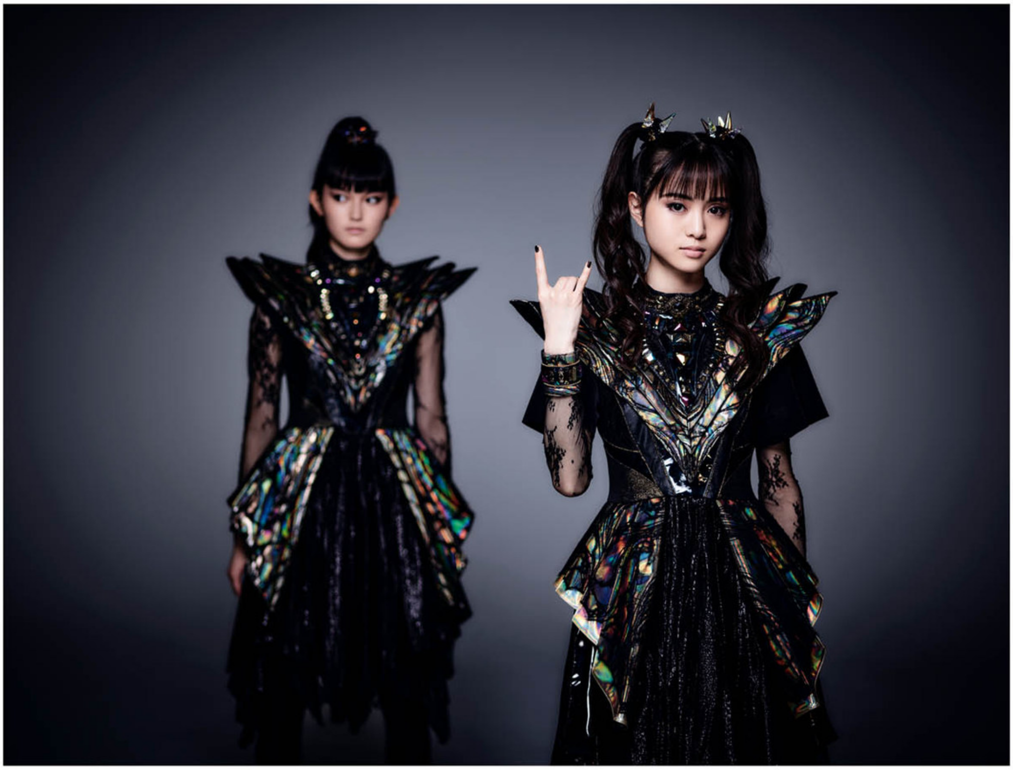
SU-METAL 逆に別の自分じゃないと、あんなに大人数の前で歌ったり、踊ったりなんてできないだろうなと思います。最初の頃は笑われたりもしていて、それに対して恥ずかしいと思ったり怖いなと思ったりする場面もありましたけど、"SU-METALだったらなんかイケる気がする"、"SU-METALならやってくれるんじゃないかな"っていう謎の自信があって……自分でも不思議な感覚なんですよね。同じ人間のはずなのに、別人格が自分のなかに存在していて。"どうやったらSU-METALがカッコよくなるんだろう"、"どうやったらSU-METALはこのステージのなかで自由になれるんだろう"みたいに、自分なんですけど、SU-METALにはカッコよくいてほしいなって考えていて。

先にSU-METALが語ったように、10年に及ぶBABYMETALの歴史のなかでの最大級の機転と言っていいだろう《METAL RESISTANCE 第7章》……"ダークサイド"と呼ばれる2018年時期のこと。三位一体だったBABYMETALからYUIMETALが脱退し、現在のふたり体制となって、新たな形を模索していった"新・創造の時代"だ。この時期をMOAMETALはこう回想する。

MOAMETAL BABYMETALというものをもう一回考え直してみたりとか、BABYMETALで大切にしていたものって何だったんだろうとか。自分の存在意義もそうだし。いろんなことを考えたタイミングでした。全然違う体制でライヴをまわっていくなかで、自分たちがBABYMETALっていう枠にハマりすぎていた、自分たちで自分たちを縛っていたことに気づけたり。最初はおもしろいことをやるのがBABYMETALだったのに、あまりにも"BABYMETAL像"というものを守りすぎて、真面目にやりすぎていた部分にも気づけたんです。もっと楽しんで、純粋にこの音楽を伝えたいって気持ちを持ってやればいいよねっていうのをSU-METALともたくさん話したし。BABYMETALの存在意義と同時に、SU-METALの大切さもしっかり気づけた時期ですかね。

自分たちの核を見つめ直すことは、結果として互いの絆を改めて確信し深め合うことができた時間でもあったということだ。

ここからは、BABYMETALの音楽面に目を向けてみよう。ライヴ・アクトとしての彼女たちに絶対欠かせないのが生バンド=神バンドの存在で、彼らと生み出す轟音こそがBABYMETAL流ヘヴィメタル・サウンドの真骨頂とも言える。このバンドとの融合は、当初は本人



たちにも大きな衝撃だった。

SU-METAL　2013年に初めて全曲生バンドでのツアーをやったんですが、その初日の公演が大阪だったんです。それまでCDで聴いていた音源が、実際にプレイする音楽になると別の曲みたいになるんだなって感じたのを覚えています。全部通して生バンドでBABYMETALの曲をやったときに、何かが覚醒したというか。アドレナリンが出すぎて、新しい自分が生まれた瞬間だったんですよ（笑）。自分はライヴをしているんですけど、それを客観的に見ている自分もいて。"こうやったらこの音が出るよ"とか"こうやったらお客さんはこういう反応をしてくれるよ"っていう、すごく冷静に自分を引っ張ってくれる自分が現われて、実際にそのとおりにライヴをやったらものすごくうまくいく。導かれるように、思ったとおりのライヴができたんですよ。やっぱりお客さんも生のバンドでの音を聴いて熱量が上がって、私もその熱量を受けて覚醒して。うしろからの音圧もすごかったと思うんですけど、そういういろいろなものも含めて、蛹から蝶になるみたいな覚醒をしたっていうライヴがあった。これこそがメタルのライヴなんだっていうのを知ることができましたね。

どんな音楽ジャンルにせよ、オケと生バンドでは、当然ながらオーディエンスの受け方は大きく違ってくる。それは生演奏を重視するメタル・シーンではなおさらだ。これを機にBABYMETALに本格的にハマった、あるいは"認めた"……"認めざるを得なくなった"という従来からのメタル・ファンも少なくはないはず。

SU-METAL　フェスとかでもバンドさんが音出しをしていると、何かおもしろいことが始まるんじゃないかってお客さんが集まってくださることも多いんです。やっぱり神バンドさんたちのあの演奏は、BABYMETALを作っている大切な要素だなと感じます。

MOAMETAL　私たち自身もバンドさんの演奏がすごく好きで。「Catch me if you can」の前奏が伸びているバージョンでは神バンドさんがひとりひとりソロでパートを回してくださるんですけど、私たちは袖からそれを観るのがすごく好きで。

今では神バンドのいないステージは考えられないが、バンドとともにパフォーマンスをし始めた頃は、やはり難しさもあったのでは？

MOAMETAL　難しいっていうよりも衝撃的。難しいよりも、めっちゃ楽しいっていうのが勝ちました。だから、踊り忘れるほど楽しんでしまったし、聴き惚れて魅了されてしまいました。

バラエティ豊かなナンバーを誇るBABYMETALだが、国や地域によって、その反応に違いはあるのだろうか？

SU-METAL　フェスだったりワンマンだったりでも変わってくるので、一様には言えないんですけど、「ギミチョコ！！」は

――お客さんも生バンドの音を聴いて熱量が上がって、私もその熱量を受けて覚醒して。
-SU-METAL

初めて観た人でも多くの方が知ってくださっているなと思います。ほかにも「メギツネ」だったり「KARATE」だったりは振り付けにも日本的な要素が入っていることもあって人気なのかなと思います。

MOAMETAL　毎回思うのは、海外の方たちって反応が素直というか、フェスでもいいと思ったらすぐ手を上げてくれる。だからフレンドリーな雰囲気がライヴでも伝わってくる気がしますね。肩を組んで盛り上がったりとか、キツネ・サインを掲げて素直に反応してくれたりとか、そういうのはかわいいと思うし嬉しいなと思います。

また、同じ曲でも日本のファンと海外のファンでは楽しみ方に違いがあると、SU-METALが教えてくれた。

SU-METAL　日本だとMOAMETALの合いの手パートをみんなで一緒に歌う、という盛り上がり方なんですけど、海外はどっちかというと、私のパートを一緒に歌ってくださるんですよ。皆さん一所懸命日本語を勉強して、一緒に歌ってくださる。そういう大きな違いはあるなと思いますね。

さらに、ふたりのミュージシャンとして、表現者としての深化をクローズアップしていきたい。自らの体を源とするシンガーだが、この10年でSU-METALの歌唱法に変化はあったのか聞いてみた。

SU-METAL　特に歌唱方法を変えようとは考えていないんです。10年間やっているうちに声が変わったりはするし、BABYMETALの曲の形も変わっていて、少しずつ大人っぽい曲とかも増えてきていて。私にとっては毎回BABYMETALの曲が新たな挑戦状だと思って受け取っているんですね。『BABYMETAL』（2014年）のときは1stならではの挑戦があって、2nd（『METAL RESISTANCE』2016年）は2ndの挑戦があって、3rd（『METAL GALAXY』2019年）は3rdの挑戦があるから、それぞれのアルバムが出るタイミングでそれぞれの曲によってなのかな。

つまり、言い換えれば常に新たな歌声を作ってきたということか。

SU-METAL　楽曲を与えられた時点で、その曲の世界観を自分なりに想像して形を作るんですけど、それがまたライヴでお客さんが観たときには印象が変わっていることもあって。“あれ？　意外とこの曲ってこういう曲なんだ！”というのを知って、“じゃあこういう風にしたらおもしろいのかな”とかもあったり。そのなかでも私にとって特にチャレンジだったのは、3rdの曲だと思うんです。それまでは、どちらかというと私の声に合う曲を作っていただいていたんですね。それが3rdからは曲の作り方が少し変わったというか、曲に私が合わせていくって風に少しずつ変わっていって。多くの曲でいろいろな方をフィーチャリングしていたのも影響してると思うんですけど、今までと比べてよりバリエーションが広がっていて。私自身3rdのレコーディングを通していろいろな歌声の一面を知ることができたし、BABYMETALとしての自分たちの音楽の幅の広さも感じられたんです。

挑戦的な楽曲とは逆に、純粋に歌っていて楽しい曲も知りたいところ。

SU-METAL　「ギミチョコ！！」は楽しいですね。どこの会場に行っても知っている方がいるし、海外ではみんなが独自のダンスを作って勝手に踊っていたりするんですよ。MOAMETALがめちゃめちゃちょっかいを出してくるので、そういう意味の楽しさもあったり（笑）。

MOAMETAL　これからもちょっかい出さなきゃ。それが私の楽しみポイントなんです（笑）。

SU-METAL　ライヴ中にどんな風にイタズラしようかとか考えているらしく（笑）。

“もちろん、それはSU-METALのためですから”と、MOAMETALは笑う。そんな彼女のダンスも作品を経るごとに求められることは高くなり、そしてそれを上回るパフォーマンスで応えていく。特に近年作の、ひと筋縄ではいかない楽曲に合わせたダンスは目を見張るものがある。

MOAMETAL　スキルアップできてるんですかね？　そう思ってもらえているなら幸せです。3rdアルバムに関しては、今まで全然やったことのないバレエとか、ヒップホップとかジャズとか、コサック・ダンスとかいろんなものに挑戦して。曲の世界観を伝えるためにあるダンスだけど、それを表現できているのかっていう部分は、ちょっと不安要素としてあったんですよ。でも10年間やってきて、継続は力なりじゃないですけど、継続してきたことは無駄じゃないと思えているので。練習を積み重ねることで、ちょっとずつそのハードルにたどりつけている感覚はあります。

その難しい挑戦が楽しいと言えるのも、やはりMOAMETALらしい。

MOAMETAL　楽しいって言い聞かせている部分もあるかもしれないですけど（笑）。難しいことは大変だなって思うけど、それと同じようにSU-METALも一緒に大変さを味わってくれているので。ひとりじゃないので頑張れていますね。

もうひとつ、ダンスという点で聞きたいのが“アベンジャーズ”とのコンビネーションだ。YUIMETALが抜け、サポート・ダンサー＝アベンジャーズとステージをともにすることになったわけだが、完成されたBABYMETALの世界観であるから、通常はアベンジャーズ側がMOAMETALに寄り添ったパフォーマンスをすると思いきや……。

MOAMETAL　アベンジャーズ・シリーズのときは、時間もなかったので私が合わせる形でした。それをやったことで、自分にない要素にも気づけたんですよ。ひとりひとり違うからこそ“今日はこういう踊り方をすればいいんだ”とか、SU-METALとも話して“今日はこう見せてみよう”とか合わせることで、BABYMETALの違う個性を見つけることができた。だからどちらかというと、私たちが寄り添いながらもBABYMETALというものをちゃんと出せるように頑張っていたかなって思いますね。寄り添いすぎてBABYMETALらしさをなくしてもダメなので、その按配は難しくて。寄り添いながらも、崩したくないものは崩

――お客さんと近い会場が好きですね。一緒にライヴを作っている感覚がいつもより大きくなるんです。-MOAMETAL

さないっていう、自分たちの意志もちゃんと持たなきゃいけなかったのが大変でした。

では同じく、純粋に踊っていて楽しいナンバーというと？

MOAMETAL　私、最新の曲が好きなんですよ。新しく入った曲はより新鮮な気持ちで楽しめる。最近だと「Oh! MAJINAI」が好きですね。踊っていて楽しいのに加えて、参加してもらっているヨアキム（ブロデーン）さんの顔のパフォーマンス込みでめちゃくちゃおもしろい曲になっているので、やっていて楽しいです。

ミュージシャンにとっては会場とのマッチングも重要だ。ステージ・サイズから場内の構造、音響面、フロアとの距離などによって、パフォーマンスの方法は大きく変わってくるからだ。日本～世界とさまざまなステージを経験してきたふたりにとって、相性のいい会場とは？

SU-METAL　私は日本武道館が好きですね。歌手になりたいと思っていた小さい頃に見た夢では、自分が立っているステージの上から光が差していて、上から多くの歓声が降ってくるという感覚だったんです。それで武道館のステージで歌った瞬間に“あ、ここだ！”って。武道館に立ったのはあの２デイズ（※2014年３月１日・２日）だけなんですけど、夢が叶ったんだっていうのを悟ったり、360度のステージでお客さんの歓声に全身が包まれながらスポットライトが当たっていて、すごいスターになった気分を味わえたり（笑）。あの瞬間は忘れないと思うし、武道館でまたあの瞬間を味わいたいなと思います。

MOAMETAL　大きいところには大きい良さがあるんですけど、好みでいうと規模が小さくてお客さんと近い会場が好きですね。ありがたいことにどんどん会場が大きくなってきているんですけど、嬉しい反面もっと近づきたいなっていう気持ちもあって、そういうステージだとお客さんと一緒にライヴを作ってるっていう感覚がいつもよりも大きくなるんです。

SU-METALがお気に入りとして挙げてくれた日本武道館だが、ニュースなどでご存じのとおり、彼女たちは来年、同会場にて10公演を行なうことを発表している。この規格外のプランに驚いたファンは多いと思うが、それは本人たちも同じ……？

MOAMETAL　この《10 BABYMETAL BUDOKAN》は、驚いたというより“やってやるぞ！”という決意と熱意でいっぱいでした。コロナ禍でライヴができず、会いたい皆さんに会えない時間が悲しくてしょうがなかったので、とにかく、このような発表ができたことが本当に嬉しいです。

SU-METAL　“10周年なので、何か特別なことがしたい”という話はしていたので、武道館で、しかも10日間もアニバーサリーのライヴができることが本当に嬉しいです。ファンの方と実際に会ってのライヴは約１年ぶりになるので、１年間溜まったいろいろなものを発散していただければ……窮屈な日常を忘れてみんなで楽しみたいですね！　まだ世の中的には無事開催できる保証はないので、今はただ皆さんの健康を祈るばかりです。

MOAMETAL　BABYMETALのライヴはお客さんありきだと思っています。お客さんがいるからBABYMETALのライヴは成り立ちます。だから、とにかく当日まで元気でいて、どんな状況でも心から楽しんで、日々のストレスを発散してもらいたいです！

約６年ぶりとなる武道館公演。初演時はその感慨に浸る時間も少なくなかっただろうが、さまざまなステージを経ての今回は、さらにパワーアップした武道館での姿を見せてくれるはずだ。

SU-METAL　海外に行く前、皆さんに送り出してもらった場所が武道館だったので、世界で闘ってきたBABYMETALをまずは見せたいです。きっと、６年の間に身につけたものはたくさんあるので、前回のライヴとは違う私たちを楽しみにしていてください。

MOAMETAL　あの頃より身長も心も大きくなって、MOAMETALとしてもたくさん成長できている？と信じているので、とにかく今のありのままの自分を出し切ります！

ある意味で前代未聞のプランであり、“METAL RESISTANCE最終章”と銘打たれているだけに、どのような内容になるのか想像がつかない。もう“ゴチャゴチャ言わずに見届けるべし！”ということだ！

SU-METAL　久しぶりに直接音楽を届けられる機会をいただいたので、BABYMETALらしい、なんじゃこりゃ！なライヴがお届けできればと思っています。無事にライヴができるように、皆さん元気でいてください。そして、ライブ会場では私たちとともに最高の１日を作りましょう。

MOAMETAL　やっと皆さんに会えることがとても楽しみです。“最新が最強”のBABYMETALとして頑張ります！　そして、10年間の感謝の気持ちを伝えたいので、ぜひ会いに来てください！

メタルを知らなかった少女たちがBABYMETALとなり、この10年でのさまざまな活動、出会いを通じてメタルの魂を受け継ぎ、ついには世界的音楽のトレンドを自分たちから発信するまでになった。事実、近年は彼女たちを介して新しいメタル・スタイルを知った、さらにはヘヴィメタルそのものに興味を持ったという人も少なくないはずだ。

MOAMETAL　そんな風に言っていただけるなんて嬉しいです。まだそんな存在になっているなんて思えないですけど、そんなありがたい言葉をいただけるなんて本当に幸せです。私たち自身も、私たちより下の世代の人たちにBABYMETALを通してメタルの素晴らしさを伝えたいねっていうのは意識してはいて。それができるんだったら、これからも頑張って伝えていきたいですね。

SU-METAL　私も目標として、若い女の子たちにメタルを聴いてもらえるように、そして日本のことを知らない海外の人には日本のことをもっと知ってもらえるように……そんな架け橋みたいな存在になりたいなと思っています。私自身もBABYMETALを通して、メタルだったり音楽の世界というものを勉強することができたから、メタル

入門じゃないですけど“ベビーメタル”なんですよね（笑）。実際にファンの方から“BABYMETAL を通して日本語を勉強しようと思いました”とか“日本のカルチャーについておもしろいと思った”とか、そういう意見をいただいたり。現時点ではまだ実感は湧いていないんですけど、BABYMETAL がそういう人たちの幅を広げるお手伝いができているのであれば、これからもその活動はしていきたいなと思いますね。

ポップ・ミュージックが主体となるグラストンベリー公演への出演は、重低音が自慢の BABYMETAL にとって新たなチャレンジであり、ヘヴィメタルの魅力を他ジャンルのファンに知ってもらおうという彼女たちの使命のひとつを全うする大きなチャンスでもあった。

SU-METAL　メタル・バンドはブリング・ミー・ザ・ホライズンと私たちしかいなかったんです。そんななかで、私たちの曲はポップで乗りやすいメロディだったりもするので、振り付けをマネしたくなったり、衣装がかわいいとか、そういうところから入ってくる方もたくさんいて。そこからリズムがめちゃめちゃカッコイイとかギターの音がカッコイイとか、そういう風に少しずつお客さんが増えていって。BABYMETAL の曲って聴けば聴くほどおもしろいし、観れば観るほどいろんなことに気づける音楽だから、そういう風に幅が広がっているのかなと思いましたし、そういう風になればいいなとも思いますね。

MOAMETAL　メタルだけじゃなくて、音楽全体を盛り上げられる存在になれたら最高ですね。

MOAMETAL のこの言葉は、2021 年の音楽シーンを動かす重要な意味を孕んでいると感じるのは、我々だけではないはず。改めて言うまでもなく、今や BABYMETAL は日本を代表するヘヴィメタル・アクトのひとつであり、メタル・カテゴリーを跳び越え、日本の最新音楽を世界で鳴らす旗手でもあるのだ。当然、彼女たちを目標とする若い世代のミュージシャンも出てきている。SU-METAL に、そんな後輩たちにアドバイスはあるかと水を向けると……。

SU-METAL　私たちなんか、まだアドバイスするような立場ではありません。ただ私たちが経験したなかで言えることは、“音楽ってなんでもアリ”ということ。BABYMETAL は批判されるところから始まっていったけど、批判されるってことはそれだけ大きな衝撃を与えられたわけだし、海外でも日本語で闘っているけど音楽が良ければファンの人はちゃんと理解してくれる。いろんな方と音楽でつながることができる。だから言語なんて関係ないんだなって。メタルだとかメタルじゃないとか、そんなことも関係ない。ちゃんと自分の伝えたいことだったり、やりたいこと……そこにすごく強い思いがあれば、壁は壊していけるはずだから。一番重要なことは、自分が何をやりたいのか、どんな音楽を届けた

いのか……そういう自分を曲げないこと。

この言葉こそ、BABYMETAL がこの 10 年間実践してきたこと、そのものだ！

SU-METAL　BABYMETAL もずっと自分たちを曲げないで、自分が楽しいと思ってきたものを伝え続けてきたつもりなので。そこの志がしっかりとしていれば見てくれる人は絶対にいると思うし、おもしろい音楽がどんどんできてくるんじゃないのかなと思います。

MOAMETAL　そのとおりだと思います。自分たちの道を信じているなら、やり続けてほしいなと思います。やめたらそこで終わってしまう、成長は止まってしまうので。だから“やり続けたらいいよ”って言葉と“楽しんで”ということを伝えたいかな。

新たなラウド・ミュージックの発展と、日本音楽が世界へと羽ばたくための先導という両軸を担う BABYMETAL。最後はその意気込みを聞いて、今回のインタビューの幕としよう。

MOAMETAL　両軸を進めるなんてできているのかなって考える部分はあるんですけど、私はとにかく BABYMETAL っていう音楽を信じているし、まわりで支えてくださった皆さんのことが大好きだから、私たちの信念を曲げずに、好きな物は好きって、イイものはイイって言える世界作りに貢献できたらいいなと思います。

SU-METAL　コロナの期間、みんな家にいなきゃいけなかったり、将来に対する不安だったりいろんな思いを抱えていて、そういうナイーブになってしまうときだからこそメタルの音楽ってすごく大きな意味を持つんじゃないかなと思っていて。ヘヴィメタルは心に直接届く音楽だって、強いメッセージがある音楽だって思っているんです。あのサウンドに乗っている志の強い歌詞だからこそ、ものすごく心に響く。今の時期だからこそメタルの音楽が人々の心を支えてくれる、そんなものになればいいなと思います。私は『METAL GALAXY』を出す前に BABYMETAL っていうものを分解して、そのなかで BABYMETAL の一番大切な軸となるものを取り出して、自分たちが本当に伝えたいものってなんなんだろうっていうのを考えた時期もあったんです。そのなかで見つけた BABYMETAL らしさというものを、しっかりと曲げずに伝え続けていかなきゃいけない。きっと私たちの音楽を通じて、これからもおもしろい音楽に出会ってくださる方々がたくさんいるんじゃないかな。だから私たちは私たちらしく、自分たちの楽しいと思ったことを届けていけたらいいなと思います。

そう、この瞬間も多くの音楽ファンが BABYMETAL に対してさまざまな期待、想い、感情を持って接しているだろう。ただ彼女たちにはなによりも、自分たちがいいと思った道を突き進み、BABYMETAL だけの未来を創ってもらいたい。それが結果として、ヘヴィメタルの明日への架け橋になっていくのだから。

無限の可能性を持って～BABYMETAL“世界征服”への軌跡

BABYMETALの10年間を振り返ると、誇張ナシに“空前絶後”という四字熟語がしっくりとハマる。過去に例がなく、未来にもなかろうと思われる夢物語を現実化させている彼女たち。その功績は当事者でさえ想定外の出来事が多かったはずだ。日本はもちろんのこと、特に海外における活躍ぶりは前例が見当たらないほどの人気と支持を獲得している。では、なぜこれほどまでにBABYMETALは世界で受け入れられたのだろうか。

文：荒金良介

Profile

大分県出身。1999年からフリーの音楽ライターとして執筆。基本は毎日メタルを聴いてます。BABYMETALにはさまざまな国に連れて行ってもらえましたが、メキシコ公演では市内の電車内で3人の男性に囲まれ、一瞬でお財布を盗まれました。皆さんスリには気をつけてください。

Photo taken at (Sonisphere Festival UK), Knebworth Park
Date:5th July 2014
©Amuse Inc

BABYMETALの名を世に知らしめ、“世界進出”の起点となったのは間違いなくイギリス最大級のメタル・フェス［ソニスフィア・フェスティバル2014］の舞台だろう。SU-METAL、MOAMETAL、YUIMETALの3人は約6万人のオーディエンスを前に物怖じしないパフォーマンスを展開。お約束の「BABYMETAL DEATH」で幕を開け、次の「ギミチョコ!!」では“ラララ～♪”と観客が鼻歌風に歌ったりと、MVを通した現地の認知度も異常に高かった。ラスト曲「イジメ、ダメ、ゼッタイ」においてはふたつのサークル・モッシュを作り上げ、全5曲という短いセット・リストだったものの、世界に“メタル・ダンス・ユニット”の魅力を存分に叩きつけ、初渡英にして大成功を収めた。

海外ファンのアドレナリンを噴出させた唯一無二のパフォーマンス

まず海外進出の足掛かりとなった［ソニスフィア・フェスティバル 2014］への出演はメディアでも取り上げられ、大きな話題となった。プロディジー、アイアン・メイデン、メタリカをヘッドライナーに配した３日間に及ぶ英国最大のメタル・フェス２日目（７月５日）に BABYMETAL は登場。メイン・ステージの 12 時 10 分という早い時間帯にもかかわらず、彼女たちを観るために現地のメタル・ヘッズが群がり、ヘッドバンギングやサークル・モッシュに加え、メロイック・サインを掲げて歌いあげ、また、彼女たちの振りつけをマネして楽しむ人もいた。

海外のフェスでは凡庸なパフォーマンスをやればペットボトルが投げ込まれることもあり、日本とは比較にならないほど観客のジャッジは厳しい。そんな状況下、BABYMETAL は曲が進むにつれてステージ周辺に大勢の人たちが押し寄せ、気づけばはるか後方まで黒山の人だかりが築かれていた。10 代の少女たちが約６万人の観客を沸かせる光景は壮観の一語に尽きた。また、この２日後の７月７日にはイギリス初の単独公演をザ・フォーラムで行ない、約 2300 人の観客を熱狂させている。このふたつのライヴを現場で観た際、“新種のメタルを観た！”という観客の素直なリアクションが印象的だった。

誰しも未知のものに触れたときは好奇心を刺激され、体中からアドレナリンが出てくるものだ。BABYMETAL は海外の人たちの未体験のツボを押すことに成功した。特に新しい音楽スタイルに寛容であり、ヘヴィメタルがカルチャーとして根付いたイギリスとは相性が良かったのかもしれない。

もっと言えば、海外にはレディー・ガガのようなポップ・アイコンは存在するけれど、日本で言うところのアイドル文化がないため、BABYMETAL の音楽に対して偏見や色眼鏡を持たずに接しているフシがある。要するにニュー・タイプのメタルとして純粋に楽しんでいるのだ。超絶技巧を誇る神バンドのメタル・サウンドに対して、10 代の少女とダンスという従来の様式を転覆させるヴィジュアル要素が加わり、“メタルで踊る”という誰も発想しなかったコンセプトに多くの人たちが吸い寄せられたのではないか。ヘンな言い方になるが、アイアン・メイデンやメタリカはステージで踊ったりしない。いや、踊ってもらってもメタル・ファンは困惑の表情を浮かべるだけだ。しかし、BABYMETAL は“メタルで踊る”という斬新なアイディアを武器に、メタル・ダンス・ユニットという唯一無二のフォーミュラを構築した。

AC/DC の音は聴けばすぐに AC/DC だとわかる。それは彼らが作り上げた無二のフォーミュラである。BABYMETAL は音を聴き、パフォーマンスを観て、聴覚と視覚の両方で楽しめる総合エンターテインメントとして、メタル界に新風を吹かせてくれたのだ。

ワールドワイドへ～世界快進撃を読み解く

2014 年はイギリスにおける好リアクションを追い風に、初の単独公演からわずか４ヵ月後にモーターヘッドのライヴ盤『ライブ・アット・ブリクストン』（2003 年）のジャケでもお馴染みの O2 アカデミー・ブリクストンで二度目の単独公演を敢行、なんと５千人のキャパをソールド・アウトさせている。

ここで注目すべきは、未発表の新曲「Road of Resistance」（※のちに 2nd アルバム『METAL RESISTANCE』に収録）を初披露したことだ。SU-METAL、MOAMETAL、YUIMETAL の３人が BABYMETAL のロゴが入った黒旗を持ってステージに現われ、荒馬に乗って鞭を打つ大胆な振りつけを施し、“進め　道なき道でも”と堂々歌いあげた。しかもこの曲では“ウォー！　ウォー！”とライヴを意識した合唱パートを初めて導入し、異国の観客をひとつに束ねていく。最強のメロディック・スピード・メタルを掲げ、ここから世界を切り拓こうとする BABYMETAL の新たな切り札とも言えるナンバーだった。

2015 年の BABYMETAL はさらに活動をワールドワイドに広げていく。カナダ、メキシコ、アメリカ、ドイツ、フランス、スイス、イタリア、オーストリアと武者修行のツアーへと旅立つ。イギリス以外の国では BABYMETAL はどのように受け入れられたのか？　総じて何か物が飛んだり、ブーイングなどは起きることなく、どの国も熱狂的な盛り上がりを記録している。

特に刺激的だったのは、《WORLD TOUR 2015》初日にあたるメキシコ公演（５月９日）。会場には 4000 人の観客が詰めかけ、開演前 BGM にパンテラの「ウォーク」が

流れるや、拳を突き上げて大声で歌い出す人たち。いざ本番が始まると、全身の毛穴で吸収するかのごとくお祭り騒ぎを呈し、メキシコのメタル・ヘッズの熱さに圧倒された。

ただ、メキシコ市は標高 2000 メートル以上の高地にあるために酸素が薄い。ライヴを観ているだけで汗が吹きこぼれてきたので、ステージ上は想像を絶する暑さだったに違いない。そのなかでも BABYMETAL は完璧なショウをやり遂げ、メンタル面においても相当鍛えられたことだろう。

なお、メキシコ公演のみで起きた現象がふたつある。ひとつ目はライヴ中にサイリウムを持って、必死に“オタ芸”に励む観客が十数人いたこと。これには本当に驚いた。日本のアイドル文化はメキシコにもしっかり浸透していたのだ！　ふたつ目はアンコールを求める際に“オーレオレオレオーレ、BABYMETAL！”という大合唱が自然発生したこと。開放的な国民性と言うべきか、音楽を求める姿勢はどの国よりも頭ひとつ抜き出ていた。

その一方、苦戦した場所を挙げるならばドイツだろう。ミューズ、メタリカ、キッスがヘッドライナーを務める 3 日間に及ぶメタル・フェス［ROCKAVARIA 2015］2 日目（5 月 29 日）に BABYMETAL は登場。19 時過ぎに現われ、1 曲目「メギツネ」が始まったものの、品定めするように厳しい視線をステージに向ける観客たち。中盤過ぎに「Road of Resistance」が放たれるも状況はさほど変わらず、厳しい闘いを強いられたライヴだった。彼女たちは終始プロフェッショナルなパフォーマンスを魅せつけてくれたが、フロアの反応は芳しくなかった。

ちなみに世界各地の公演において、観客が着ているメタル T シャツに着目すると、お国柄みたいなものが透けて見えてくる。とりわけドイツのメタル・ヘッズはタンカードやボルト・スロワーなど、他国と比べてもコアな T シャツを着ている人たちが目についた。そうしたリスナーにとって、BABYMETAL の音楽は少々奇異に映ったのかもしれない。

そんな修羅場も潜り抜け、2016 年には彼女たちが“第二の故郷”と位置づけるイギリスにおいて、日本人初となるウェンブリー・アリーナ単独公演（4 月 2 日）を行ない、1 万 2 千人の観客を動員した。結成 6 年目にして、彼女たちはとんでもない偉業を成し遂げたのだ。補足しておくと、現地のメタル・バンドでも単独で 1 万人以上の観客を埋められるアクトはそう多くない。ここでも BABYMETAL は隙のないパフォーマンスで観客を興奮の坩堝に叩き落とし、アリーナでは血気盛んな若者がモッシュを繰り広げていた。

そして、本篇ラストに感動的なシーンが待っていた。「THE ONE」英語バージョンを初披露すると、アリーナとスタンドから世界各国の旗を掲げる観客がたくさん出現したのだ。そう、イギリス以外の国からも彼女たちのライヴを観るために駆けつけたファンが大勢いた。BABYMETAL は結成当初から“世界征服”を公言していたけれど、それも遠い未来ではないのではないかと思わせられる名場面のひとつであった。

Photo taken at (BABYMETAL BACK TO THE USA/UK TOUR 2014), O2 Academy-Brixton
Date:8th November 2014
by Dana (distortion) Yavin

会場に着き《BABYMETAL》の表記の横に“SOLD OUT”と書かれた文字を見たときは我が目を疑った。2014 年 7 月にザ・フォーラムで初のイギリス単独公演を実施、そして、2 度目になる単独公演にて約 5 千人キャパを見事完売！　とりわけラストに放たれた初披露の「Road of Resistance」（当時は曲名もなく、新曲扱いだった）の破壊力は抜群。初耳の観客を興奮の坩堝化させ、第二の故郷＝イギリスという確固たる地盤をここで作った。

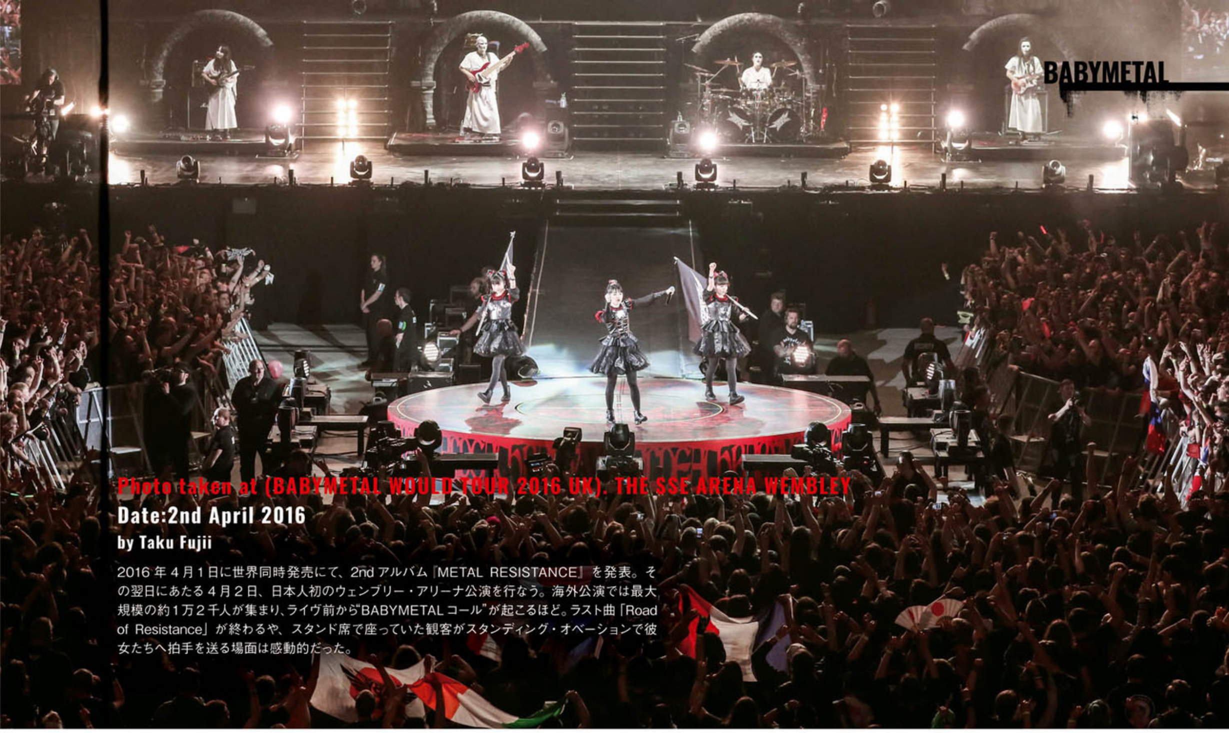


Photo taken at (BABYMETAL WOULD TOUR 2016 UK). THE SSE ARENA WEMBLEY
Date:2nd April 2016
by Taku Fujii

2016 年 4 月 1 日に世界同時発売にて、2nd アルバム『METAL RESISTANCE』を発表。その翌日にあたる 4 月 2 日、日本人初のウェンブリー・アリーナ公演を行なう。海外公演では最大規模の約 1 万 2 千人が集まり、ライヴ前から“BABYMETAL コール”が起こるほど。ラスト曲「Road of Resistance」が終わるや、スタンド席で座っていた観客がスタンディング・オベーションで彼女たちへ拍手を送る場面は感動的だった。

世界のトップ・ミュージシャンと共演
その刺激を新たな音楽へと継承

今なお快進撃を続けている BABYMETAL ではあるが、これまで共演したアーティストにも触れておきたい。レディー・ガガを筆頭に、レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、KOЯN、メタリカ、ガンズ・アンド・ローゼズ、サバトン、ブリング・ミー・ザ・ホライズンなど、改めて書いてもすごいラインナップである。間違いなく世界のトップ・クラスに位置するアーティストたちから、彼女たちはお墨付きをもらったと言っても過言ではない。

また、アメリカの『Alternative Press』誌が主催する《Alternative Press Music Awards '16》ではジューダス・プリーストのロブ・ハルフォードと共演し、「ペインキラー」、「ブレイキング・ザ・ロウ」の２曲で夢のコラボレーション。そうしたつながりを経て、プリーストの最新作『ファイアーパワー』ツアーのシンガポール公演のスペシャル・アクトに BABYMETAL は招かれた。ポップ・アイコンのレディー・ガガからメタル・ゴッドのジューダス・プリーストまで魅了する彼女たちは日本で生まれた規格外のアーティストへと成長している。

肝心の音楽に関しても海外のフェス出演やツアーと経験値を重ねるごとに、作品の幅をフレキシブルに広げてきた。衝撃の 1st アルバム『BABYMETAL』(2014 年) は、メタルとポップスが正面衝突した火花散るケミストリーが痛快であった。今聴いても新鮮であり、雑食性の高い BABYMETAL の音楽的原点はここにある。ジューダス・プリースト、アイアン・メイデン、メタリカ、パンテラ、リンプ・ビズキット、X JAPAN、聖飢魔Ⅱと数多くのメタル・レジェンドたちの血を継承しながら、アイドルやポップス好きをも巻き込むキャッチーなサウンドは大きな魅力である。

繰り返しになるかもしれないが、海外のフェスやツアーにおいて、BABYMETAL が歓迎される理由はヘヴィメタルに対する愛とリスペクトが楽曲を通して伝わってくるからにほかならない。“なんちゃってメタル”では底が見え、簡単にメッキは剥がされてしまう。逆に言うと、メタルという揺ぎない芯さえあれば、どんなジャンルやテイストも咀嚼可能だ。

2nd アルバム『METAL RESISTANCE』(2016 年) は《WORLD TOUR 2015》を経たこともあり、グルーヴ・メタル、バイキング・メタル、ブラック・メタル、プログレッシブ・メタルなど既存のサブジャンルにあえて寄せたわかりやすい曲調が並んだ。

現時点での最新 3rd アルバム『METAL GALAXY』(2019 年) は前２作を踏まえ、さらなる飛躍を遂げた驚愕の１枚に仕上がった。ユーロビートとメタルを結合させたナンバー「DA DA DANCE (feat.Tak Matsumoto)」の突き抜けたメロディ・センスは圧巻だ。ほかにもレゲエ、サンバ、ラテン音楽、シティ・ポップなどジャンルの幅をグッと広げ、メタルは何を取り込んでもいい、無限の可能性を秘めたジャンルであることを彼女たちは証明してくれた。アルバム表題にあるとおり、BABYMETAL にしか作れない“メタル銀河”を描きあげている。

ジャンルの間口を押し広げ、賛否両論は覚悟のうえで未知の領域に踏み込んでいく。BABYMETAL のそうした攻めの姿勢こそが、世界中のリスナーを興奮させている理由だろう。いつの時代も果敢に斬り込んでいくアーティストがいなければ、そのジャンルは発展や成熟もなく、縮小傾向に向かうだけである。これからも BABYMETAL にはアッ！と驚かせてくれるメタル・アイコンとして存在し続けてほしいものだ。

Tracks Analysis of『10 BABYMETAL YEARS』

特集の最後は、最新リリース作となるベスト・アルバム『10 BABYMETAL YEARS』の全曲解説だ。全3枚のフルレングス・アルバムから厳選された10曲を、ここでは特に音楽スタイルをフォーカスして見ていこう。

解説：山本彦太郎

Profile
軽い気持ちで観に行った2014年の日本武道館公演から早6年。まさかこんなに深い沼だとは思いもしませんでした。年末はキツネ面仲間で「紅月 -アカツキ-」対「炎」か？

『10 BABYMETAL YEARS』
トイズファクトリー
※12月23日発売

1. ド・キ・ド・キ☆モーニング
2. ヘドバンギャー!!
3. イジメ、ダメ、ゼッタイ
4. メギツネ
5. ギミチョコ!!
6. Road of Resistance
7. KARATE
8. THE ONE
9. Distortion (feat. Alissa White-Gluz)
10. PA PA YA!! (feat. F.HERO)

※テッド・ジェンセンによるリマスタリング音源

Variations

①

②

③

通常盤（CD）／TFCC-86736 <ジャケット①>
通常盤（レコード）／TFJC-38045 <ジャケット①>
初回限定盤A
（CD＋「ALL MUSIC CLIPS」Blu-ray付）／TFCC-86737 <ジャケット①>
初回限定盤B
（CD＋「10 LEGEND ARTWORKS」付）／TFCC-86738 <ジャケット②>
初回限定盤C
（CD＋「10 LEGEND MOVIES」Blu-ray＋ポスター付）／TFCC-86739 <ジャケット③>

※上記のほか“THE ONE 会員”用限定盤など、全10バリエーションにてリリース。

Track-1

「ド・キ・ド・キ☆モーニング」

from『BABYMETAL』

FOR FAN OF:
パンテラ／マシーン・ヘッド

“Kawaii メタル”の狼煙を上げた記念すべきデビュー曲。パワー・コードを横移動させることで粘りを生み出すギター・リフや、連打ではなくアンサンブルにシンクロするバス・ドラムなどは、パンテラ以降のグルーヴ・メタルのアプローチと言えるでしょう。80sLA メタル的“ヘビメタ”のわかりやすいイメージではなく、90年代的ヘヴィネスをチョイスした点に本気度がうかがえました。

Track-2

「ヘドバンギャー!!」

from『BABYMETAL』

FOR FAN OF:
ソイルワーク／Peaceville Records関連

短いリフを執拗に反復するギター、そこから生まれるトランシーな酩酊感は、一聴デジロック的ともインダストリアル・メタル的とも取れるアプローチ。そこに、トレモロ・リフや怒濤の2バス連打といった、デス・メタル～エクストリーム・メタル的展開が合わさることでメタル度をアップさせています。ミサ要素を盛り上げるクラシカルなパートはゴシック・メタル風味満点！

Track-3

「イジメ、ダメ、ゼッタイ」

from『BABYMETAL』

FOR FAN OF:
アングラ／ソナタ・アークティカ

純度100%のメロディック・スピード・メタル。ただ、元祖であるハロウィンを始めとする、いわゆる“ジャーマン・メタル”というよりは、アングラやソナタ・アークティカなど後発組に近いモダンさも感じられるのが、クサさをひたむきさに転換する大きなポイントかも。ヴォーカル・メロディと同等にフィーチャーされるメロディアスなツイン・リードも、このスタイルの聴きどころDEATH。

Track-4

「メギツネ」

from『BABYMETAL』

FOR FAN OF:
フォーク・メタル全般／エンター・シカリ

三味線や篠笛的音色、祭り囃子の合いの手、四七抜き音階など和の要素を強く押し出した楽曲で、民族性が全面に表われているという点でフォーク・メタルと解釈しても良さそう。ただ、シンセ・ブラスをフィーチャーしたメイン・リフや、ひたすら重厚にバッキングを刻むギターなどは、2000年代半ばのニューレイヴ的アプローチをメタルコア流に発展させたとも言えるかもしれません。

Track-5

ギミチョコ!!

from『BABYMETAL』

FOR FAN OF:
TAKESHI UEDA 作品全般／メタリカ

作編曲を担ったTAKESHI UEDA（AA=／元THE MAD CAPSULE MARKETS）のカラーが如実に表われた、スラッシュかつインダストリアルな楽曲。一般的にこのスタイルは曲調やリズムが大きく変化しませんが、無機質かつ無調的なAメロと、シンコペーションが連続する明るいサビの対比がこの曲の魅力となっています。サビのコードの5度音が半音ずつ変化していく浮遊感もクセになります。

Track-6

「Road of Resistance」

from『METAL RESISTANCE』

FOR FAN OF:
ドラゴンフォース／ジューダス・プリースト

ハーマン・リとサム・トットマンが録音に参加したように、ドラゴンフォース直系なメロディック・スピード・メタル。イントロダクションから本篇へという組曲的流れは、ジューダス・プリースト、ハロウィン、アイアン・メイデン、X JAPANなど枚挙に暇がないヘヴィメタルの伝統です。また、中間部のシンガロング・パートも、観衆との一体感を生み出す、これまたヘヴィメタルの醍醐味。

Track-7

「KARATE」

from『METAL RESISTANCE』

FOR FAN OF:
ペリフェリー／アタック・アタック!

ヴォーカル・パートだけ見れば「ギミチョコ!!」と似た構成ながら、こちらはミドル・テンポの超重厚なジェント曲。とにかくギター、ベース、ドラムが一体となって数学的とも言える細かなリズムを刻む、メイン・リフや2番のAメロなどが圧巻です。1番と2番でのリズムの倍速変化や、今や定番となったライヴでのジャンプ扇動を見据えた緩急など、一本調子にならない構成が見事!

Track-8

「THE ONE」

from『METAL RESISTANCE』

FOR FAN OF:
ドリーム・シアター／シャドウ・ギャラリー

もとは1曲だったという「Tales of The Destinies」も含めてドリーム・シアター直系のプログレ・メタルと言えますが、本曲はスローなバラード面を押し出したもの。ただ、Aメロにしろサビにしろ、クラシカルかつ細かなアルペジオがバックでずっと鳴っており、歌いこなすには相当のスキルが必要そう。シャドウ・ギャラリーの手法に近い感じで、フツーのバラードとはワケが違います。

Track-9

「Distortion (feat. Alissa White-Gluz)」

from『METAL GALAXY』

FOR FAN OF:
アーチ・エネミー／アマランス

アルバム版ではアーチ・エネミーのアリッサ・ホワイト＝グラズが客演したように、エレクトロニコア色も強いハイ・スピードなメロディック・デス・メタル・チューン。グロウルとの問答のようなAメロからパッと開くサビが印象的で、従来のメロデスのグロウル&クリーンとも、男女混成バンドとも異なるサウンドを生み出しています。音の暴力とでも言うべきバスドラの連打も強烈DEATH。

Track-10

「PA PA YA!! (feat. F.HERO)」

from『METAL GALAXY』

FOR FAN OF:
スキンドレッド／マス・メンタル

タイ語でまくし立てられるラップもフィーチャーしたサマー・パーティ・ソングで、"○○メタル"というよりは2000年代Jレゲエ／ヒップホップをアグレッシブにしたイメージ。強いて言うならばレゲトン風リズムもあってラガメタルが近い雰囲気なのかも。日本の民謡色やタイの伝統音階も新鮮な魅力ですが、どことなく漂う寂寥感はミューズの「ナイツ・オブ・サイドニア」のウェスタン風味も感じさせます。

ブラック・サバス『パラノイド』50年目

『PARANOID』50TH ANNIVERSARY BLACK SABBATH

ヘヴィメタルの開祖であり、今なお後進へ多大な影響を与え続けるブラック・サバスの作品群のなかでも、特に広い層に親しまれる楽曲が収録された1枚と言えば、2nd作『パラノイド』を挙げて異論はないだろう。1970年9月にリリースされた本作は今年で50周年を迎えたわけだが、そのドゥーミィかつキャッチーな曲たちの魅力はいまだ衰えず。リアルタイムではない若いミュージシャンにも、今もって愛聴されている。そこで本特集では、メンバー＆関係者による各曲への証言からリー・ドリアンによる考察など、さまざまな角度から『パラノイド』が作ってきた混沌たる道をたどってみたい。

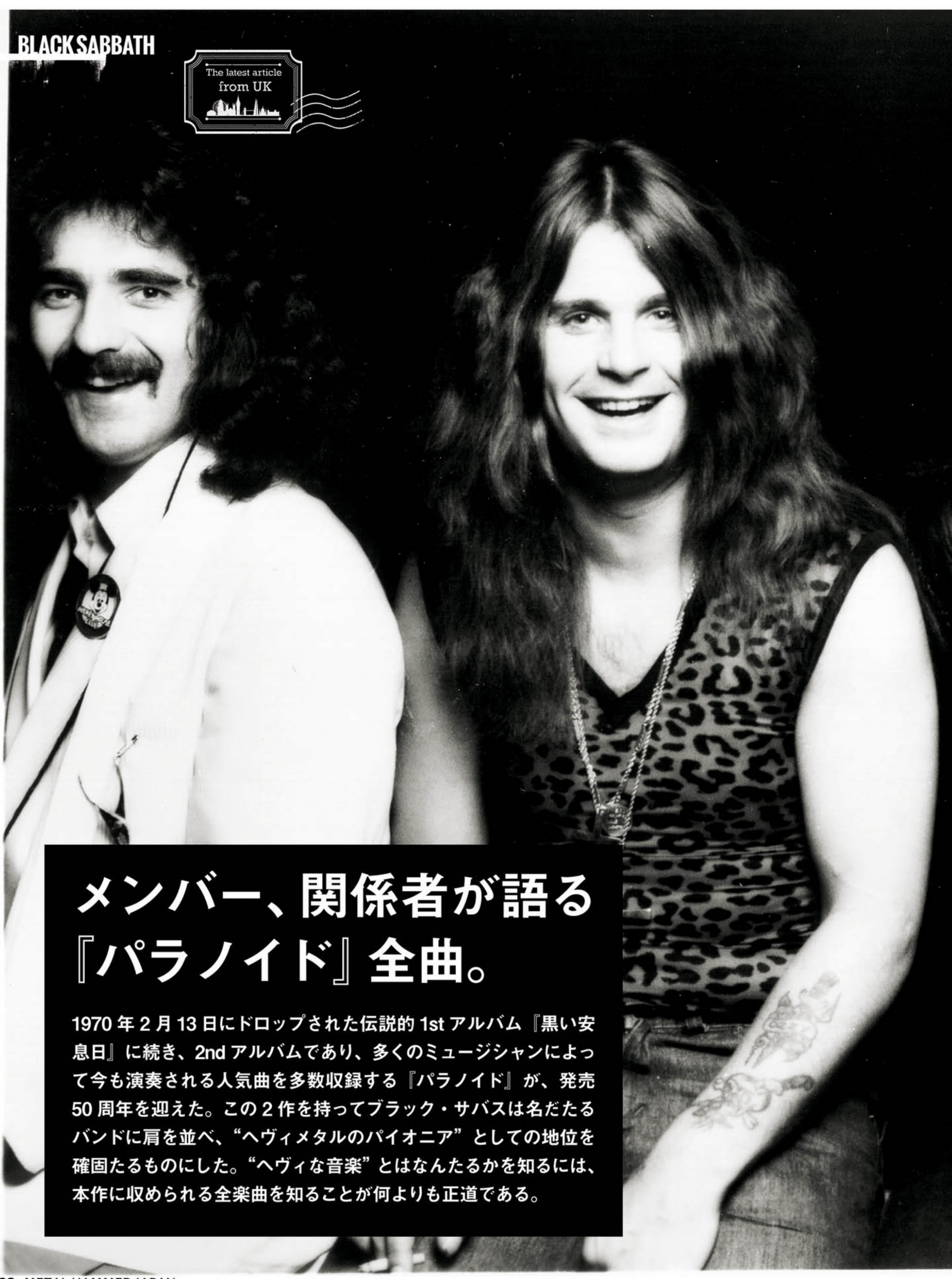
CONTENTS

#1
OH, LORD YEAH!　メンバー、関係者が語る『パラノイド』全曲。
#2
1970年——ブラック・サバスは何に生み出され、何を生み出したのか。
#3
英式闇滅低音を継ぐ男　リー・ドリアンの『パラノイド』考察
#4
名曲は誰が弾いても名曲なり！　「パラノイド」カバー大全

『パラノイド：50周年記念デラックス・エディション』
ワーナー／ WPCR-18386/9

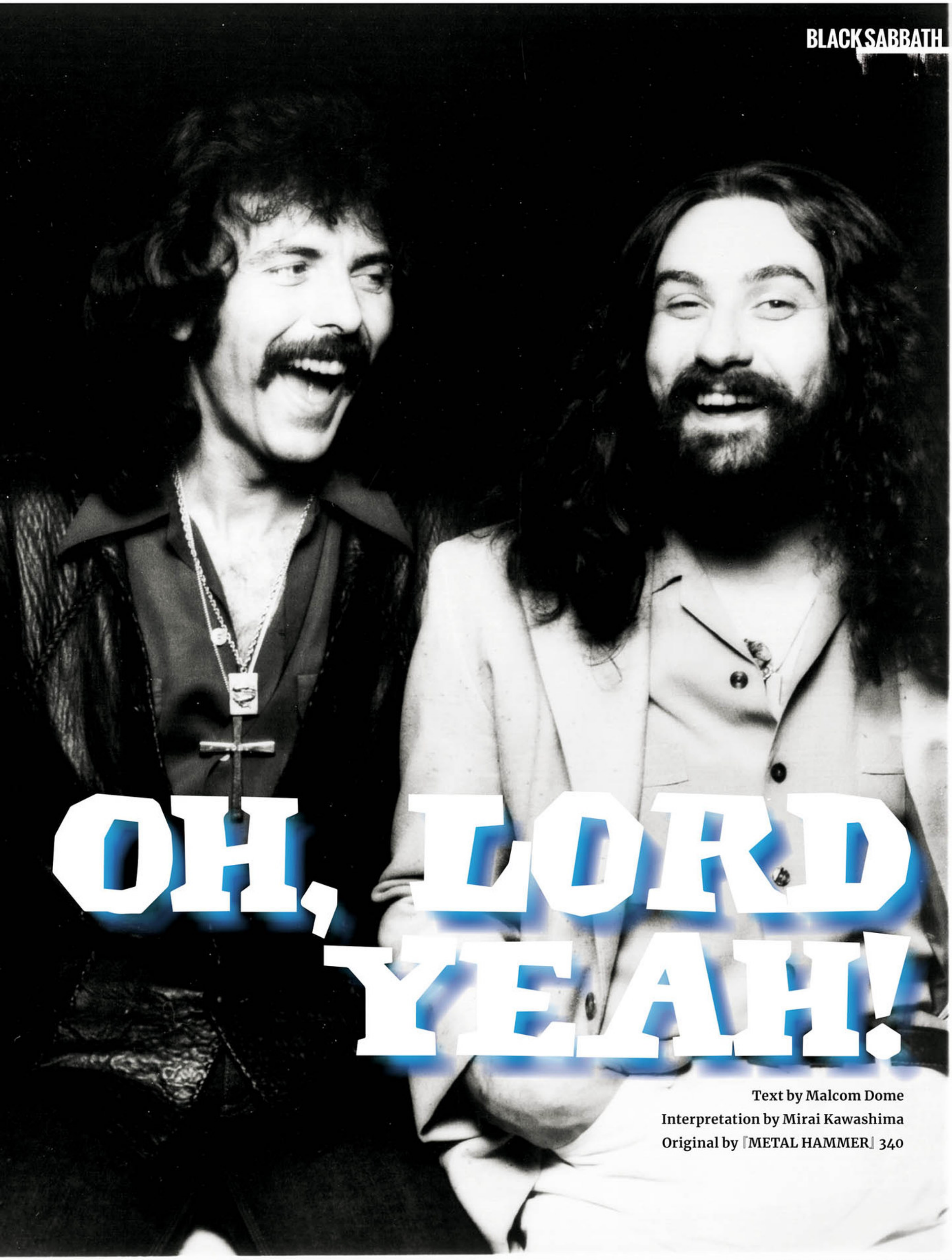
発売50周年を記念した“デラックス・エディション”が発売中だ。オリジナル・アルバムのリマスター音源から4チャンネル・ミックス音源、1970年のライヴ・テイクまでを収録する4枚のCD、インタビューや写真を収めたハードカバー・ブック、当時のツアー・パンフレットのレプリカなどがボックスに収納される。この貴重かつ豪華なアイテムで、50年目の本作を堪能してほしい。

のドゥーム・ロード



メンバー、関係者が語る『パラノイド』全曲。

1970年2月13日にドロップされた伝説的1stアルバム『黒い安息日』に続き、2ndアルバムであり、多くのミュージシャンによって今も演奏される人気曲を多数収録する『パラノイド』が、発売50周年を迎えた。この2作を持ってブラック・サバスは名だたるバンドに肩を並べ、“ヘヴィメタルのパイオニア”としての地位を確固たるものにした。“ヘヴィな音楽”とはなんたるかを知るには、本作に収められる全楽曲を知ることが何よりも正道である。



OH, LORD YEAH!

Text by Malcom Dome
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』340

バンド名を冠したデビュー・アルバムの予想外の成功により、その発売日からわずか4ヵ月後、彼らは再びスタジオに戻り、2nd アルバムの制作を始めた。そして今回も、前作同様あっという間に仕上げられた。

にもかかわらず、タイトル・トラックがトップ5入りしたこともあり、その年の9月18日にリリースされたこの『パラノイド』は、彼らにさらなる成功をもたらしただけでなく、メインストリームのバンドとしての認知度も与えた。この 2nd アルバムではデビュー作の青写真を洗練させ、音楽をさらなる高みへと到達させた。ディープ・パープルやレッド・ツェッペリンとともに、サバスも真のヘヴィなパイオニアと見なされるようになったのだ。

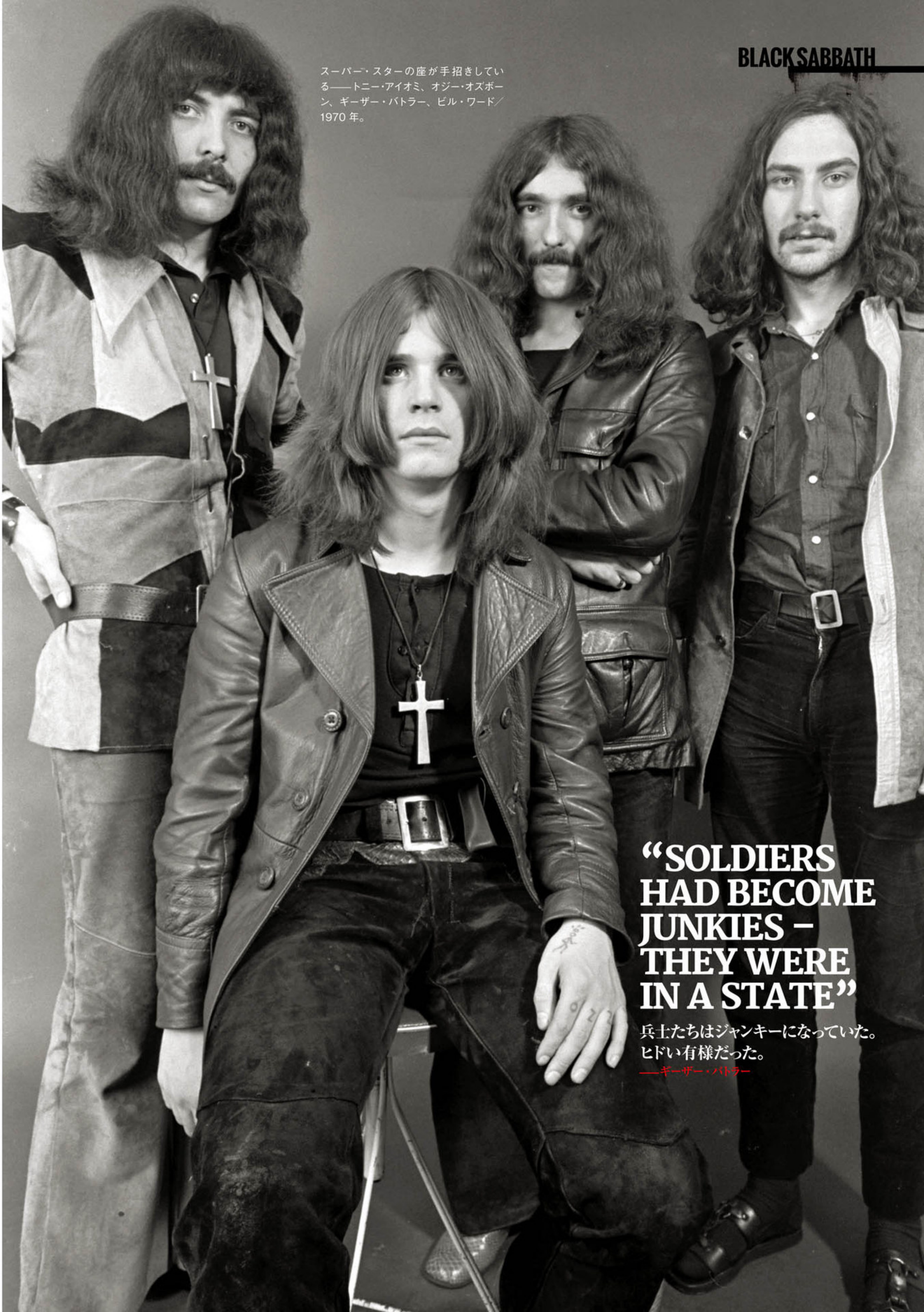
WAR PIGS
「ウォー・ピッグス」

この曲は、レコーディングされる数年前に書かれたものだ。**“スイスのクラブで毎晩何セットもプレイしていたんだ。持ち時間を埋めるのにジャムをたくさんやった”**と、トニー・アイオミは振り返る。**“そこで「ウォー・ピッグス」のアイディアが生まれたんだ”**。

もともとは「Walpurgis ／ワルプルギス」というタイトルであったが、所属レーベルの［ヴァーティゴ］がそのサタニックな含みを嫌ったため、「ウォー・ピッグス」へと変えられた。実際「ワルプルギス」とは、4月30日に行なわれる《ワルプルギスの夜》のことで、これはヒーラーとして、そしてウィッチクラフトに立ち向かったことで名高い8世紀の女子修道院長、聖ワルプルガを祝うものなのだが。

「ウォー・ピッグス」の歌詞は、これを書いたギーザー・バトラーが社会の真の悪と見なす……例えばベトナム戦争などに何百万もの兵士を送り込み、戦わせ死なせるような政治家についてだ。音楽的には、ドゥームのプロトタイプ的オープニングで始まり、印象的なトニー・アイオミのパフォーマンスと、オジーのゾっとするような、命令するようなヴォーカルが続く傑作。**“サイレンの音はプロデューサーのロジャー・ベインのアイディアだった”**と、このレコーディング・セッションのエンジニアであったトム・アロムは振り返る。**“効果音集のアルバムから持ってきたんじゃな**

「パラノイド」で爵について書いたギーザー。1970 年当時は画期的なことだった——リージェント・サウンズにて。



スーパー・スターの座が手招きしている——トニー・アイオミ、オジー・オズボーン、ギーザー・バトラー、ビル・ワード／1970年。

“SOLDIERS HAD BECOME JUNKIES – THEY WERE IN A STATE”

兵士たちはジャンキーになっていた。
ヒドい有様だった。
——ギーザー・バトラー

いかな。曲の最後で回転速度を上げるというのも、ロジャーのインスピレーションによるものだったよ”。

ちなみに、アウトロのインスト・パートには、アメリカ盤では「Luke's Wall」というタイトルがつけられていた。曲数を多く見せる必要があったからだ。

PARANOID
「パラノイド」

思いがけない幸運の話をしよう！　もともとは「The Paranoid'／ザ・パラノイド」というタイトルであったこの曲は、アルバムの３分間の空白を埋めるためだけに書かれたのだ。

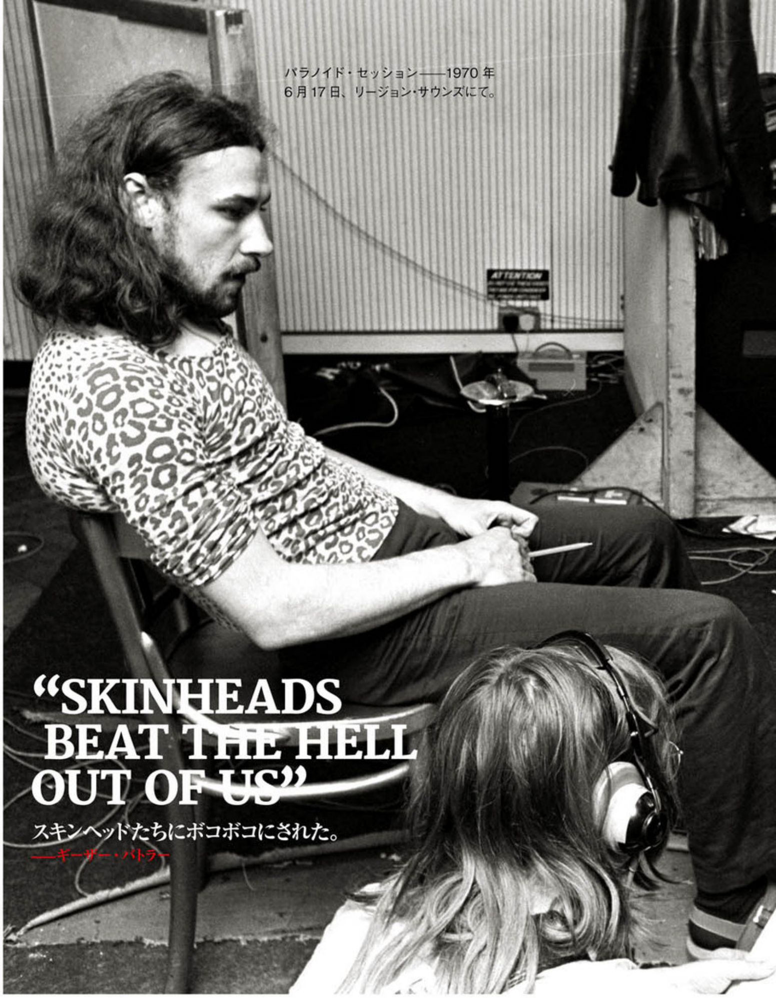
“何かいいリフを書こうと頑張っているトニーをスタジオに残して、私たちはパブに行ったんだ”と、トムは言う。**“あとから彼が走ってきて、こう言ったんだ。「できたぞ、できたぞ」ってね”。**

この曲は鬱についてだ。まだ鬱について語ることがタブーであった時代に、これを堂々と歌にしたギーザー・バトラーは賞賛されるべきである。おもしろいことに、歌詞のなかには一度も［paranoid］という単語は出てこないけれども。**“あの頃の私みたいにたくさんマリファナを吸うと、パラノイドになるのさ。そしてあとになって鬱になることもある”**と、ギーザーは言う。

1970 年８月にシングルとしてリリースされたこの曲は、サバスのイギリスでの最大のヒットとなる４位に到達。すぐにそれとわかるメロディは、歌詞の絶望感とは対照的だ。そして、これがアルバムのタイトルにもなった。もともと『ウォー・ピッグス』というタイトルが予定されていたが、レーベルがこの曲の持つ反戦的内容が物議を醸すのでは、と危惧したのだ。

PLANET CARAVAN
「プラネット・キャラバン」

まるでジャジィでサイケデリックな小旅行だが、この表現は適切だろう。ギーザーによれば、この曲の内容は**“愛する人と宇宙空間を漂うことについて”**なのだから。これは間違いなく比喩的なアシッド・トリップだ。**“バンドがスタジオに集まって、この曲を作ったときのことは覚えている”**とトム。**“最後のピアノのコードは私が弾いたんだ。ピアノのコードを加えたらいいんじゃないかと思いついてね”。**



パラノイド・セッション――1970 年6月17日、リージョン・サウンズにて。

“SKINHEADS BEAT THE HELL OUT OF US”
スキンヘッドたちにボコボコにされた。
――ギーザー・バトラー

この曲でトニー・アイオミがフルートをプレイしているとするソースがあるが、これは誤りだ。**“みんながフルートだと思っている音は、トーン・ジェネレーターさ”**と説明する。**“ロジャーの提案だった。彼はそういうことをするのが大好きだったから”。**

オジーの少々奇妙なヴォーカルは、ロンドンのアイランド・スタジオで作られた。**“ヴォーカルは全部あそこでやった”**と、トムは言う。**“レズリー・スピーカーを使ったんだったと思う。音を変調できるからね。スタジオに１台置いてあって、それでオジーの声を変化させてみようと思いついたんだ”。**

IRON MAN
「アイアン・マン」

ホラーの暗い回廊をうろつくことの多いブラック・サバスであるが、この曲では SF 的アプローチがなされている。ギーザーの手による歌詞は、未来へと旅をし、アポカリプス（※この世の終わり）を目撃する男についてだ。自分の時代へと戻ると、彼は知らず知らずのうちに金属的存在へと変身してしまい、人類が直面するであろう出来事に対する彼の警告は一笑にふされてしまう。その復讐として、男は目撃したアポカリプスを自らの手で引き起こすのだ。

“最初のオジーの叫び声は、リング・モジュレーターを通している”と、トムは説明する。**ヴォーカル・エフェクトによく使用されたもので、例えば『ドクター・フー』のダーレクの声も、こうやって作られているのだ！**

タイトルを考えたのはオジー。“「なあ、《アイアン・マン》か《アイアン・ブローク》（※鉄野郎）って曲をやってみないか？」とオジーが言ってきたんだ。それで金属の塊が思い浮かんで、SF のストーリーに仕立てた

ラインが多分に強調された７分に渡る叙事詩だ。**"この曲をライヴでやるのが大好きだった"**とギーザーは言う。**"音楽的に私が相当の貢献をした曲だからね"**。

RAT SALDA
「ラット・サラダ」

ビル・ワードのソロを骨格にしたインスト。ジャズ・スタイルのスウィングがある曲だが、ギーザーによれば、この曲のルーツはバンド初期のヨーロッパ・クラブ・ツアーにあると言う。**"とても長いセットをやっていてね。持ち時間を埋めるために、ビルは45分のドラム・ソロをやっていたものさ"**。

1971年、このベーシストは、曲のタイトルは不快な料理のことではなく、ドラマーのボサボサのヘア・スタイルのことだと言っていた。しかし、最近ではそれをすっかり忘れてしまったようだ。今日では**"どうやってこのタイトルを思いついたのか、思い出せない"**と言っているのだ。まあ、いいじゃないか。

FEIRIES WEAR BOOTS
「フェアリーズ・ウェア・ブーツ」

インストのオープニングは、オリジナルのアメリカ盤では「ジャック・ザ・ストリッパー」というタイトルがつけられていた。そしてスムーズに、物語風の歌詞を持つ驚くほど柔軟な曲の本篇へと移行していく。ギーザーによれば、バンドがスキンヘッドのギャングと遭遇したあとに、オジーがこの「フェアリーズ・ウェア・ブーツ」の歌詞を書いたと言う。**"ウェストンスーパーメア（※イングランド南西部にある都市）でライヴをやったときのこと。ショウのあとにスキンヘッドたちにボコボコにされたんだ"**。

歌詞のインスピレーションについては、もうひとつの説がある。ギーザーとオジーがマリファナでハイになっていた際、ブーツを履いた妖精たちが公園ではしゃいでいるのを観たというのだ。雑学マニアは、この曲に出てくる［alright now］というフレーズが、次のアルバム『マスター・オブ・リアリティ』に収録された、間違いなくマリファナのことを歌っている「スウィート・リーフ」でも聴かれることに興味をそそられるかもしれない。「フェアリーズ・ウェア・ブーツ」の真の原点を示すヒントなのかも？

のさ"と、ギーザーは振り返る。

ベーシストは、これこそがサバスの素晴らしさを体現した曲だと考えている。**"「アイアン・マン」には、サバスをスペシャルなバンドにしているエッセンスが詰まっている。わりとシンプルだけど、同時に深さも兼ね備えているからね"**。

ELECTRIC FUNERAL
「エレクトリック・フューネラル」

いくつかの点において、「エレクトリック・フューネラル」は「アイアン・マン」と対になる曲だと言える。

効果的なSF組曲の後半となるこの曲は、核のホロコーストが引き起こす破壊について。トニーと、ドラマーのビル・ワードのふたりがそろって複雑なパフォーマンスを聴かせる、際立ってプログレッシブな曲である。

最初と最後はゆったりとしているが、中間部はアップテンポ。そして、結末に向かってオジーがバリトンでタイトルを連呼するさまにはドキッとさせられる。

HAND OF DOOM
「ハンド・オブ・ドゥーム」

「ウォー・ピッグス」同様、「ハンド・オブ・ドゥーム」も、当時継続中であったベトナム戦争を題材としているが、こちらは、多くのアメリカ兵たちが戦地の恐怖を克服するために、いかにドラッグ中毒になっていったかに焦点を当てている。**"私たちはイギリスにあるいくつかの米陸軍基地でプレイした。ジャンキーになってしまい、恐ろしい状態の兵士たちがいたよ"**と、この歌詞を書いたギーザーは振り返る。**"彼らはベトナムから本国に帰る途中だったんだ"**。

「ハンド・オブ・ドゥーム」は、ベース・

BLACK SABBATH

1970年──ブラック・サバスは何に生み出され、何を生み出したのか。

1970年にデビューを果たすブラック・サバスだが、かの時代の何がブラック・サバスを生み出す要因となったのか？　そして、そこから生まれたブラック・サバスは、何をもってヘヴィ・ミュージックの祖となったのだろうか。ここではその前夜から連なるキーワードをそれぞれ項立てし、ブラック・サバスがどのようにしてあの音を生み出していったのかを見ていく。

文：山﨑智之

Profile

1970年、東京生まれの音楽ライター。ミュージシャンを中心に1,000回以上のインタビューを行なう。サバスはオジー、トニー、ギーザー、ロニーに取材経験あり。取材後トニーと連れション経験も。ブログは＜http://yamazaki666.com/blog/＞

ブラック・サバス誕生前夜

1960年代は、音楽に革命が起こったディケイドだった。

1950年代にアメリカで生まれたロックンロールは、1960年代、急激な進化を遂げる。ザ・ビートルズやザ・ローリング・ストーンズを筆頭とする英ロック・バンドの世界進出、"スウィンギング・シックスティーズ"とサイケデリアによる若者文化の意識改革などにより、ロックの表現はより幅広く、奥深いものになっていった。

それと同時に、機材のテクノロジーも進化していく。1965年、ザ・フーのピート・タウンゼントとジョン・エントウィッスルがイギリスのアンプ業者ジム・マーシャルと相談、スピーカーを積み重ねて大音量を可能にした"マーシャル・スタック"を生み出す。さらにクリームやジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンスなど、ハードな音楽性のバンドが登場。米モンタレー・ポップやウッドストック、英リッチモンドやワイト島など、野外フェスの拡大による大型PAの普及もあり、ロックの大音量化が進んでいく。ハードなロックは最先端であり、いわば当時の"テクノ"だった。

そんな背景から生まれたのが新しいロック・ミュージックのスタイル、"ヘヴィメタル"だったのだ。

黒魔術＆オカルト・ブーム

1960年代後半のカウンター・カルチャーはサイケデリックできらびやかなものだけでなく、黒魔術やオカルトもブームになっている。

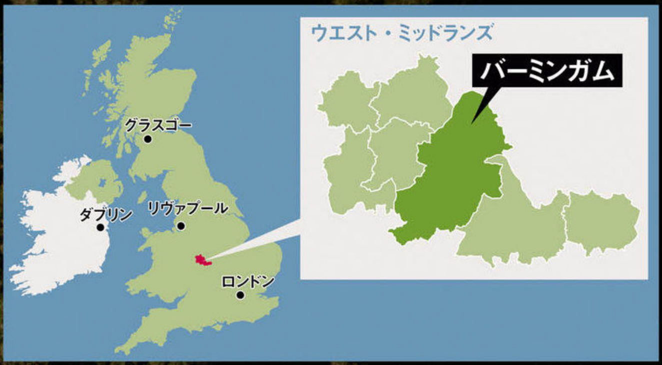
アメリカでは1966年にアントン・ラヴェイが［チャーチ・オブ・サタン］を設立。多くの信奉者を生み、またアイラ・レヴィンの小説『ローズマリーの赤ちゃん』（1967年）は翌年映画化され大ヒット。日常における悪魔を意識させることになった。イギリスでは1950年代からハマー・フィルム・プロダクションズ制作の“ハマー・ホラー”映画が人気を誇っていたし、“魔術王”を名乗るアレックス・サンダースが黒魔術の儀式をテレビ実況して話題を呼んだ。

ロックにもオカルト・ブームの波が訪れている。クレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウンが“俺は地獄の炎の神だ！”と宣言する「ファイア」（1967年）が全英チャート1位を獲得し、アトミック・ルースター「13日の金曜日」（1970年2月）、ブラック・ウィドウ「集まれ、魔女！」（1970年3月）などもリリースされた。

バーミンガムでアースと名乗るバンドがリハーサルをしていたスタジオの近くで、映画『ブラック・サバス　恐怖！三つの顔』（1963年）がリバイバル上映されていたことで、彼らはバンド名をブラック・サバスへと改名。ロックの暗黒面へと踏み込んでいくことになった。

▲バンド名のもととなった、映画『ブラック・サバス　恐怖！三つの顔』。現在もDVD／Blu-rayが発売されているので、フリークならばこちらもチェック！（キングレコード／KIXF-677）。

ヘヴィメタルの地域性



ブラック・サバスが結成されたのは、英国バーミンガム。ロンドンから160km北にある都市だ。

18世紀の産業革命で急発展した工業都市であり、労働者階級が多く、ロックが盛んとなっていた。バーミンガム周辺のウェスト・ミッドランズ地方はロバート・プラント、ジョン・ボーナム、エレクトリック・ライト・オーケストラ、ジューダス・プリースト、グレン・ヒューズ、スレイドなど、数多くのロック・ミュージシャンを輩出している。

この地がヘヴィメタルと呼ばれる音楽の揺りかごとなったことについて、ジューダス・プリーストのロブ・ハルフォードは“バーミンガムは工業都市だから金属粉が空気中に舞っていて、市民の血中の金属成分が高い。それでヘヴィメタルが生まれたんだ”と説明している。

ヘヴィメタルという音楽は“ラヴ＆ピース”に対するアンチテーゼでもあった。オジー・オズボーンは“何が「花のサンフランシスコ」だ。ふざけるな！　こっちは腹を空かしてるんだ”と怒っていたが、その怒りとフラストレーションが彼らの音楽の原動力となっていったことに疑いの余地はない。

アンダーグラウンド・ロックの勃興

1960年代後半、ロックが多様化したことで、各レコード会社はよりアンダーグラウンドなアーティストに注目しはじめる。そして、より“プログレッシブ”なサブ・レーベルを設立していった。

デッカが［デラム］、EMIが［ハーヴェスト］、パイが［ドーン］、RCAが［ネオン］などを設立したが、フォノグラムが1969年に設立したのが［ヴァーティゴ・レコーズ］である。

そして、そのヴァーティゴ・レコーズから、コロシアムやジューシー・ルーシーなどに続く第6弾として発売されたのが『黒い安息日』だった。なおヴァーティゴからは同年6月、ユーライア・ヒープもホラー調ジャケットの『ユーライア・ヒープ・ファースト』でデビューしている。

ちなみに『黒い安息日』が発売されたのが1970年2月13日の金曜日という不吉な日だったのは有名だが、翌日14日の土曜日にはザ・フーがリーズ大学で『ライヴ・アット・リーズ』をレコーディングしている。ヘヴィメタルはこの週末、イングランドの中〜北部でひと際ラウドな産声を上げたのだ。

『黒い安息日』への反応

『黒い安息日』

▲ダブル・ジャケットの内側に入れられた逆さ十字とポエム。
※画像は紙ジャケット版の CD より

1970 年２月、ロックは大きな変動を迎えていた。

チャート上位を占めていたのはサイモン＆ガーファンクル『明日に架ける橋』、レッド・ツェッペリン『II』、ザ・ビートルズ『アビー・ロード』、ザ・ローリング・ストーンズ『レット・イット・ブリード』、フランク・ザッパ『ホット・ラッツ』など。そんなシーンにブラック・サバスは身を投じていったのだ。

1960 年代終わりのオカルト・ブームを引きずっていたとはいえ、『黒い安息日』はセンセーショナルな作品だった。キーフによる不気味なジャケットとヘヴィなサウンド、雨が降りしきるなかに響き渡る「黒い安息日」の低音リフ、“サタンが座って微笑んでいる”、“我が名はルシファー、手を取ってくれ”という歌詞などは衝撃を伴うものだった。

『黒い安息日』の LP を手にしたオジーの父親は、ジャケット見開きの逆さ十字架と謎のポエム（これはバンドの知らない内につけられた）を見て絶句。“悪いクスリはやっていないだろうな？”と息子に問いただしたという。それほどの強烈なインパクトを持った『黒い安息日』は熱狂的に迎えられ、英国のチャートで８位というヒットを達成している。

ただし、ブラック・サバスのメンバーたちは悪魔を崇拝していたわけではなく、黒魔術の儀式を行なっていたわけでもない。そのせいで“ガチ”のオカルティストたちから“お前たちはフェイク黒魔術バンドだ！”と非難されていたりもしたのだった。

タブーへの挑戦

ブラック・サバスは社会の数々のタブー（禁忌）を歌い、カウンター・カルチャーのアイコンとして、熱狂的な支持を集めている。「黒い安息日」、「N.I.B.」での悪魔への言及もそうだが、それからも彼らはさまざまなタブーへの挑戦を行なっていく。

2nd アルバム『パラノイド』の１曲目「ウォー・ピッグス」も、そんな彼らの挑戦のひとつだった。

P.34 にもあるように、この曲はもともと「ワルプルギス」というタイトルで、『黒い安息日』レコーディングより前、1968 年からライヴで演奏されていたものだ。その時点では魔女が集う《ワルプルギスの夜》を題材としたオカルト的な歌詞だったが、ベトナム戦争から触発されて「ウォー・ピッグス」として生まれ変わっている（当初２作目のアルバムは『ウォー・ピッグス』というタイトルになるはずだった。ジャケット・アートワークが戦士なのはそのせい。発売直前になって『パラノイド』に変更したが、ジャケットは変更されなかった）。

バンドの代表曲となった「パラノイド」もまた、社会に適合できず“みんな人生を楽しんでくれ、俺もそうしたかったけどもう手遅れ”と主張する“偏執病患者”を歌った曲だ。

その後、彼らは「スウィート・リーフ」（収録『マスター・オブ・リアリティ』1971 年）、「フェアリーズ・ウェア・ブーツ」、「スノウブラインド」（収録『ブラック・サバス４』1972 年）でドラッグを題材にとり、『ブラック・サバス４』のジャケットでは“We wish to thank the great COKE-Cola Company of Los Angeles”と、コカインにも触れている。さらに「チルドレン・オブ・ザ・グレイヴ」（収録『マスター・オブ・リアリティ』1971 年）では武装蜂起、「誇大妄想狂」、「発狂」（ともに収録『サボタージュ』1975 年）では狂気を描くなど、常に社会の光が当たらない暗部を曝いてきたのだった。

『マスター・オブ・リアリティ』

『ブラック・サバス４』

『サボタージュ』

1970年代ヘヴィネスとブラック・サバス

1960年代の終わり、ハードなロックはすでにロック音楽の重要な一角を占めていた。アメリカではMC5やストゥージズ、ブルー・チアーがいたし、イギリスでもクリームやジェフ・ベック・グループ、レッド・ツェッペリンらが大音量ロックで人気を博している。1970年にはブラック・サバスとユーライア・ヒープが登場、ディープ・パープルが『イン・ロック』で音楽性をシフトさせるなど、ハード・ロックの新たな潮流が生まれている。

前述した機材の進歩もそうだが、この時期にはレコーディング技術、そしてヘヴィな音をレコード盤に刻むカッティング技術も飛躍的に向上。トニー・アイオミのヘヴィなリフが襲うサウンドを家にいながらにしても楽しめるようになった。ブラック・サバスはちょうどそんな時代に殴り込みをかけてきたのだ。

さらに彼らの個性となったのが、トニーの生み出すダウナー・リフだった。アルバムごとにチューニングは異なるが、初期ブラック・サバスの名リフの数々は、彼をヘヴィメタルの頂点に座すリフ・マスターたらしめた。左利きでギターを演奏、弦を押さえる右手の中指と薬指の先端がなくキャップを付けているため、弦を緩く張ってチューン・ダウン。その結果、重くドゥーミーな音が生まれたというケガの功名もあった。彼のフォロアーたちがさらに極端なダウン・チューニングをするようになり、それがヘヴィメタルの特徴のひとつとなっている。

メンバー・チェンジとその影響

1979年にオジーが解雇となり、ロニー・ジェイムス・ディオ、イアン・ギランなどをシンガーに迎えてきたブラック・サバスは、ヘヴィメタルを代表するバンドとして君臨してきた。1985年、《ライヴ・エイド》でオジーを含むオリジナル・ラインナップが復活したことも話題を呼んだが、その後、バンドの評価は急速に下がっていく。

その理由として、トニー・アイオミを除くメンバーが安定しなかったこと、そのトニー自身の高齢化、またその音楽性が狭義のヘヴィメタルになったことなどが挙げられるが、コージー・パウエル加入、ロニー復帰などテコ入れしたものの思ったほどの効果はなし。

『フォービドゥン』(1995年)ではラップを入れたり、コミック風ジャケットにしたことでファンから批判を浴びている。もちろん全アルバムが必聴だが、1980年代以降の作品が小粒になったことは否めなかった。

左写真）ロニー・ジェイムス・ディオ期。ドラマーはヴィニー・アピスで、その後ヘヴン・アンド・ヘルになる布陣だ。
右写真）トニー・マーティン期のレアなバンド・フォト。このグループ・ショットでのベーシストはニール・マーレイ、ドラマーはボビー・ロンディネリだ。

再評価と新たなフォロアー

ブラック・サバスが再評価を得たのは、1990年代のグランジ・ブームによるものだった。ニルヴァーナやサウンドガーデンに代表されるバンドが、初期バンドの生々しいヘヴィなリフ・ミュージックから影響を受けたサウンドでメインストリーム音楽市場を席巻したのだ。

一方、初期ブラック・サバスの再評価はパンク／ハードコアからも起こっていた。アメリカ西海岸ハードコア・バンドのブラック・フラッグは『マイ・ウォー』(1984年)でスローかつヘヴィなリフを取り入れている。同じ[SSTレコーズ]からはセイント・ヴァイタスが登場。ペンタグラム、ジ・オブセスドなどと“ドゥーム・メタル”シーンを形成する。

さらには彼らから刺激を受けた元ナパーム・デスのリー・ドリアンがカテドラルを結成。ドゥーム・メタルのプチ・ブームを生んでいる（次ページからは、彼によるブラック・サバス分析インタビューも）。さらにブラック・サバスの影響下にあるバンドの数々によって、1990年代後半のストーナー・ロック・ブームも起こっている。

そんな時代から求められて、オリジナル編成のブラック・サバスは1992年、オジー引退ライヴ（のちに撤回）で単発の再結成。さらに1997年は北米《オズフェスト》でもリユニオンが実現し、2002年にはTVシリーズ『オズボーンズ』がお茶の間でヒットしたことにより、本格的な復活を果たすことになった。2013年にはオズフェストでオジーを含む布陣での来日ライヴが行なわれ、2013年にはアルバム『13』も発表された。

2017年に《ジ・エンド》と題されたワールド・ツアーを終えて、ブラック・サバスは眠りについた。だが2020年、あらゆるヘヴィメタル作品は、彼らを直接的・間接的に追従したものだ。『パラノイド』から50年。スローでヘヴィなリフ、社会のタブーを歌うヴォーカル、不吉で“悪魔的”なイメージなど、ブラック・サバスは今日もメタルに影を落とし続ける。我々は皆、安息日の末裔なのだ。

LEE DORRIAN

英式闇滅低音を継ぐ男 リー・ドリアンの『パラノイド』考察

Text by Takahide "THUNDER" Okami
Translation by Mirai Kawashima
Photo by Masayuki Noda

一番影響を受けたのは『アイアン・マン』かな。
あの曲はドゥーム・メタルの青写真のようなものだから。

ブラック・サバスに影響を受けたバンドは星の数ほどいれども、トップ・ミュージシャンのなかで彼ほど熱心なサバス愛好家はほかにいないだろう。ドゥームを体現する男＝リー・ドリアンに、『パラノイド』、そしてブラック・サバスとそれにまつわるいろいろな話を聞いた。

フリークになったきっかけは『グレイテスト・ヒッツ』だよ（笑）。

——1968年生まれのあなたですから、物心ついた頃にはすでにブラック・サバスはデビューしていますが、少年時代に初めてブラック・サバスを聴いたときの印象とは？

うーん、最初に聴いたのはすごく小さい頃だった。おそらく『パラノイド』がチャート・インしていたときも聴いていたはずさ。父はフリーやモット・ザ・フープル、スレイドなんかが大好きで、だからきっと『パラノイド』もラジオなどで聴いていたと思うな。まぁ、何しろ２〜３歳のことだから、もちろん覚えてはいないけど（笑）。

——ハハハ、そういうことですか。

サバスを真面目に捉えるようになったのは、確か1981年くらいだったと思う。当時俺たちはパンク・キッズだったんだけど、友達の兄貴がメタル好きでね。彼がお昼休みに食堂で『悪魔の掟』（1981年）をかけていたんだ。当時俺はG.B.H.やディスチャージ、クラストなんかが好きだったけど、ブラック・サバスはユニークなバンドで、ほかのヘヴィメタル・バンドとは違うなと思ったよ。きちんとアルバムを通して聴いたのは、そのときだったかな。

——そこからハマっていったと。

サバス・フリークになったのは、さらにその数年あとだよ。1984〜85年くらいにパンクとメタルのクロスオーバーが起こってね。確か1984年にトラブルを聴いたんだ。それでSAINT VITUSなんかも聴くようになって、そこから初期のサバスに興味を持つようになっていった。だからサバス・フリークになったのは1984年だね。

——きっかけとなったアルバムは？

『グレイテスト・ヒッツ』（1977年）だよ（笑）。COCなんかがサバスからの影響を公言していたし、ブラック・フラッグも明らかにサバスから影響を受けていた。ディスチャージは歌詞の面でもブラック・サバスの影響下にあったし、確か「ウォー・ピッグス」の歌詞をパクったりもしてたんじゃないかな。クールなパンク・バンドはみんなブラック・サバスが好きだったから、15〜16歳の頃に『グレイテスト・ヒッツ』を買ってみたんだ。その次に『ライヴ・アット・ラスト！』（1980年）を買って。それで「チルドレン・オブ・ザ・グレイヴ」や「スノウブラインド」なんかを聴いて、これはスゲェと思ったね。それから1stアルバムも買って……でも一番気に入ったのは『マスター・オブ・リアリティ』（1971年）だった。

ドゥームという観点から言うと『パラノイド』は次に来る傑作の先駆けとなったアルバムさ。

——ズバリ、ブラック・サバスのアルバム群のなかで『パラノイド』はどのような作品だと思いますか？

『パラノイド』は、サバスがドゥーム・サウンドを取り入れるターニング・ポイントとなったアルバムだと思う。もちろん1stでも数曲、例えばタイトル・トラック（『黒い安息日』）や、「眠りのとばりの後に」なんかもヘヴィだったけれど、基本的にあれはブルースのアルバムだった。『パラノイド』はもっと立て続けで、「アイアン・マン」なんかはギターのベンディングで始まってヘヴィなリフが来て、そのあとすぐに「エレクトリック・フューネラル」、そして「ハンド・オブ・ドゥーム」だろ（笑）。ドゥームという観点から言うと、『パラノイド』は次に来る傑作『マスター・オブ・リアリティ』の先駆となったアルバムさ。『マスター・オブ・リアリティ』は、俺にとって究極のドゥーム・アルバムだから。

——『パラノイド』内で、最も好きな曲、革新的だと感じる曲は？

難しいな。コンテクストにもよるけど、お気に入りということであれば「エレクトリック・フューネラル」。一方で、一番影響を受けたということだと「アイアン・マン」かな。あの曲は、ドゥーム・メタルの青写真のようなものだからね。最初のギターのベンディングとか、トニー・アイオミがギターでやったシンプルだけど特徴的なことが、ドゥームの未来を作ったと思うんだ。感情的には「ウォー・ピッグス」なんかもとてもヘヴィだよね。

——ふむふむ。

若い頃、俺はアナキズムに傾倒していたんだけど、「ウォー・ピッグス」や、のちに「生への自殺」（収録『血まみれの安息日』1973年）などを聴いて、彼らはほかのメタルやハードロック・バンドのようにくだらないことではなく、現実について歌っていたからね。マリファナなんかのクレイジーな歌詞もある一方で、俺が共感しやすい政治的な内容もあったから、俺にとってブラック・サバスには入り込みやすかったんだ。巨乳がどうの、なんて歌っているバンドではなかったから（笑）。

——ハハハ、確かに。より現実的なバンドにも感じられたという。

ほかのバンドよりも本物という感じがしたよ。その真摯なアプローチというのも、彼らをほかのバンドよりもヘヴィにしていた要因のひとつだと思う。「エレクトリック・フューネラル」は世界の終わりのことだろうし、おそらく「ハンド・オブ・ドゥーム」はヘロイン中毒についてだろう？　グラマラスなものではなく、ヘヴィなことを歌っていたというのも、ブラック・サバスを特別なバンドにしていた理由のひとつなんだ。ヘヴィなリフにヘヴィなアティテュード。

——納得です。

それに彼らがバーミンガム出身だということもある。彼らは私立の学校に通うリッチな子供ではなく、厳しい環境で育っただろうし、そういうことも音楽に反映されているんじゃないかな。『パラノイド』はその後のブラック・サバスのコーナーストーン、ターニング・ポイントとなった作品さ。その後のアルバムの構成要因がすべて入っているから。

——計ることのできるヘヴィさのひとつに、楽器のチューニングがあります。1st、2ndともにヘヴィの源流であると語られますが、音高という意味ではまだ特段低くはありません。やはり、ヘヴィさというのはそこだけではないということですね？

彼らの作り出した雰囲気のほうが、サウンド自体よりもヘヴィだったと思う。ヘヴィなバンドをやるからって、バカみたいにギ

このインタビューの見出しを《There's so much to Black Sabbath than Paranoid,》にするってのはどうだい？

ターをダウン・チューンする必要はないと思うんだ。90年代、ギターをBまでダウンさせて可能な限り遅くプレイするって風潮があったけれど、それはヘヴィさのパロディでしかない。

――ヘヴィさのパロディ、と。

というか、ヘヴィなバンドをやるのに、ヘヴィなサウンドが必須ではないということ。バンドが持つヘヴィさというのは、プレイする者の内面から出てくるんだ。それがギターのトーン同様大切なんだ。例えば、オジーのヴォーカルはむしろ高域だけど、とてもヘヴィだよね。それは彼のキャラクター、そしてその歌詞の表現方法が超ヘヴィだからさ。だから、ヘヴィさというのもコンテクストによるんだよ。単にギターのトーンの話をしているのか、あるいはベース、ドラムのことなのか。結局はさまざまな要素がバンドをヘヴィにするんだ。そしてサバスはその構成要素をすべて持ち合わせていたということ。そんなバンドは多くなかったんだよ。

パンク・シーンのほうが サバスを受け入れていたんじゃないかな。

――バンドはその後"ディオ期"に入ります。オジー期とディオ期では、ヘヴィという点ではどういう違いがあると感じますか？

うーん、ロニー（ジェイムス・ディオ）が入って、クラシックなサウンドに戻ったというのかな。『テクニカル・エクスタシー』（1976年）、『ネヴァー・セイ・ダイ』（1978年）があって、『ヘヴン＆ヘル』（1980年）でダークなサウンドに戻ったよね。『悪魔の掟』もとてもヘヴィなレコードで、あれはまったくライトな作品じゃない。それ以降は多少方向性を見失ったかもしれないけれど、『ヘヴン＆ヘル』はとてもヘヴィで、初期への回帰を感じさせる作品さ。「チルドレン・オブ・ザ・シー」なんかもダークだし。間違いなく『ネヴァー・セイ・ダイ』よりダークだよね。ディオにはゴシックの雰囲気もあって、歌詞に『サボタージュ』（1975年）あたりからなくなっていたミスティシズムを復活させたし。

――80年代には、ブラック・サバスはすでに時代遅れという印象があったように思うのですが。

初期の作品が好きな人たちはいたけれど、『セブンス・スター』（1986年）とかはね。すでに終わったバンドって感じはあった。当時そういう音楽が好きな人たちは、こういう言い方は月並みだけど、いわゆるコックロック、LAのヘア・バンドみたいなのを聴いていたから。『エターナル・アイドル』（1987年）が出たときのことは覚えているけど、あのアルバムも完全に過小評価されていて、誰も気にとめていなかった。いいリフも入っているけれど、人気という点では当時はイマイチだったと思う。あの頃はメタリカやエクソダス、スレイヤーのようなバンドが人気で。

――当時は速いほうが偉いみたいな風潮がありましたからね。

確かにそうだね。だけど、80年代終わりから90年代初めにかけて、少し認識が変わっていったように思う。その頃レディング・フェスティヴァルに行ってね。フェイス・ノー・モアが「ウォー・ピッグス」のカバーをやっていて。観客がみんな一緒に歌っていて"これはどういうことなんだ？"と思った記憶があるよ。観客の多くは、あれがサバスのカバーだとは知らず、フェイス・ノー・モアのオリジナルだと思っていたんじゃないか？　それはともかく、あのあたりから、人々がサバスの影響力というものを認識するようになってきたと思うんだよね。

――ほほう。

NWOBHMのときも同じだったんじゃないかな。ジューダス・プリーストからの影響ばかりが大きくて、サバスから影響を受けたと言えるバンドはひと握り、エンジェル・ウィッチ、WITCHFINDER GENERAL、ウィッチファインドとか、"[witch]がつくバンド"ばかり。そういう意味で、80年代はサバスが無視されていたとも言える。

――そうかもしれませんね。

一方、パンク・シーンのほうが、サバスを受け入れていたんじゃないかな。もちろんセルティック・フロストみたいなバンドはいたけどね。とてもヘヴィなリフをプレイして、明らかにサバスを愛聴していた感じだっただろ。新しいスタイルではあったけど、サバスの暗さ、重さがルーツであることは明らかだった。80年代終わりに向けて、メルビンズなんかも出てきて、みんなヘヴィでスローなものを楽しむようになった。そして90年代になると、サバスの名前を口にするバンドも多くなってさ。

――そのきっかけを作ったのが、あなたやカテドラルだったのでは？

どうだろう、もしかしたらそうかもしれないね（笑）。もちろんキャンドルマスのようなバンドもいたけど、彼らは非常にゴ

◀リー本人が提供してくれた写真。トニー・アイオミ（2004年時）、ビル・ワード（1988年時）それぞれとの2ショットのほか、1994年にカテドラルとしてブラック・サバス共演した際のポスターやパスも。

シックだった。それはカテドラルにも、特に1st アルバム（『この森の静寂の中で』1991 年）については当てはまるかもしれないけれど、俺たちは影響を受けたバンドを公言していたというのがあった。SAINT VITUS、キャンドルマス、WITCHFINDER GENERAL とか。カテドラルを結成したとき、80 年代はほぼ終わっていて、正直俺にとってデス・メタルはどれも同じで退屈なものになっていた。その点、ドゥームはとてもフレッシュなアプローチだったんだろうね……可能な限りヘヴィにプレイするというのがさ（笑）。あと、俺が元ナパーム・デスだったことも、カテドラルが注目を集めた理由のひとつだったと思う。

——確かに、それもひとつの要因であるとは思います。

　ナパーム・デスをやめてカテドラルを始めたという話題があったから、インタビューも載りやすかったはず。ナパーム・デスはとても人気があって、イギリスのテレビやラジオ、メジャーなプレスでも取り上げられていたから。ナパーム・デスとは違ったアプローチで、だけど同じようにヘヴィなバンドということで、人々がスローでヘヴィなスタイルにハマりやすかったのかもしれない。『デカダンス』（1993 年／2nd）は、1st よりもグルーヴィで音楽的だったから、評判がとても良くて“ニュー・ブラック・サバス”だなんて言われたよ。正確な内容は忘れたけれど、ギーザー・バトラーも確か『ケラング！』誌で“最近聴いたヘヴィメタルのなかで、ブラック・サバスに似ていると思ったのはカテドラルだけだ”というようなことを言っていたんだ。ギーザーすらそんなことを言ってくれたワケだから。俺の立場からすると何とも言い難い部分ではあるけれど、何らかの影響力があったことは確かだと思う。

サバスからの一番の影響は正直で誠実でいることさ。

——あなたはミュージシャンとして、ブラック・サバスからどのようなヒント／影響を受けたと思いますか？

　実を言うと、ナパーム・デス時代も聴いていたのは遅い音楽ばかりだったんだよ（笑）。ドリーム・デス、レベレイション、のちにソリチュード・イターナスになるソリチュードとか。サバスから影響を受けたというバンドを聴きたくてね。ただただ速いだけにはウンザリしていたから。俺が参加した『Mentally Murdered』（1989 年／EP）をやった頃は、ほかのメンバーに“キャンドルマスやトラブルみたいなリフをウルトラ・ファストなパートに混ぜるなら、バンドに残ってもいい”と言っていたんだけど、彼らはデス・メタルの方向にいきたがったんだよ。

——では、ブラック・サバスから学んだこととは？

　正直でいるように努めること。無理をしすぎると、それがポーズであることがあからさまになってしまう。カテドラルでは……というか、ほかのバンドもそうだろうけど、早くアルバムを作れとせかされることが何度かあった。そうなると、完全に正直でいることは難しくなってしまう。スタジオのなかで、自分たちが何をやっているのかじっくりと考えることができなくなってしまうからね。そうなると、とても居心地が悪くなってしまう。だからサバスからの一番の影響というのは、正直で誠実でいることさ。

——音楽を作るうえでは、本来一番大切なことかもしれませんね。

　音楽的には当然俺とオジーはまったく違っていて（笑）、俺のバックグラウンドはパンクで、彼が歌い出した頃には存在もしてなかったものだ。オーラやヴァイブ、誠実さ、彼らの表現する感情みたいなものが、俺が受けた最大の影響だよ。サバスをコピーするということには興味がないんだ。ちょっと音を変えただけのリフを使ったり、歌詞をパクったり、オジーみたいに歌おうとしたり、そういうのはつまらない。サバスよりうまくやれるわけがないんだからさ（笑）。影響を受けるのはいいことだけど、マネをしようとするのはバカらしいし、意味がないよ。

——では最後に……2020 年、50 年前の作品となる『パラノイド』ですが、今の耳を持って聴く本作の魅力とは？

　すべての時期のブラック・サバスを要約した作品だと言えると思う。ブルースの時期を抜けて、新しいアプローチのサウンドを導入して、のちの作品に見られる要素を含んでいる。「パラノイド」は大ヒットとなった曲だし、“go-to record”（※人気のある、これを聴いておけば間違いないレコード）という言い方は好きじゃないけど、ブラック・サバスと言えば、多くの人は『ブラック・サバス 4』（1972 年）ではなく『パラノイド』を思い浮かべるだろう。タイトルも一番覚えやすいし、ジャケットもクレイジーだしさ。

——確かに。

　「ウォー・ピッグス」なんかも入っているしね。俺の個人的な好みからすると、『パラノイド』がベストなアルバムだとは思わないけれど、大局的に見れば、これが一番知られたアルバムであることは間違いないよね。もちろん、この作品が名作ではないということではないよ。個人的に『マスター・オブ・リアリティ』や『ブラック・サバス 4』、あるいは『血まみれの安息日』のほうがよく聴いたというだけで。

——それはわかります。「パラノイド」がサバス史上最高の曲というわけではありませんからね。

　そのとおりだよ。“また「パラノイド」かよ”って、飽きられてしまうこともしばしばさ（笑）。多くの人は「パラノイド」しか知らないからね。じゃ、このインタビューの見出しを《There's so much to Black Sabbath than Paranoid,（ブラック・サバスには「パラノイド」よりも素晴らしいものがたくさんある）》にするってのはどうだい？（笑）

PARANOID

名曲は誰が弾いても名曲なり！
「パラノイド」カバー大全

名曲ぞろいの『パラノイド』であるが、そのなかでも最もメジャーな楽曲と言えば、やはり表題曲である「パラノイド」だろう。ブラック・サバスやオジー・バンドではもちろん、さまざまなミュージシャンがプレイしていることでも知られる本曲。本家サバスからメタル・バンドによる純カバー、異ジャンルによるアレンジまで、その幅広いバリエーションの一旦を見てみよう。

文：川嶋未来

Profile

エクスペリメンタル・メタル・バンド SIGH のヴォーカル、キーボード、フルート担当。ブラック・サバスのデビュー・アルバム・リリースの数週間前に生まれたため、今年で 50 周年。

序章：これが「パラノイド」だ！

「パラノイド」は 1970 年 9 月 18 日にリリースされたブラック・サバスの 2nd アルバム『パラノイド』のタイトル・トラック。作曲はトニー・アイオミ、歌詞はギーザー・バトラーの手によるものだ。

冒頭曲「ウォー・ピッグス」に続くアルバム２曲目に配置されたこの希代の名曲は、アルバム用の曲が足りなかったため、ほかのメンバーが昼食に行っている間にトニー・アイオミがサクッと書き上げたとされる。13:30 頃にメンバーがスタジオに戻り、そのアイディアをもとにセッションを開始。30 分後の 14:00 には完成型になっていたというのだから驚きだ。

ところが、そんな急場しのぎで作った曲が、８月 29 日にシングルとして先行発売されると、全英チャート第４位にランクインの大ヒット。ブラック・サバスを真のスターにしたわけであるから、世の中わからないものである。

アルバムのジャケットは、剣と盾を持ち、ピンクのレオタードを着た男。すなわち“戦っている豚”＝「ウォー・ピッグス」だ。本作のタイトルはもともと『ウォー・ピッグス』になる予定だったのだが、「パラノイド」の大ヒットを受け、ジャケット・イメージはそのままに急遽変更になったのである。

それにしても、この「パラノイド」、一体いくつのバンドにカバーされてきたのだろう。ライヴだけで披露している、なんていうパターンまで含めると、全貌を把握するのが不可能なほど。短時間で完成させた曲らしく、リフや曲構成も非常シンプルでありカバーしやすいということもあるのだろう。

だがこれ、単純なようで、完コピしようとすると非常に厄介。出だしの“ジャーン・ジャーン・ジャン”からして、単にＥのパワー・コードなのか、＜Ｄ→Ｅ＞というパワー・コードのスライドなのか、それともＥをルートにして和音となる＜Ａ音→Ｂ音＞をハンマリングするのかなど、さまざまに解釈が可能。

その直後の単音フレーズも＜ABDE・ABDE＞でいくのか、それとも＜ABDE・ABDB＞とするのか、演奏するギタリストによってまちまち。そのポジションも、６弦 12 フレットで弾くのか、５弦７フレットで弾くのかで分かれる（トニーのオリジナルは前者）。

歌唱部バッキング前半のラスト＜Ｇ→Ｄ→Ｅ＞は、ほとんどのバンドがすべてパワー・コードで弾いているが、よくよく聴いてみると、右チャンネルのギターでＦ♯の音が鳴っていたりもする。その直後、Em を高音弦（１～３弦）で鳴らすところでは、ミスタッチなのか故意なのかが微妙なＧ♯の音が聴こえるパートもある。

とまあ、こんな感じで、さすがはトニー・アイオミ御大、あちこちで小技を効かせており、一見シンプルなこの曲も、完コピしようとすると相当の労力を要するのである。今は YouTube で本家の奏法が気軽に確認できるが、レコードの音源しかなかった時代には、どうやって弾いているかわからないことも多かっただろう。

Black Sabbath
PARANOID

誰が歌っても元祖は元祖!
ブラック・サバス・バージョンいろいろ

当然ながらオジー脱退後も、ブラック・サバスは「パラノイド」を演奏し続けてきた。

オジーの後釜となったロニー・ジェイムス・ディオによるバージョンは、『ライヴ・イーヴル』(1982年)で聴くことができるが、正直、ディオが躁について歌うのは無理がある気がしないでもない。途中我慢できず、思いっきり元気にシャウトのインプロ入れちゃってるし。やっぱりディオは"虎に乗れ! あの縞模様が見えるだろう?"のような、意味不明な歌詞のほうが合っているのでは。とは言え、この「パラノイド」もそれはそれでカッコいいのですけど。そのまま「ヘヴン・アンド・ヘル」のリフに戻ってくるところなどは鳥肌モノだ。

イアン・ギラン時代のライヴ映像も、YouTubeなどで見つけられる。ギランのヴォーカルが意外にもぴったりハマっているが、何よりも「スモーク・オン・ザ・ウォーター」と「パラノイド」が連続でプレイされていたりで、その場に居合わせることができた人たちがうらやましい限り。

オリジナル・メンバーがアイオミのみになってしまった80年代中期だと、やはりレイ・ギランの歌唱力が映える。この時期は、アレンジにキーボードがガッツリ組み込まれているのが特徴。1992年と2004年にはロブ・ハルフォードがヴォーカルを務めるサバスが実現しているが、これらもネットで簡単に観られてしまうのだからスゴい時代になったものだ。さすがにロブはアクが強すぎて、果たしてこれがサバスかという気もするが、きっとディオが加入したときもそんな風に思われたのでしょうね。

2017年2月4日、バーミンガムで行なわれたサバスのファイナル・コンサートの模様は、映像作『ジ・エンド〜伝説のラスト・ショウ』(2017年)で観ることができる。アイオミはこのイントロを<ABDE・ABDE>(の全音下げ)と弾いている。オリジナル盤では確実に<ABDB>と弾いていたはずだが、2000年代中盤あたりから<ABDE>、あるいはB音とE音が両方鳴っているパターンになってきているように思える。何故変えたのかとても気になるのだが、このあたりの研究者はいないのだろうか。

『ライヴ・イーヴル』

『ジ・エンド〜伝説のラスト・ショウ』

オジーが歌えばやっぱり本家!
歴代オジー・バンドでのアレンジは?

一方、サバス脱退後、オジーのほうもこの曲を歌い継いだ。ランディ・ローズによるバージョンは、『トリビュート〜ランディ・ローズに捧ぐ』(1987年)で聴くことができる。メイン・リフはリズムにもアレンジが加えられており、随所にランディらしいフレーズが光る。完全にオリジナルを無視したソロには、彼らしいコードからのアウト感もある。彼の弾く「パラノイド」は『ブリザード・オブ・オズ/ダイアリー・オブ・ア・マッドマン30周年記念ボックス〜ランディ・イヤーズ〜』(2011年)にも収録されているが、『トリビュート〜』とはリフからソロからまったく違った弾き方をしているので、毎晩かなり自由に弾いていたと推測される。

ブラッド・ギルスが参加したツアーの模様を記録した『悪魔の囁き』(1982年)バージョンは、多少スロー・テンポ。ギルスも相当改変しており、ソロも自由に弾きまくり。ベースのルディ・サーゾは途中ギャロップのリズムを入れており"アイアン・メイデンかよ!"と突っ込みたくならなくもない。レコーディング・ギタリストとしては二代目となるジェイク・E・リー在籍時のものは、映像作『狂気に彩られた"月に吠える"ライヴ!』(1984年)、『ライヴ+モア!』(1986年)に残されているが、こちらもイントロからアレンジしまくり、ことあるごとにオカズを入れソロも独自フレーズの完全なるジェイク・ワールドに仕上げている。

と、言うように、やはりアイオミっぽく弾こうなんていう殊勝なギタリストはひとりもいないようだ。これは、80年代特有の空気によるところも大きいだろう。当時のヘヴィメタルは当然懐メロ色皆無、完全なるリアルタイムの音楽であった。すなわち、ギター・プレイから音楽スタイルそのものにいたるまですべてが"進化"の最中であり、70年代の作品よりも80年代のほうが"新しく"、"優れている"と考えるのが当たり前だったのだ。"サバスって古臭くて聴けないんだよね"なんていう発言も、それなりに容認される雰囲気があったのである。

また、解雇という形で袂を分かったオジーに、サバスの原曲を尊重する必要などあるはずもなく、むしろお抱えのご自慢ギタリストの腕前、特色を全面に出す以外の選択肢などありえなかったということだろう。ザック・ワイルド版は『ライヴ&ラウド』(1993年)などで聴ける。非常にヘヴィなザック・バージョンは、ソロにほんのわずかだがオリジナルの影を残しているような気がしなくもなかったりと、前任者たちに比べ、アレンジの自由度は控えめ。これがガス・Gになると、かなり原曲に忠実になってくる。ヘヴィメタルがリアルタイムの音楽でなくなってくるにつれ、過去へのリスペクト度合いが上がってきたということなのだろう。

『トリビュート〜ランディ・ローズに捧ぐ』

『ライヴ+モア!』

『ライヴ&ラウド』

これが王道のカバー・スタイル 大物メタル・バンドの「パラノイド」

メタル系アーティストによるカバーとなると、やはりメガデスによるものが最もよく知られているだろう。『ヒドゥン・トレジャーズ』（1995年）のこのバージョンはかなり原曲に忠実なカバーになっているが、メイン・リフの最後の高音弦での Em をコンスタントに G♯で装飾しているのが特徴。一方のギター・ソロはやはりオリジナル無視。

ところで、2003～04年にかけて、デイヴ・ムステインが歌う「パラノイド」が車のCM（※日産エクストレイル）に使われていたことを記憶している方もいるだろう。だがあれ、実はメガデス・バージョンではないのだ。ギターはマーティ・フリードマンであるが、ベースとドラムは日本のスタジオ・ミュージシャン。日本で録音したバッキングを LA に持っていき、ムステインに歌ってもらったものなのだ。予算の関係でメガデス・バージョンが使えず、そのような措置になったとのこと。

アヴェンジド・セヴンフォールド・バージョンも、ヴォーカル・ラインに多少のアレンジが見られるものの、かなり原曲に忠実。でもやっぱり彼らもギター・ソロはオリジナル。ソロまでコピーするのは面倒臭いんですかね。それとも、アーティストとしての矜持なのでしょうか。

大物アーティストが多数参加している『トリビュート・トゥ・オジー：バット・ヘッド・スープ』（2000年／ほか）では、ヴィンス・ニールとジョージ・リンチが LA メタル・バージョンといった趣で仕上げている。リフに B♭音を混ぜることで、ブルージィさが加わっているのが特徴で、ギター・ソロも超エクステンデッド・バージョンだ。

少々変わり種となると、ドイツのデス・メタル・バンド、Debauchery（ディボーチャリー）によるカバーもある。"「パラノイド」をデス声で歌ったらこうなるだろうな"という想像どおりの内容。ところがこの人たちは、ギター・ソロまでかなり律儀にコピーしているのが意外と言えば意外。原曲解体度合いでいくと、デリンジャー・エスケイプ・プラン版が一番だろう。ブラスト・ビートに絶叫のグラインド・テイストでスタートしたかと思うと、中間部で突然ジャズ化……というかロカビリー化。果たしてこれをカバーと呼んでいいのか不安になってくるほどの冒険ぶりだ。

今は亡きピート・スティール率いるタイプ・オー・ネガティヴ・バージョンのインパクトも相当。サバスのなかではアップテンポなこの曲を、徹底的にスローダウン。メロディやコード進行にもアレンジを加え、完全に自分たちの楽曲として成立させるなか、「アイアン・マン」のリフを引用してみせるなどの遊び心も見せる。ドゥーム・メタルと言って差し支えないほどスロー＆ヘヴィで、ある意味サバス版よりもサバスっぽく仕上がっている。これぞカバーの理想型のひとつであろう。

ほかにもミニストリーによるインダストリアル・メタル・バージョン、北京出身のフォーク・ブラック・メタル・バンド、テンガー・カルヴァリーによる、モンゴルの民族楽器＋ホーミー・バージョンなども存在する。

『ヒドゥン・トレジャーズ』

『トリビュート・トゥ・オジー：バット・ヘッド・スープ』

SPECIAL COMMENT BY DAVID ELLEFSON

メガデスのデイヴィッド・エレフソンが、『ヒドゥン・トレジャーズ』にて「パラノイド」をカバーした理由を教えてくれた！

俺たちの友人、コンクリート・マーケティングのボブ・チアバルディが、『Nativity in Black』（『ブラック・サバス・トリビュート』）の企画をしていてね。それで俺たちにも参加要請が来たんだ。『ビーバス・アンド・バットヘッド』のサウンドトラック用に「99ウェイズ・トゥ・ダイ」をレコーディングしたときに、一緒に「パラノイド」も録ったんだった。

最初に俺が「パラノイド」を提案したんだよ。コピーも簡単そうだし、すぐに仕上げられるだろうと思ってね。アレンジも凝っていないし、初期のサバスの曲のなかには、70年代ヒッピーのヴァイブを漂わせているものがあるけど、そういうのは確実にメガデスっぽくないと思った。それに、ミネソタにいた頃、カバー・バンドでこれをプレイしたこともあって、オーディエンスの受けがいいことも知っていたから。"ライヴでプレイできるものを"と考えつつ、ほかの曲もいろいろと試してみたんだけど、一周して再度デイヴが「パラノイド」のリフをプレイした瞬間、もうこれしかないと思ったんだ。

バンドで一斉にワン・テイクでベーシック・トラックを録音したんだけど、ニック（メンツァ）がエンディングをしくじって、曲が終わってるのに叩き続けてしまってさ。だけど、彼のリアクションがおもしろかったから、そのまま使ったんだ。彼は"Fuck me running！"と叫んでいてね（※"しまった！"といったニュアンスのスラング。ただし、あまり使われる言い回しではない）。

『ブラック・サバス・トリビュート』

メタル・バンドじゃなくてもプレイしたい！
異ジャンルによる独自の「パラノイド」解釈

「パラノイド」クラスの楽曲になると、当然HR/HM以外のアーティストたちによるカバーも少なくない。

ロサンゼルスのパンク・バンド、ディッキーズによるカバーは、原曲ほぼそのままにプレイしているのに、完全にパンク・ロックという仕上がり。ブラック・サバスはヘヴィメタルだけでなく、パンクやハードコアにも多大なる影響を与えているというのも納得だ。最近だと、あのグリーン・デイも、ライヴで「パラノイド」のカバーを披露している（「パラノイア」と間違えてるわけじゃないですよ）。

パンクとロカビリーを融合させたサイコビリーのバンド、イギリスのメテオスのバージョンも秀逸。リズムもアレンジも完全にサイコビリーだが、これがまた何の違和感もない。ルーダー・ザン・ユーというアメリカのバンドは、「パラノイド」をスカ・アレンジしている。で、またこれも実に見事にハマっているのだから驚き。

ヘヴィメタルから最も遠いジャンルでのカバーとなると、The Lounge Brigade（ラウンジ・ブイゲイド）によるイージー・リスニング・バージョンだろう。しかし、これも違和感ゼロ。“お前さっきから違和感なししか言わないじゃないかよ”と思われるかもしれないが、やはり素材がいいと、どんな味つけでもイケちゃうということなのでしょうね。

原曲破壊ぶりでは、イギリスのニュー・ウェーブ・デュオ、ソフト・セルによるバージョンがダントツだろう。チープなリズム・ボックスとシンセによるカバーは、ヴォーカルがなければ曲名判別不能なほどのめちゃくちゃぶり。

このほかにも多くのバンドが同曲をカバーしているので、ぜひいろいろと探ってみてほしい。

歌詞の面から見る「パラノイド」
では日本語で歌うとすると……？

歌詞を手がけたギーザー・バトラーによれば、この曲のテーマは基本的に“鬱(depression)”についてとのこと。本来[paranoid]とは“被害妄想”というような意味であるが、ギーザーは当時[depression]と[paranoid]の意味の区別がはっきりついていなかったと語っている。彼は“マリファナを吸うと、被害妄想になるんだ。そしてその後、鬱がやって来る”と、自らの人生体験を振り返る。

<いつもしかめ面をしているから、みんな俺が狂っていると思っている。ジョークを聞いて、お前は笑うだろうが、俺はため息をつくだけ。幸せなんて感じられないし、愛などというものは偽りでしかない>……と詩的な表現なども一切なく、徹頭徹尾ギーザーが感じてきたであろう鬱やそれに伴う孤独感、疎外感が淡々と描写されていくさまは、実にリアルで恐ろしい。

ラストの[I tell you to enjoy life]＝[お前は人生を楽しんでくれ]というパートは、[I tell you to end your life]＝[お前の人生を終わらせてしまえ]だと思いこんでいた人も少なくなかったと言われるのも納得。ちなみに当時日本盤に付属していた歌詞カードで[Can you help me?　Are you for my brain?]と記されていた箇所は、正しくは[Can you help me occupy my brain?]である。このパート、ネイティヴでもなかなか聞き取りが難しいところだ。前述のヴィンス・ニール版は[Thought you were my friend]と歌っている。

ちなみに直訳ロックで知られる日本のアーティスト、王様は、この曲を「脳天爆発男」というタイトルでカバー（『鋼鉄伝説』収録／2008年）。“全然直訳じゃないじゃないか”と突っ込みたくなるかもしれないが、中身のほうは<彼女と別れた、みんな俺をヘンだと言う、いつも怖い顔だから>と、わりとオリジナルに忠実に歌っている。全音半下げと近年のオジーばりのダウン・チューンだが、バッキングでの大きなアレンジはなし。歌はオジー色皆無。ちなみに王様は『黒い安息日伝説』（2013年）というサバス直訳カバー作もリリースしており、そちらはさらにヘヴィな仕上がりとなっているので興味のある方はぜひ。

『黒い安息日伝説』

▲『鋼鉄伝説』のウラジャケでは、『パラノイド』のジャケットもカバー！

METAL HAMMER JAPAN

ヘヴィの流儀 #1

Text by Takahide"THUNDER"Okami
Translation by Tommy Morly
Photo by Masayuki Noda

Bill Steer ビル・スティアー

CARCASS カーカス

先のページにて特集した"ヘヴィ・ミュージックの権化"ブラック・サバスを始祖に、今も多くの（そしてほとんどの）メタル・バンドは、ほかにはない無二のヘヴィ・サウンドを求めて楽曲を生み出している。しかしその"ヘヴィな音"というのは、ややもすると抽象的であり、かつ個々の理想にも左右されるため、明確に定義するのは難しい。
そこで本シリーズではさまざまな要素が絡み合い形成される"ヘヴィな音"をテーマに、そのミュージシャンが持つ流儀を追う。第一回はナパーム・デス、カーカスといったグラインド・コアの名門バンドにて重低音を聴かせてきたギタリスト、ビル・スティアーだ。

To me, "Heavy" is a feeling... It's not to be defined by how low you tune or how much distortion you use.

――俺にとって"ヘヴィ"とはフィーリングであって、チューニングの低さや歪みの深さで定義するものじゃないんだ。

デスを聴いてゾッとさせられたしとてもダークで勝てる気がしなかった。

――今回は"ヘヴィな音、音楽"についての、あなたならではの定義や概念を聞きたいと思っております。

任せてくれってところだね！

――1969年生まれのあなたがギターに目覚めたときの、ヘヴィな音を出しているバンド、ギタリストとは？

俺がギターをプレイしようと思った頃、最もヘヴィだったバンドはモーターヘッドだった。どんなバンドよりも遥かにヘヴィ、そして最も速いバンドとして当時誰もが認識していたはずだよ。それからときが少し進み、ヴェノムが生まれてきた。ガキの頃にモーターヘッドのレコードを手にした俺にとって、彼らは本当にエキサイティングな存在だったさ。

――ちなみに、どの作品でしたか？

EPの『The Golden Years』（1980年）が、自分のお金で買った彼らの初めてのレコードだ。これはライヴ盤だったけど、今になっ

——とにかく試行錯誤を繰り返すしかなかった。何もかも、手当たり次第やってみるのみだったんだ。

ても当時とまったく同じ迫力だと感じるよね。生々しくて、本当のエキサイトメントが存在している。それでいてとても音楽的なんだ。“ファスト”エディ・クラークのクラシックなスタイルは、この分野では巨匠と呼ぶべき存在だ。彼のプレイには一切の嘘がなくて、俺はそれが大好きなんだ。

——自身のオリジナル・スタイルを作る際には、やはり先人よりもヘヴィなものにしたいと考えましたか？　それを具現化するための方法とは？

バンドを始めたとき、俺はあまりにも若くて経験がなさ過ぎて、誰かからの影響をしっかりと表現することはできなかった。自分なりにもがきながらパワー・コードをプレイしたりと模索していたよ。リフを耳で拾ってコピーしていたけど、当時はリード・ギターなんて未知の領域だったな。

——例えばどんな曲を？

パッと思いつくのは、もちろんブラック・サバスだね。彼らは究極のリフ・バンドだ。いくつかの曲は永久不滅のものだし、あれこれ分析しなくても弾けてしまうものなんだ。ギターを手に取ってちょっと音を探してみれば、いつの間にか弾けてしまっている。「アイアン・マン」なんてレコードから聴こえたものに近づけようと組み立てていれば、いつかはたどり着くからさ（笑）。

——自身でレコーディングを行なうようになった頃、ヘヴィなサウンドを作るために実践していたこととは？

俺みたいに機材やプレイの知識がなかった人間は、とにかくいろいろ試行錯誤を繰り返すしかなかったよ。レコーディング・スタジオに初めて入ったときなんて、そりゃあ何もかも手当たり次第やってみるのみ

したよ。そのバンドのメンバーがやっていたDEATH STRIKE（デス・ストライク）もなかなか素晴らしくて、両バンドは抜きん出て凄まじくヘヴィだと思った。彼らと同じサウンドを作れないものかと夢見ていたようなところもあったな。ギターのトーンやチューニングもヘヴィさを作るうえで役に立つかもしれないが、フィーリングだって重要だ。彼らはずば抜けたフィーリングを持っていて、かなり凶暴だったんだ。彼ら以外だとクラシックなバンドになってしまうが、デスもはずせないね。彼らを聴くとゾッとさせられたし、とてもダークで勝てる気がしなかったから。

ギミックに頼ったサウンドはどことなく浅はかになりがち。

――ギター＆ベースにおける“ヘヴィの要点”として最もシンプルな目安となるのがチューニングです。同じフレーズだったとしても、純粋にチューニングが低いだけでヘヴィになると解釈できる？

ある意味ではイエスかもしれないが、必ずしもそうとは言い切れないかな。個人的な見解だけど、Bスタンダードのチューニング（※全弦２全音半下げ）って結構ナイスだと思っている。しかしそれよりも下げるとドロッとしたサウンドになって、明瞭さを失ってしまうと思うんだ。もちろんDやC＃でもいくらか明瞭さは失っているけどさ。Aやそれより低くしているバンドもいるみたいだけど、パンチを失っているっていうのかな？　俺の耳には何かを失ったサウンドに聴こえてしまうね。

――初期のカーカスでも、２全音〜２全音半下げを実践していましたよね。一気にその領域まで下げていった？

ギターを始めた頃はチューニングが変えられるってことさえ知らなかったし、常にEスタンダードでプレイしていた。チューニングを少し下げるだけでロー・エンドとダークさが得られるってことに気づいて、当時聴いていたいくつかのアルバムからもそういったサウンドが確認できていたよ。ブラック・サバスみたいにみんなが知っているようなバンドだけじゃなくて、PILEDRIVER（パイルドライバー）みたいなバンドもやっていたんだ。次第にEのスタンダードは自分がプレイしたいものではないと気づき、チューニングも模索するよ

だった。アンプは借り物だったけど、経験を重ねていくうちに、どのアンプならより良いサウンドになるのかがわかっていったよ。今でも自分の音楽にベストなサウンドやトーンを探し続けているけど、17歳の頃の俺は、そことは程遠いところにいたと思うね。

――振り返って、自分でも満足のいくヘヴィなサウンドを作れるようになった作品というと？

それはとても簡単な質問だね。『ハートワーク』（1993年）で、初めて自分のギター・サウンドに満足することができた。自分の経験がともなってきたことにプラスして、当時の大事なことのひとつは、ピーヴィーの［5150］のヘッドが手に入るようになったことだ。俺らは幸運なことに、イギリスにやってきた１台目を手に入れられたと記憶している。まだ楽器屋に並ぶ前のものを手に入れたんだ。リヴァプールに到着したものをそのままレコーディング・スタジオに持ってきてもらうことができて、あれはとても幸運だったと思う。あのアルバムではマーシャルのアニバーサリーのヘッド（［6100］）と5150をブレンドして録音したはずだね。

――ちなみに、ナパーム・デス〜カーカスで活動していた頃、他者でヘヴィだと感じていたバンドとは？

80年代中頃の俺らはカセットテープを頻繁に交換し合っていてね。シカゴ出身のMASTER（マスター）を聴いたときは興奮

——低いチューニングが助けになることもあるだろうけど、それだけなら12歳の甥っ子だってヘヴィにプレイできる。

うになって。カーカスを始めた頃……あれは1987年に初めてのデモを作ったときだったと思うけど、あそこでBスタンダードのチューニングに落ち着いたんじゃないかな。これはいろいろな意味で機能的でもあって、5弦がEになるんで、Eスタンダードで録音された曲も問題なくプレイすることができるんだ。ほかにも都合のいいことはたくさんあったけど、大前提としてはシックリくるフィーリングがあったってことさ。それがそれ以来ずっと続いているということだね。

——音域だけの話でいうと、全員がベースを使えば一気にオクターヴ下がります。6弦ギターという形態にこだわるなら、バリトン・モデルという選択肢もあるとは思います。とはいえ、やはりロック・バンドというフォーマットでは、そうもいかないところもありますし、そもそもそれがヘヴィなメタル・サウンドに直結するワケでもないですよね。

これも個人的な好みの話になってしまうかな。バリトン・ギターのサウンドを好む人もいて、あの楽器でないと得られないものがあるのもわかる。しかし俺みたいなタイプの人間は、そういう道を歩みたいとは思っていないんだ。6弦で充分だと思っているけど、7弦や8弦を使って満足にプレイしている人もいる。俺はトラディショナルな6弦という楽器でやっていきたいし、俺にはこれ以上の楽器はないよ。ギターは今でもミステリーが詰まっていて、日々新たな発見をしている。これらからも永遠に何かを発見し続けるだろうってこともわかっているけど、それと同時にこの楽器では飽き足らず、ほかの方法に進む人たちがいることも素晴らしいことだと思っているよ。

——弾き方、テンポ感ということではどうでしょう？　初期ブラック・サバスのように、引きずるようなプレイのほうがヘヴィなのか、強烈な速さで演奏されるもののほうがヘヴィなのか……というと、あなたの見解は？

そもそもその比較自体が難しいと思う。極限まで速いプレイをするとなると、ダイナミクスがかなり狭まってしまうからね。初期のブラック・サバスみたいにもっとゆっくりでスウィングするようなタイプの音楽ともなるとダイナミクスさは豊かだし、両者を比較することなどできないんだ。しかしどちらがヘヴィに感じるかという話なら、個人的な感覚にはなるけどサバスのほうに軍配を上げるね。言葉では説明できないけど、そう言わざるを得ないものがある。

——なるほど。

俺にとって“ヘヴィ”とはフィーリングであって、チューニングの低さや歪みの深さで定義するものじゃないんだ。そういうのって表面的な要素だと思うし、俺がヘヴィだと思う音楽には楽曲そのものが持つフィーリングが大きなウェイトを占めている。俺がヘヴィだと思う音楽でも、それが他人には合わないこともあるし、クリーンだという理由でそうじゃないってこともある。俺は現在の人たちがヘヴィだと思っていることについて、必ずしも同意しているわけじゃないんだよ。

——当然、人それぞれにはなりますよね。

低いチューニングやハイ・ゲイン・アンプを使うことがある程度の助けになることもあるだろうけど、それだけでヘヴィになれるのなら、12歳の甥っ子だってヘヴィにプレイできてしまうさ。むしろそういったギミックだけに頼って作ったサウンドって、どことなく浅はかなものになりがちだよ。

——まさに。ちなみに初期カーカスには、ドロッとした重さも、激烈なスピード感もあります。自分たちの曲だった場合は、どちらのほうがヘヴィさが強いという感想になるでしょう？

ブラスト・ビートみたいに速いプレイになってくると、サウンドに込められる重量感に限度があるよね。そこから幾分かでもいいからスロー・ダウンさせられたら、サウンドは自然と太くなってくるものさ。だからやっぱり個人的にはスローな曲のほうがヘヴィに感じると言わざるを得ないかな。

キャプテン・ビヨンドの1stだって俺にはかなりヘヴィなアルバムだ。

——“楽曲のフィーリング”ということでは、フレージングも重要になってきますよね。チューニングを下げていてもLAメタル的明るい印象のフレーズではなく、やはりダークでドゥーミーなこともヘヴィなサウンドには必須でしょうか？

俺らにとっては大きな要素だよ。君が言うとおり、80年代にLA周辺で大きなシーンとなっていたそういうバンドだと、俺の耳にはヘヴィだと感じられなかったかな。当人たちはヘヴィな音楽を目指していたとは思うけど、そうは感じられなかった。音として聴こえてくるもの以上に、どういう意図を持ってプレイされたかが大切なんだ。女の子にとって魅力的なイケてる男っていうだけでは、真にヘヴィな音楽にはなりづらいんじゃないかと思うよ（笑）。

——マイケル・アモットが加入したのちは、メロディアスなフレーズも増えました。それとヘヴィさの関係をどう考えますか？

どうだろうなぁ……。俺らはそんな風に分析したことはなかったし、いいと思うことをやっていただけだね。それに若かったし、いい意味でナイーブなところもあった。バンド中で暗黙の了解としていたのは、そういったメロディックな要素は俺らの音楽をさらにいいものにし、ある意味健全なコントラストをもたらせたということだった。それまでプレイしていたのは、かなりダークでブルータルなものが多かったからね。メロディックでトラディショナルなセンスのあるパートというのは、快適な領域でもあった。もちろんそれがすべてのリスナーに受け入れられたわけではなかったかもしれないけど、俺らの場合はいい形で相乗効果を生むことができたと思うな。

——もうひとつ。ファイアバードの源流であるブルースは、ロー・チューニングやハイ・ゲインがなくとも、あのしゃがれ感やテーマ、土着感も含め非常にヘヴィな印象を受けますよね。メタル以外のジャンルでヘヴィだと感じるものは？

最近だと多くの音楽でそういった意味でのヘヴィさを感じることはあるけど、これもやはり個人の感想であることは認めるよ。ヘヴィの定義にもよるけれど、ジャック・ブルースの最初のソロ作品（『ソングス・フォー・ア・テイラー』1969年）なんてかなりヘヴィだし、70年代のジョン・マー

ティンのようなアコースティックのアーティストにだってヘヴィさを感じるよ。ここでいうヘヴィっていうのはもっと根本的な意味になってしまうけれど、彼らのパフォーマンスには相当な決意があって、とてもパーソナルなレベルで共感するところがあるな。

——まさに、人間性からくるヘヴィさですよね。

そう。リフを主体とする怒り狂ったギター・サウンドによって生まれるわかりやいヘヴィ・ミュージックを超えたところに存在する、また別のヘヴィさがある。ほかにも70年代のハードロックであっても、例えばキャプテン・ビヨンドの1stアルバム（『キャプテン・ビヨンド』1972年）なんかは俺にとってかなりヘヴィなアルバムだ。スタンダードなチューニングだけど、ギター・ソロなんてドライブしていてとてもヘヴィに感じるよ。リフはもちろんのこと、ドラミングもグレイトで革新的な音楽なんだ。

——では最後に、もう一度メタル・シーンでの話を。近年では機材の進歩が著しく、低音をプラスするウーファー的なシステムを組んでいるバンドもときどきいます。ヘヴィなサウンドを作るためにそれらは必要ですか？

彼らにとって必要なものであることは否定しないさ。そういった機材を使うことは彼らの強みでもあるだろうし、それで成り立つサウンドというものもあるだろう。感覚的には映画の音楽を作ることに近いのかもしれない。しかし俺の感覚としてはそこまでピンとくるものではないし、そもそもが若いオーディエンスたちに向けた音楽を前提とした技術だと思う。例えばツアー用にブルートゥース・スピーカーを買ったんだけど、俺としてはかなりナイスな買い物で。友人には“アタッチメントを付ければさらに低音が出せるぞ”なんて薦められたけど、俺はそういったものには興味がなかった。というのも俺が聴くような音楽って、そういったものを付けたからといって何かがより良くなるものでもないんだ。その一方でエレクトロニックやダンスだったり、君が言うようなタイプの音楽だったら意味があるものなんだろう。俺はそういったものを聴くわけじゃないから、ナチュラルな状態でもまっく不満はないね。

——今回はあなたが持つヘヴィの哲学を聴きましたが、その流儀が詰まったEP『ディスピカブル 鬼メスの刃』がリリースされました。ニュー・アルバムの発売も楽しみに待っております！

もちろんさ！　俺だってその日が来ることを楽しみにしているよ。なんてったってアルバムは少なくとも1年前に完成しているんだから（笑）。それが誰も聴けないだなんて、とってもヘンな状態だよ。もともとはアルバムを先にリリースして、入りきらなかった曲をEPとしてその後出すという予定だったから。しかし世界中がこんな状況になってしまい、順番を逆にしてリリースしたほうが活動にもギャップを生まないだろうとレーベルが判断してこういう形になったんだ。

——やはり、憎っくきはコロナ……。

今のところアルバムがいつになるのかはまだ読めないんだけど、そんな先にならないことを祈っているよ（ニコ）。

On Sale

『ディスピカブル 鬼メスの刃』
トゥルーパー／QATE-10126

復活作『サージカル・スティール』に続く、2021年リリース予定のフル・アルバムに先駆けて、4曲入りEPが発売中。首が切り落とされるが如くの激滅サウンドでのたうちまわれ！

The latest article from UK

Text by Merlin Alderslade
Photo by Will Ireland
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by「METAL HAMMER」340

RILEY GALE WAS ONE OF US

パワー・トリップ　ライリー・ゲイル

訃報というモノは、常に虚を突き訪れるものだ。8月に届いたその知らせは、やはりメタル界に大きな悲しみを蔓延させた。POWER TRIP（パワー・トリップ）のフロントマンであるライリー・ゲイルが、34歳という若さで逝去。オールドスクール・スラッシュ／クロスオーバーを信条とする彼らは世界中で高い評価を受けており、特にゲイリーはその実直な人間性もあって、多くのミュージシャン、ファンに慕われていた。残念ながら本邦ではブレイクとまではいかなかったが、彼らの躍進を楽しみに待っていた日本のリスナーも多かっただろう。本稿では彼の生前の声とともに、その高いミュージシャンシップに改めて触れていきたい。

8月25日の遅い時間、ライリー・ゲイル逝去のニュースが伝えられたとき、“メタル関係のツイッター”をちらりと見ただけで、パワー・トリップのシンガーが我々の世界でいかに愛されていたのかが理解できた。そう、彼がいかに素晴らしいフロントマンであったかという賛辞に埋め尽くされていたからだ。彼の胴間声はパワー・トリップのバズソウ・スラッシュ・アタックの中心をなすものであり、巧みに観客を操るさまは、彼のステージにおける存在感を恐るべきものにしていた。

しかし、あの晩最も目立っていたのは、ミュージシャンとしての彼にではなく、その人柄に対する賛辞であった。SNSは、ほとんどあっという間に友人、ファン、そして仲間による逸話で溢れ、ライリーの寛大さ、他者との共感能力、自身を生んだシーンに対する彼の愛情に関する話を目にしないことは不可能なほどだった。

ライリー・ゲイルは我々と同じ種類の人間だった。彼はメタルが真に目指すもののすべてを兼ね備えていた。つまり、大胆不敵で、妥協がなく、革新的で、しかし同時に素直に受け入れる心を持ち、偏見なく、心が広く、誠意に満ちていた。彼は自分のバンドがバカどもに利用されることを拒んだ。*“パワー・トリップのTシャツを着ている奴がいたら、おそらくそいつは変人やレイシスト、メタル好きのクソ野郎ではないということさ”*という『リヴォルヴァー』誌における発言はよく知られている。そして、彼は自分の信条を公にすることを恐れなかった。メタルが誰にとっても安全な場所であることを望み、まわりの人間にとってそれが現実となるよう尽力していた。

テキサスはダラス郊外の、アイルランドのカトリックの家庭で育ったライリーがヘヴィ・ミュージックに出会うまでには、多少時間がかかった。*“両親の家はまったく音楽的な家庭ではなかった”*と、彼は本誌に伝えている。学校では“少々ワル”で、“あらゆることと衝突した”というが、最終的に

ライリーが最も親近感を覚えたのは、彼のキャリアにおけるロック・ミュージックとの関わり方を規定し、仲間意識という感覚を教えてくれたハードコア・シーンだった。

*“非常に魅力的だった”*と、彼は振り返っている。*“みんな知り合いだったんだ”*。その仲間意識は、地元のパンク・バンドでの初期の活動を終えたあと、ライリーが少し違った、メタル・ヘッズにもハードコア・キッズにも同じようにアピールする、クロスオーバーのバンドをやりたいというメッセージを発信したときにとても役立った。

噂を聞きつけ連絡をしてきた地元のギタリスト、ブレイク・アイバニーズとふたりでジャムを開始。やがてメンバーがそろい、ギグが行なわれ、そして2008年のデモをもってパワー・トリップは正式に誕生した。

メタル界がようやく理解するまで、多少の時間が必要だった。(のちに『Opening Fire』というアルバムにまとめられた）何枚かのEPと、2013年のクソ最高なデビュー・アルバム『Manifest Decimation』をリリース後、パワー・トリップは全米にてメタル・ツアーをやりまくり、ロックの広大な客層から着実に新たなファンを獲得していった。ライリーにとっては単純なことだった。彼、そしてバンド・メイトが獲得できない客などいなかったのだ。

*“俺は何年も言い続けてきたんだ。「ヘヴィ・ミュージック好きの前でプレイすれば、最悪のコメントでも［君らは悪くないね］だ」とね”*と彼は告げた。*“俺たちのことを知らないお客さんの前でも、出ていってプレイすれば、たくさんのファンを獲得できた。俺たちはただヘヴィなだけじゃなく、キャッチーでもあるからな！”*。

2016年の初め、ギアはトップに入り始めた。USメタル界の大物ラム・オブ・ゴッド、スラッシュ界の伝説アンスラックス、そしてポスト・ブラック・メタラーのデフヘヴンとの北米ツアーで、パワー・トリップはキャリア中最大の、そして最もバラエティに富んだ観客の前でプレイすることになった。ライリーはのちに、あらゆる種類のメタル・ファンにアピールするチャンスとなったこのツアーを“ブレイクスルー（飛躍的躍進）ツアー”と呼んだ。ライリーの凄まじいカリス

“WHEN I GOT INTO MUSIC, I WANTED TO SEE EVERYTHING’”

——音楽にハマった頃は、何でも観てみたかった

テクニカル・ライティングで学士号を取得することになった彼は、そののち自身が受けた教育に感謝することになる。学士を取るにあたり、彼は“あらゆる言葉が重要である”ことを学んだのだ。

しかし、彼にとっての天職は音楽だった。ラジオで時折流れるモータウンや古いソウルが大好きだったが、彼の興味に火をつけたのはパンク・ロックだった。彼のいとこが、エピタフやファット・レック・コーズといったお墨付きレーベル所属のバンドを紹介したのだ。

やがて彼は、ホームタウンやその周辺で行なわれるロック・コンサートすべてを観に行くようになる。*“音楽に興味を持つようになった高校の最初の何年間かは、あらゆるものを観てみたかったんだ”*と振り返った。*“メタルでもハードコアでも、パンクでも何でも”*。

"LIVE YOUR LIFE THE WAY YOU WANT TO"

——生きたいように生きろ

マ性と、ステージでの扇動的な早口を備えたパワー・トリップは、ヘヴィ・ミュージック界最高のライヴ・バンドのひとつという本格的な評判を得始めていた。彼のステージ衣装は普段とまったく同じく、ベースボール・キャップ、ロング・スリーブのシャツ、そしてジーンズか短パン。マイク・スタンドを振り回し、回し蹴りを繰り出し、最前列に突っ込んで大騒ぎを引き起こす直前には、ジョークでみんなをクスクスと笑わせているような、普通の人間とロック・スターが同居しているようなタイプの男だった。

*"俺はいまだにフロントマンとして自信を持てているとは思わない"*と、のちに言っている。*"ただ楽しんで、自分らしくあろうとしているだけ。「友達がたくさんいる」と感じられる場所では、リラックスできる。自信があるんじゃない。居心地がいいんだ"*。

アンダーグラウンドのメタル界におけるパワー・トリップのステータスが上がるにつれ、さらに知名度を上げるべく確固たるブレイクを果たせるアルバムが必要となった。2017年の『Nightmare Logic』がその役割を果たした。

ピュアで、混ざりっけなしの沸き立つスラッシュ・メタルの爆発、ガテラルのハードコア、そして、こっそりと忍び寄り脳ミソに深く埋め込まれるよう巧みに織り込まれたフック。この作品は、ロック・メディアの至るところで年末投票の上位に食い込み、『メタルハマー』読者による2017年のアルバム・トップ10にも選ばれた。

大人気ナンバー「Executioner's Tax (Swing of the Axe)」は、その年の傑出したメタル・アンセムのひとつとなり、残忍なほどヘヴィでありながら同時にキャッチーたり得るというバンドの尋常ではない音楽的巧みさと、サウンド的には超メタルでありながら、哲学的レンズを通じ現実世界の問題を解剖するという、ライリーの熟練した能力を見せつけた。

*"斧を振り回すという内容の、ただのキャッチーな曲に思えるかもしれないけど、実はこれは死のなかに慰めを見出すことについての曲なのさ"*と、彼はのちに書き留めている。*"資本主義社会において、俺たちは喜んでドラッグ、食べ物、テレビ、酒、ギャンブル、セックスであれ何であれ、存在に関する死の苦痛を紛らわすために金を払う。これらすべてに意味がないという事実について、気持ちを楽にするために、俺たちは処刑人の税金(executioner's tax)を払うのさ"*。

ライリーの世界の見方は、音楽について始まり、必然的にアメリカの政治、銃の所有権、経済、そして社会問題へと進んでいく彼のインタビューのなかで、しばしば明らかにされた。

彼は進歩的価値観を信じていたが、[フォックス・ニュース]のパーソナリティ、グレッグ・ガットフェルドがパワー・トリップの曲を自分の番組でかけたあと、ライリーが彼のポッドキャストに出演した際に見て取れたように、異なった視点と関わり合いを持つ重要性も理解していた(※フォックスはトランプ支持の保守系メディアであるため、リベラル寄りのライリーは不愉快だと発言。その後、グレッグ・ガットフェルドのポッドキャストでの対談に応じた。かつライリーの死後、フォックスは追悼を行なった)。

パワー・トリップが有名になるにつれ、ライリーについては"メタル・シーンで最も筋の通った、偉ぶらない人物のひとり"という評判も上がっていった。彼はツアーをともにしたミュージシャンたちの面倒を見たし、さらにシーン全体やその状況についても深く気にかけていた。英『メタルハマー』誌がスポンサーの、パワー・トリップ、トリヴィアム、コード・オレンジ、そしてヴェノム・プリズンのツアーを記念して行なわれた2018年の巻頭特集で、彼は若いバンドが音楽を続けるための収入を得られないことに対する懸念を表明していた。

*"メタルは大きな転換点にいる"*と彼は言った。*"おそらく俺たちは一か八かの状況にある。人々は決めるべきなんだ。今そこにある音楽をサポートしたいか? 俺たちバンドをこれから先も観たいのならば、何らかの形でお金を払ってもらわなくてはいけないということを理解するべきなんだから。バンドは本当にたくさんいるし、ハイプ・サイクルは実に速い"*。

イギリス最高のロック・フェスティバルであるダウンロードやブラッドストックのメイン・ステージでその日の話題をさらうなど、2018年、2019年はパワー・トリップにとってさらなる晴れ舞台が待っていた。

2020年も最高の年になるはずであった。ファンたちはニュー・アルバムを期待していたし、予定されていたラム・オブ・ゴッドとクリエイターとの《ビッグヒット・ツアー》は、今年最も注目されていたメタル・イベントのひとつだった。

だが、もちろんそれは実現しなかった。コロナがあっという間にストップをかけたし、私たちはライリーがステージで暴れまわる姿を二度と観られないことを知っている。彼のライヴにおける雄姿が観られないのは実に寂しいことだが、それ以上に、私たちはメタル・シーンにおけるポジティブな力を失ってしまったように感じられる。他人の気持ちを理解し、批判的思考を行ない、現状をひっくり返すことを恐れぬ男。そして彼は、あらゆることに答えを持つ男でもあった。死そのものについての答えですら。

*"死はそれほど恐ろしくはない"*と、彼は考えにふける。*"俺は死というものをかなり消化している。死ぬときは死ぬんだと思う。天から与えられた時間というものがあり、どんなに悲しんでも誰も生き返らない。とてもネガティブに聞こえるかもしれないけれど、ネガティブではないんだ。そう考えることでむしろ救われるんだよ！　この生を得て、やりたいことを何でもやる。この世界には、本当にたくさんの人がいて、すべてのことが非常に素早く進んでいる。人生を好きなように生きたほうがいいんだ"*。

パワー・トリップは、ファンに《ダラス・ホープ・チャリティ》に寄付するよう呼びかけていた。

WWW.DALLASHOPECHARITIES.ORG

世界からの敬意

◎彼、そしてパワー・トリップとまたツアーをやるのが本当に楽しみだったんだ。素晴らしいフロントマンだというだけでなく、ライリーは賢くて、雄弁で、本をたくさん読み博識で、政治に鋭く、心優しくて、自分の考えを表明することを恐れなかった。これらすべてのことは、アーティストとして、人として、俺が重視することなんだ。俺たちはすごくウマがあったんだよ。
――ランディ・ブライズ（ラム・オブ・ゴッド）

◎彼には一度しか会うチャンスがなかったけど、彼のことをずっと知っていたかのように即座に思わせるヤツだった。とんでもない損失だよ。パワー・トリップ、そして彼の近しい人たちに愛と深い追悼の意を表する。
――ジェイ・ワインバーグ（スリップノット）

◎漫画やゲーム、そして食べ物について話したね……しょっちゅう……そして、君は誰よりも世界中を興奮させるバンドのフロントマンだった。寂しくなるよ。安らかに眠れ、ライリー。
――マシュー・ヒーフィー（トリヴィアム）

◎実際に会ったのは数回だったけど、インターネットでは随分やりとりをした。同類という感じがしたよ。物事に対する評価の仕方や見方がとても似ていてね。果敢に戦っていた彼がいなくなって、寂しくなるよ。レスト・イン・パワー・アンド・ラブ。
――ブライアン・フェアー（シャドウズ・フォール／ヘル・ナイト）

◎とんでもないショックだよ。ライリーとパワー・トリップ・ファミリーは、いつも俺たちを歓迎し、親切にしてくれた。初対面からずっとね。俺たちのコミュニティは、これまで会ったなかで最高に素晴らしい、最高にお楽しみ好きな魂のひとつを失ってしまった。
――ハームズ・ウェイ

◎ライリーのことは本当に悲しい。カンニバル・コープスのオープニングをやったのを観たけど、クソカッコよかったよ。バンドのメンバーと彼の家族に、ポジティブなエネルギーを送る。
――ロブ・フリン（マシーン・ヘッド）

◎安らかに眠れ、ライリー。君はヘヴィ・ミュージックの歴史に、永遠に残る多大なる影響を与えたよ。彼の友人、家族、そしてバンド・メンバーにお悔やみ申しあげます。
――コード・オレンジ

◎偉大なるフロントマン、そしてさらに偉大なる友人へ。ロッティング・アウトがテキサスでプレイするときはいつでも面倒を見てくれて、好意を示してくれた。家族、友人、ファンたちにお悔やみを申しあげます。ウィ・ラブ・ユー、ライリー。
――ロッティング・アウト

◎いつでも俺のお気に入りのバンドのひとつ。レスト・イン・ファッキン・パワー、ライリー。
――ケイレブ・ショモ

◎レスト・イン・パワー、真のレジェンド、ライリー・ゲイル。俺たちみんなのインスピレーションだったよ。君がいなくなってすべてが変わってしまうだろう。決して忘れない。パワー・トリップ・ファミリーにお悔やみ申しあげます。
――ノックト・ルース

◎俺の友人がいなくなってしまったなんて、いまだに信じられない。クソ悲しいね。寂しくなるよ、ライリー。
――アイス・T（ボディ・カウント）

◎彼は真にみんなの味方だった。友情村の村長みたいな。行ったところすべてに何百万人もの友達がいたみたいだった。みんなを結びつける男。カリスマの源。今悲しんでいる非常に多くの人々のことを考えるとね……パワー・トリップのメンバーと家族たちにお悔やみ申しあげます。
――トレヴァー・スターナド（ザ・ブラック・ダリア・マーダー）

now on sale!
METAL HAMMER JAPAN
オリジナル・ロゴTシャツ
METAL HAMMER JAPAN ロゴをパワフルにあしらったオリジナル T シャツが発売中！
METAL HAMMER JAPAN ロゴをパワフルにあしらったオリジナル T シャツが発売中！METAL HAMMER JAPAN ロゴをパワフルにあしらったオリジナル T シャツが発売中！
カラー・バリエーションは、<白ボディ>&<黒ボディ>×各色ロゴの全 8 パターンをラインアップ。
5.0oz のこだわり薄手生地は、街歩きはもちろん、熱気のこもったライヴ会場で着るのも GOOD！
model > IKEPY (HER NAME IN BLOOD)、no-mer-cy
□ Color Variations
ボディ：ホワイト、ブラック
ロゴ・カラー：ブラック、ホワイト、
グリーン・カモ、グレー・カモ、ピンク・カモ
□ SIZE
150 ／ 160 ／ S ／ M ／ L ／ XL ／ XXL
□ PRICE
¥3.500（全カラー／送料込み）
ブラック×ホワイト・ロゴ
ホワイト×グリーン・カモ
ホワイト×ブラック・ロゴ
ブラック×グリーン・カモ
ホワイト×ピンク・カモ
ブラック×グレー・カモ
※ロゴの大きさはボディ・サイズごとに若干異なります。
詳しくはオンデマンド T シャツ・サイト［TOD］をチェック！
https://t-od.jp/index.html

STARS' WORDS

トミー・モーリー　シュザイの復習

EPISODE-3

トミー・モーリー

音楽専門誌にて、翻訳・ライターとして活動。昨号のライヴ盤特集に触発されて（遅ればせながら）購入したゲイリー・ムーアのアルバム『ロッキン・エブリ・ナイト』にハマり、ギター歴25年目にしてやっと伝統的なストラトキャスターに手を出しそうな予感……。

Original intention was to release the album first, and then, leftover tracks were gonna come out later as an EP.

——もともとの予定ではアルバムを先にリリースし、その次に残りのトラックをEPとして出すつもりだったんだ。

By Bill Steer

当コラムでは、本誌通訳のひとりであります私トミー・モーリーが、アーティストとの取材時に交わした会話のなかから、こぼれ話とともに、英会話としても使える言い回しをピックアップしていきます！

今回取り上げるのは英国が誇るエクストリーム・メタルの雄、カーカスのオリジナル・ギタリストのビル・スティアー氏の《Stars' Words》です。これまでも対面や電話にてインタビューをしたことがありますが、常にゆったりかつ聡明に語るさまは、まさしく英国紳士！といった印象。同じお国柄からなのか、その振る舞いにはスティーヴ・ハリスやデヴィッド・ベッカムに通じるスター性を感じます。ライヴで観た方々にはステージ上での華やかさなどから、うなずかれる人もいらっしゃるのではないでしょうか？

さて今回ピックアップしたフレーズは、バンドの今後をうかがった際のもの。活動の展望が見えないながらも、音源のリリース予定について出てきた言葉ですが、ここで注目すべき単語は［leftover］です。

この［leftover］は＜残り物・余り物＞という意味の一般的な単語で、海外のニュースや新聞ではよく目にしますが、我々日本人にはあまり馴染みがない言葉とも言えます。実際、私も幼い頃にこの［leftover］を耳にして、一体何を言っているのだろうか？と疑問に思ったことがありました。

そもそもは［leave：残す］という動詞を由来としていますが、同単語は＜離れる＞という意味もあり、それが難解さを生んでいました。別の単語として［remain：～のままであり続ける］という言い方もあり、我々メタル勢としてはレッド・ツェッペリンのドキュメンタリー映画『Song Remains the Same』（『レッド・ツェッペリン狂熱のライヴ』）にも使われていたので覚えやすいかも？

さてこの［leftover］、どんなときに使うかというと、日本での日常と同じ“ある”シチュエーションで登場することが多いです。それはズバリ“昨日の夕飯の残り”といった、食事の残り物を意味する場合です。母親に“母ちゃん、朝ご飯は何？”と子供がたずねては、“昨日の夕飯の余りものを食べてなさい！［Have last night's leftovers!］”……という会話は、世界中どこの家庭でもなされているということですね。

余談ですが、この“残り物”を転じて未発表音源を［leftover］と呼ぶ人も多く、私はスティーヴ・ヴァイ氏のアルバム『Flex-Able Leftovers』（『フレクサブル・レフトオーヴァーズ』）も思い出しました。

ではまた次の号でお目にかかりましょう！

[leftover]

＜名詞＞

【意味】残り／余り／（料理の）残り物

【語源】《left-》“～残された”＋《-over》“（日などを）越えて、持ち越されて”

例文

Let's work on leftover materials.

（残りの素材について作業に取りかかろう）

I've had enough of leftovers!

（もう残り物を充分食べてきたよ！）

LIFE LESSONS 1

人生の教訓

ADRIAN SMITH

アイアン・メイデンの伝説的ギタリストが、40年にも及ぶロード生活から学んできた教訓を語る。

アイアン・メイデン　エイドリアン・スミス

90年代にしばしの離脱があったものの、1980年からアイアン・メイデンのギタリストとして数々のヒット曲とともに時代を彩り、40年以上に渡ってバンドのキャリアを築く。2020年の計画はお流れとなってしまったが、メイデンにまつわる逸話はもちろんのこと、釣りに関する本を執筆する時間を作ることができた――本誌はそんなエイドリアンを直撃、インタビューを試みた。

俺は本を書こうだなんて思ったこともなかったよ。

誰かから話をもらったんだ。“あなたは熱心な釣り人で、たくさんの逸話をお持ちとうかがいました”と言われ、出版社とのミーティングがセットアップされた。ふたを開けてみれば俺自身執筆活動を楽しんだし、1年半かけてほとんどの部分をツアー中に書いたよ。グレイトなプロジェクトで、自分の過去を振り返ったり、釣りやバンドで起こったことを書いていったのさ。

成功には、何かしらの犠牲がともなうものだ。

15歳になった頃、俺はしばらく釣りに出かけるのをやめた。音楽にのめり込んでいったのもこの頃で、これから先の人生で何をやっていくのかを誰かと話すことも多々あったね。“もし自分がミュージシャンとしてやっていく”のなら、それにすべてを捧げるべきだと考え、釣りをやめて、サッカーもフォローしないことにしたんだ。

俺は熱狂的なマンチェスター・ユナイテッドのファンだったが、“あのギターを手に入れたらゲイリー・ムーアのサウンドが手に入るんだ！”と夢を見て、レス・ポールのために小遣いを貯めたよ。でもまずはギターの弾き方を学ぶところから始めろってことだけどさ！

今でもそのギターは持っているけど、腕前は現在のほうがちょっとはマシになったかな。

ただ皮肉にもアイアン・メイデンに加入する前に、またしても釣りに手を染めてしまって。俺とクライヴ・バー（アイアン・メイデンの元ドラマー）が最初に交わした話は、ほとんど釣りのことばかりだったんだ。デイヴ・マーレイとツアー中に釣りに行ったこともあったね。というのも、音楽でしっかりとしたキャリアを歩めるようになってからは、かつて愛していたことに戻ってみようと決めていたんでさ！

ときに両親には理解できないこともあるものさ。

俺がミュージシャンになりたいと伝えたとき、両親はノリ気じゃなかった。学校に通ってそれなりにいい仕事に就いてほしいと願っていたのさ。今ならそういった親の気持ちにも共感できるが、当時の俺のヒーローといえばジョージ・ベスト、ボビー・チャールトン（※ともにイギリスを代表するサッカー選手）、ブラック・サバス、ディープ・パープル、フリーだった。そんなバンドを聴いてノックアウトされたし、それこそがまさしくやりたいことだと確信した。

多くのティーンエイジャーと同様に、頭をガツンとやられるほど考えさせられる機会がなければ、何が本当にやりたいことなのか自分でもわからなかった。学校の授業で教えられることに興味を失っていたし、サッカー以外のスポーツには興味もなくて、何をやりたいのかわからなくなっていたんだ。それでも俺が決意したとき、両親は絵に描いた餅だと思い、それで本当に食っていけるとはちっとも思っていなかったよ。ミュージシャンになりたいヤツらの98%はそのとおりだが、俺は幸運にもそれでうまくいったってことさ。

ロック・ファンでいることは、70年代ではファッショナブルなことじゃなかった。

俺の本のなかのストーリーのひとつで、デイヴ・マーレイとの出会いについて触れているところがある。当時からデイヴは本当に素晴らしいプレイをしていて、傑出したサウンドを持っていたね。ギター・プレイに関しては俺よりも遥か先を行っていたので、当時は自分が彼の足下にも及ばないことの言い訳として“俺はシンガーだった”と伝えていたんだ！

どうにかしてデイヴとその仲間たちとのジャムに混ざり込み、髪を伸ばして当時からしたら風変わりなルックスをする

> **“I TOLD DAVE MURRAY I WAS A SINGER”**
>
> ――俺は、デイヴ・マーレイに自分はシンガーだと伝えた。

The latest article
from UK

Text by Rich Hobson
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』340

"I HAD MY WAH-WAH PEDAL IN A TESCO BAG"

――ワウ・ペダルをテスコの買い物袋に入れて持ち運んでいたんだ。

ようになっていった。俺らはまったく知られていなかったし、ちょっとしたカルト集団に思われていたんじゃないかな！

メイデンに加入してからは、絶望に襲われるようになった。

"絶望や落ち込みを扱うような釣りの本"なんてほとんど目にすることがなかったし、前者を本のなかに含めるのはちょっと変な気がしていた。でも俺らはみんな人間だし、絶望や落ち込みの多くはストレスとどう向き合うかによって生まれてくるものだ。

"自分はなんて恵まれていないんだろう！"というのは好きじゃないが、80年代の俺にはそういったところがあって。アイアン・メイデン加入直前の、最後のライヴはロンドンのパブでね。俺はワウ・ペダルをテスコ（※イギリスの大手デパート）の買い物袋に入れてバスでライヴ会場に向かい、そのすぐ次はアイアン・メイデンでの巨大なライヴだった。かなりの飛躍だよね！

俺は完全な虚勢を張ることで最初のツアーをやってのけたけど、その後次第に心のなかでモヤモヤを抱えるようになったよ。多くのファンが大金を払って俺たちを観に来る一方で、グレイトなミュージシャンはほかにもたくさんいる。激しい競争があるっていうことだ。

このことは何度か俺に重くのしかかってくるようになり、アメリカを開拓するようになってから酒やドラッグが支えになっていった。でもこういうことって対処しなければならないもので、覚悟を決めた今となっては同じ葛藤を抱えてはいないさ。これもすべて成長する過程の一部だったということだね。

趣味を持つことは、天からの恵みだよ。

ロードに出ると、出番が来るまでに万端の準備をするものだが、それ以外のときは多くの時間を持て余すものでさ。だから俺は大抵スーツケースのなかにいろいろと詰め込んで、何かしらをやれるようにしていたよ。もっと言ってしまうと、ツアーっていうのは本当に……本当に退屈だったりするもので、だから年月を重ねたバンドってそれに飽きてしまうものでもあって。

誤解してほしくないんだけど、ステージで過ごした時間は本当にグレイトで、残りの22時間は自分の人生を過ごすときだ。それは俺にとってどこかに出かけてエンジョイするための時間さ。精神的にもいいことだし、ビリー・コノリー（※イギリスのテレビ司会者）の言葉で言うなら"釣りは筋書きのある瞑想"ってことだね。

田舎に逃げるっていうのは、何にも替えがたいこと。

イースト・ロンドンのクラプトンに育つということは、たくさんの汚れた水路に囲まれて生活することであり、その臭いは何マイル離れたところにでも届いてしまうほど強烈だ。ハートフォードシャー（※ロンドン北部に隣接する街）みたいなところに釣りに出かけるのは特別な休日って感じで、俺は気に入っていた。飛行機、移動車、ホテルなんていうパターンは何度か重なるとしんどくなってくるけど、そんなときに田舎に行ってリラックスするっていうのは、息抜きにもってこいなんだよ。

だから俺たちは田舎を守っていかなくちゃならない。

俺は世界中をまわってきたが、ニュージーランドは特にアメイジングだ。信じられないくらいに美しく、汚れていないし、どことなく40年代のイングランドに似ていて、透明な水が流れるゴミのない川があったりもする。俺はイギリスを愛しているけど、一部のクソみたいな人間たちは川にゴミを捨て、田舎には一切の敬意を払わず本当にイラついている。

そうは言っても、今の川は俺がガキの頃と比べればかなりキレイにもなっていて。工業絡みの環境汚染にまつわる法令が厳格化されたようで、釣り愛好家たちのクラブは率先して川の掃除を行なっているよ。釣りって単に見知らぬ土地に赴いて魚を釣って帰るだけ、つまりテイクするだけの活動だと思われているけど、心ある多くの釣り人たちは何かを与えていくものなんだ。もし誰しもが少しずつでいいからこういった活動をしていけば、世界はもうちょっと素晴らしい場所になると思うな。

メイデンのファンを世界中で目にするのはアメイジングなことだ。

どこに行っても俺らのマーチャンダイズ・アイテムを目にするよ。このバンドの素晴らしいところは、世界のどこにでも行けて人々に音楽を届けられるってこと。言い換えれば、どこにでも俺たちのもとに集まってくれる人たちがいるということだね。とは言え、メイデンのシャツを着ている人と擦れ違っても、俺にはまったく気づかないなんてザラだぜ！

マーチャンダイズっていうのは、バンドの認知度を上げることとはあまり関係ないのかもしれないな。でもかつてアイルランドで俺が親父と一緒に出かけたときにはこんなことがあった。とてもローカルで小さな街に俺が来たってことが広まり、エディがプリントされたシャツを着たキッズが川辺で俺らをしばらく見ていた。俺が彼らのほうに歩み寄っていくと、サインを頼まれてね。サインをしたら、今度は2人の修道女がさらに駆け寄ってきてさ！　彼女らは俺がサインしたアルバム、俺の顔を見て、とても興奮した様子だったな。

車でのパレードって見かけほど豪華なものじゃないね。

イタリアやメキシコみたいな国だと警察による車両の誘導があって、あれは少し興奮するようなところがある。ちょっとやり過ぎなんじゃないかって意見もあるだろうけどさ！　パトカーによるエスコートを受

ステージでの時間は本当にグレイトで、残りは自分の人生を過ごすときだ。

けるのは派手なことだと思うかもしれないけど、けっこうストレスフルなもので、車酔いになることもあるんだ。
　会場帰りの車だと、ファンに追いつかれないようにかなりのスピードを出しているんだが、サングラスをかけて160キロくらいのスピードで夜道を突っ走るし、アクション映画かよ！って思うね。

何が大当たりするのかなんて誰にもわからない。

　何年か前に、サクソンを始めいろいろなバンドと一緒にツアーに出たことがあった。彼らはグレイトだったにもかかわらず、どうして今以上にビッグなバンドにならなかったのか俺にはわからなかった。ゴーストはかなり違うバンドだけど、とてもおもしろいね。
　最近だと、前座を務めてくれるバンドを楽しんでいる。彼らはその位置にくるまでに相当な努力をしてきたということだ。そしてゴーストは確実に何かを持ったヤツらだよ。

釣らなきゃならない大物は常にいる。

　今だって完全に安泰ってわけじゃないし、何かを証明したり、今までやったことのないものにトライしたいと思っている。大物を釣りに行くべき新たな場所がまだあるし、俺はそれを楽しみにしているからこそ続けられるんだ。この情熱とスティーヴ・ハリスとテニスをすることで健康を維持している。俺らは誰ひとりとしてスロー・ダウンしていないし、今でもいろんなことにチャレンジしたいと思っているんだぜ！

Release Information

『ナイツ・オブ・ザ・デッド、レガシー・オブ・ザ・ビースト：ライヴ・イン・メキシコシティ』
ワーナー／ WPCR-18396/7
2019年にメキシコシティにて行なわれた《レガシー・オブ・ザ・ビースト・ワールド・ツアー》3公演の内容を収録した最新ライヴ作がリリース！　全17曲・100分を超える大ヴォリュームで、近い未来、きっと実現するであろう日本公演へのテンション・キープにももってこい！

LIFE LESSONS 2

人生の教訓

BARNEY GREENWAY

ナパーム・デスのフロントマンとして、すでに30年ほど強烈な戦いぶりを見せ続けているバーニー。かといって、彼のバンドを政治的と呼んではいけない。ちょっと待て、ではなんと呼べばいいんだ!?

ナパームデス　バーニー・グリーンウェイ

バーミンガムのグラインド・コアのパイオニア・バンド、ナパーム・デスのフロントマンであるマーク“バーニー”グリーンウェイは、エクストリーム・ミュージックの世界における至宝的声の持ち主である。ナパーム・デスに参加した1989年以来、ノイジーでアンダーグラウンドな存在に始まり、カルト的な現象へと成長し、彼の錯乱状態的ヴォーカル・スタイルと政治批判への情熱的な姿勢は、バンドの大きな成功要因となった。彼は長年のバンド活動において、一体何を学んできたのか。

“やれるもんなら、やってみろ！”という真剣さが感じられたし、あのDIY精神には相当な影響を受けたものさ。

俺はこれまでいくつかのバンドを出たり入ったりって感じで渡り歩き、真剣にやっていたわけでもなければどことなくお遊びみたいなところもあった。ただ、少なくとも俺にだって何かができるってことを示してくれたよ。

ロック・スターではなく、ミュージシャンになれ。

いつからか俺は、崇められることが不快になった。人々がナパームに対して称賛を送るようになったときも、俺にとってはかえって恥ずかしくなるようなことでもあって。

俺らは単にこのバンドでやっていることがうまくできて、メンバー間にはケミストリーがあり、やりたいことをイイ感じに具現化できていただけだ。だから俺だけが注目されるんじゃなくてバンドが取り上げられるべきだし、俺なんかに注目するなと思っていた。“俺”じゃなくて“俺ら”が発してきたアイディアが重要なんだ。もしそこが注目されなければ、俺がやっていることなど何の意味もないから。

みんなレミーにひれ伏すべきだ。

俺にとって、音楽のあるべき姿のすべてを網羅していた最初のバンドはモーターヘッドだった。彼らは一切の規則に従うことなく、やりたいように歩み続けていた。当時はどれだけうまくプレイできるかを見せびらかすような、言わばキザな音楽もいくらかは流行っていたけど、俺はそんなものに全然興味を持っていなかったね。

彼らは単に騒々しくやり続け、そしてひたすら速くプレイしていた。彼らは俺のすべてだった。当時モーターヘッド以上に愛したものなどなかったよ。彼らは我々人間にとっての神のような存在だったんだ。

地元のローカル・シーンは、俺がミュージシャンになれるってことを教えてくれた。

昔はたくさんのライヴに足を運んでいたが、[ザ・マーメイド] を始めとしたいくつかの会場に行くようになってから、ナパームみたいなバンドの存在に気づくようになって。彼らの初期のライヴから、どこかしら共感できるものを感じたんだ。当時見たすべてのバンドから

自分を表現するアートを作ってみろ。

ナパームは自らの強い信念のおかげで、生きるか死ぬかを繰り返してきた。レコードの売り上げや人気が伸びたりするのも、常にバンドの判断によるものだった。そして、音楽へのアプローチ方法が変わるようなこともなかったよ。

当時のバンドたちはどうやって“アメリカをブッ潰すか”を議論していて、そこから骨が抜かれたような馬鹿げたアルバムを作り、何にもならないことをやっていた。皮肉にもいい趣味のものを作ろうとしても、散々なものができあがり、自分が得意なことにも関わらず、始める前よりもヒドいものになっていたということだ。

自分の強みを生かしてごらんよ。人々が知りたいのはキミがどんな人間であるのかという本当の姿で、着飾り装った姿を知りたいわけじゃないんだぜ。

“BANDS WRITE HALF-ARSED ALBUMS TO ‘CRACK AMERICA’”

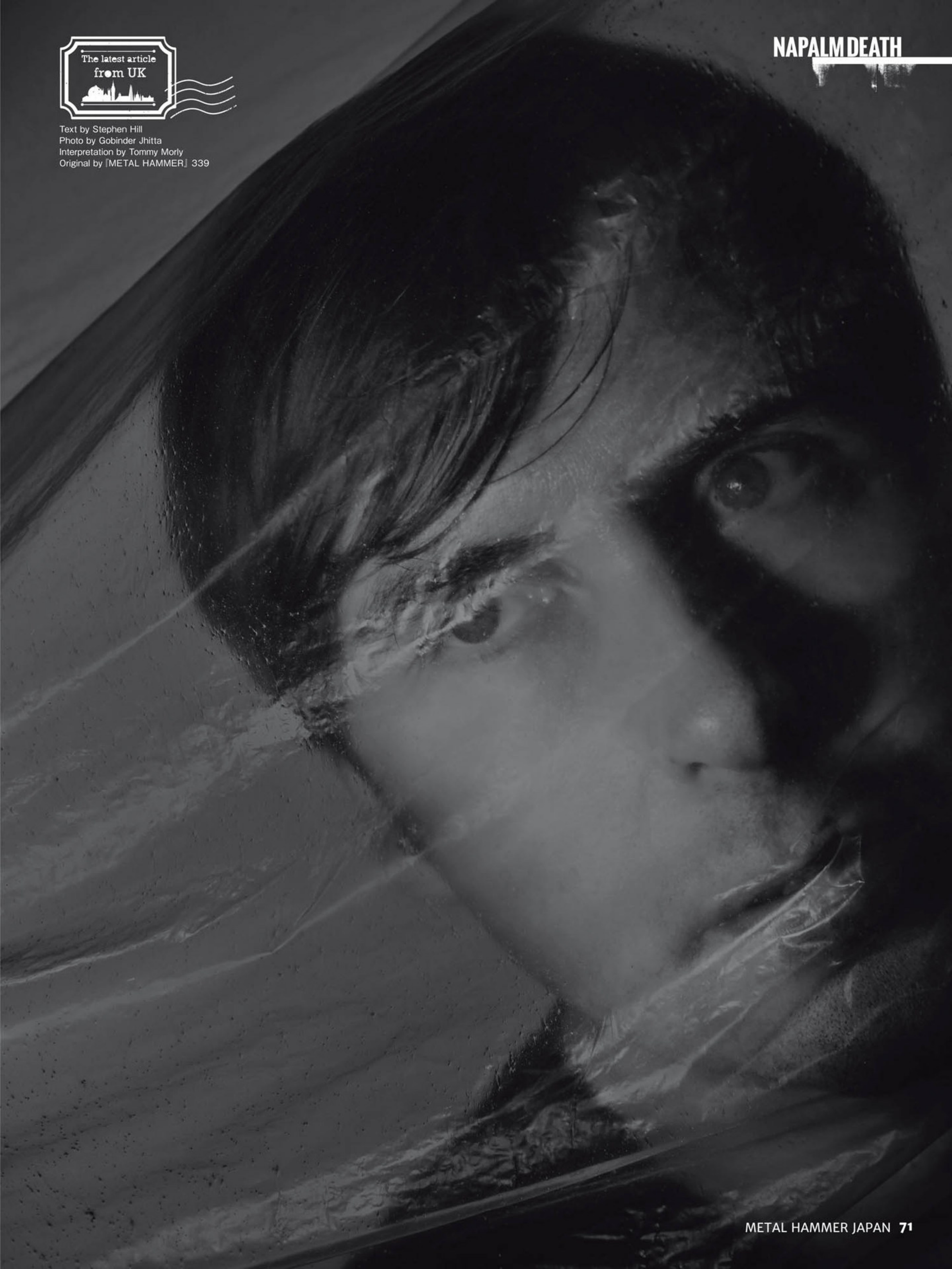
——バンドは“アメリカをブッ潰すため”に馬鹿げたアルバムを作った。

常にニュアンスを使ってみろ。

保守的で右翼的な人たちに向かって“ファシストめ！”と叫ぶと、彼らはなぜそう言われたのか、その意味を知りたがるものだ。ファシズムというのは極端なバイ

The latest article from UK

Text by Stephen Hill
Photo by Gobinder Jhitta
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』339



“PEOPLE WERE SIEG-HEILING US”

——人々は俺らにジークハイルをしていた。

オレンスと実際に起こった民族浄化にもとづいている。ファシストと、保守的で右翼的な人間には物事の見方に違いがあるというが、俺はそれらに違いがあるというのがどうも受け入れられない。ただ違うものは違う、と。

どう違っているかというと、前者はロマのジプシーやホモセクシャル、ユダヤ人といった人たちを壁に打ちつけて射殺する。後者は“継承される価値観”や美徳とされることをむやみに褒め称えていて、これってまったくのナンセンスなことさ。

どんなにヒドいものであっても、言論の自由は守るべきだ。

いわゆる“キャンセル・カルチャー”に対する明快な回答を与えられたら……と、俺は願っている。こう言い換えよう。俺はSkrewdriverやバーズムのアルバムを所有したことがない。彼らの作品を買うことは、ネオファシストに出資するような行為であり、つまり彼らが作る最終製品の購入という形で出資すべきではないと言うことだ。

ボイコットするっていうのはとてもパワフルなツールだが、その行使にも条件がある。俺が個人的に賛同しない、保守的な価値観を噴出させまくっている人たちがいるとしよう。だからといって、それを理由にボイコットしていいというわけではない。検閲も好きじゃないし、俺はいつもそれと戦ってきた。表現は俺らに許された最後の手段であり、それを覆い隠されることに対して不快に思わずにはいられないだろう。

個人的に“聴くべきじゃない”と促したいバンドはたくさんいるが、それを喜んで行なう独裁者でもない。俺は自由を主張する人間だし、それはすべての人々に等しく与えられるべきなんだ。

思想的にイカれちまったヤツに向かってプレイするな。

“思想的にイカれちまったヤツ”だけに向かってプレイすることに何の意味がある？ そんな立場に立った時点で、すでにあるレベルの注目を得ているはずだ。もし何かを解放させ自由にすることだけが目的なら、自分自身を難しい状況に置いてみればいい。それくらいのことさえできないんだったら、本来は達成できることさえも成しえないまま終わってしまうさ。

もし俺がステージで伝えていることに反論したいんなら、それはそれでかまわない。会話をして順次解決していきたいと思う。言葉を介して何かをぶつけてくる人と向き合うのは、精神的なチャレンジでもある。90年代のアメリカではアーリアン・ネイション（※白人至上主義を称える過激団体のひとつ）の一員になることがトレンディだったし、ライヴで俺らに向かって“ジークハイル”（※ナチス式敬礼）するヤツらの姿を見ることもあった。そういったときは、物理的にバチバチやったこともけっこうあったね。そんなことをしても何ひとつ解決するわけじゃないから、今じゃやらなくなったけど。

ナパームは政治的なバンド。

これまでにも“ナパームは政治的なバンドだ”と何度か話してきたよ。このことについてショックを受ける人々もいた。俺は明らかに左翼的なところからきているけど、どんな政治的考えがあろうとも、平等と尊厳はすべての人に与えられるべきだ。もし政治が我々に尊厳と良質な生活を与える努力をしないのなら、それは形だけの平等主義だし、それで満足なんてできるか？ このバンドはすべての人々に対する尊厳を大切にし、すべての思想の自由を支持する。これはどんな政治的なマニフェストよりも遥か先をいくものだね。

私的な介入は、よく練られた犯罪である。

健康や教育における私的な介入について、俺が共感できたことは一度もない。まず……健康とは基本的な人権のひとつであるべきさ。世界中のどんな人も無料で医療サービスを受けられるべきで、これは俺にとって最大の関心ごとだ。私的な金銭や一部の投資家によって人々の命が脅かされるようなことに賛同なんてしない。命は金でコントロールできるものじゃないんだよ。

ヴィーガニズムは道徳的な選択。

俺は14歳の頃にベジタリアンになった。当時通っていた学校は世界の実態を教えてくれて、食肉処理場の映像も見せてくれた。あまりにも恐ろしくなったし、それまでに見たもののなかでも最も陰惨な気分にさせられた。“俺はもう、こういった世界に加担したくない”と言ったんだ。

家に帰ってから両親に伝えたけど、すぐには理解してもらえなかった。しかし俺は次第に食事から肉を完全に排除し、革製品の使用もやめ、10年前にはヴィーガンになった。俺にとってこれは人生をまっとうするまで続けていくことで、今この瞬間だけそうするってつもりもない。

意識を持つ生命なら、なんだって生きる権利を持つ。人間ってどことなく動物をモノのように考えている節があり、好きに扱っていいと思っているんじゃないかな。俺はそういった考え方にはまったく賛同しかねる。彼ら動物は、人間よりも遥か前から存在していた。しかし彼らへの扱いにはとても非人道的なものを感じるよ。俺は食肉加工や乳製品に関する産業を支持する気にはなれないね。

思想的にイカれちまったヤツらに向かってプレイするのは好きじゃはない。

ナパームが終わっても、俺にはやりたいことがたくさんある。

どんなものにも終わりはやってくるもので、俺らはそれに向かいながら自分たちのやっていることを耕していく。それがどこまで続けられるのかなんて誰にもわからないよ。

ただこのバンドが終わったら、俺は学術の世界を歩んでいきたくてね。俺は歴史に強い興味があって、なかでもソビエトの歴史には特に興味がある。ほかにも倫理、心理学だったりさまざまなことに興味があるし……東西分裂最中の東ドイツにもね。ずっと何かしたいなと思ってきたし、研究者や教育者として歴史について踏み込んでいきたいと思っているんだ。

ナパーム・デスが俺のすべて。

俺は一度たりとも“ミュージシャンにとってのミュージシャン”だったことはない。俺がミュージシャンだということを笑う人もいるだろうし、そもそもミュージシャンとして誰かに影響を与えられる存在を目指したことなんてなかったよ。

俺はナパーム・デスを最高のバンドにすることに腐心し続けた。今までいくつかのバンドをやってきたけど、正直なところナパーム・デス以外のバンドに入りたいとは思わないね。しっかりとした目的があるバンドにしか入りたいとは思わないよ。ナパームは歌詞や音楽において目的をしっかりと持ってきた。もしそうでもなかったら、バンドのことを大切に考えることなんてなかっただろうね。ナパームは俺のすべてであり、体制に対して対立的で自由奔放なバンドなんだ。

Release Information

『永遠のパラドクス』
トゥルーパー／ QATE-10125

前作『エイペックス・プレデター、イージー・ミート』から5年半ぶりとなる、通算16枚目のアルバムが発売中！　強烈なデス／グラインド・コア・サウンドは本作でも不変、時代に左右されない信念に充ちたメッセージが堪能できる1枚だ。ソニック・ユース、ルディメンタリ・ペニのカバーも収録。

The latest article from UK

Text by Merlin Alderslade
Photo by Jeremy Ryan
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』338

THE STRUGGLE WITHIN

──内なる苦しみ

HALESTORM Lzzy Hale

ヘイルストーム　リジー・ヘイル

グラミーをも受賞するヘイルストームは、メタルだけに留まらずロック界を代表するバンドであり、フロント・ウーマンであるリジー・ヘイルは、そのシーンのアイコンとも言える存在だ。ただ彼女は少女の時代からメンタルヘルスの問題に悩まされ、またそれを音楽という強力な武器で克服してきた。そして今、《Raise Your Horns》という活動を牽引し、同様に苦しむ仲間たちにその手を差し出している。その活動はロックダウンの最中も規模を大きくし、今もさらに前進しようとしているのだ。

"I COULDN'T EXPLAIN IT I COULDN'T CONTROL IT"

──私は説明できなかったし、コントロールすることもできなかった。

陰鬱が彼女を困らせ始めたときのことを、リジー・ヘイルは明確に記憶している。学校の授業中に説明できないほど強烈でエモーショナルなパニックに襲われたのは**"11～12歳くらいの頃だった"**と述べている。メンタルヘルスに関する問題……《双極性障害、鬱病、PTSD、そして不安》に対して、彼女の家族は当時から一体となって向き合ってきたが、それはこれまでに感じたことのない恐怖に立ち向かっているようでもあった。

"あれはまだ「不安」という言葉の意味もわからない頃だったわ"と、ナッシュビルからのビデオ通話にて彼女は答えてくれた。**"一体どうなるのか自分でもわからないまま教室を出て、これがそののち誰かに話すエピソードになるなんて、私自身まったく知りもしなかった。あるときあまりにも不快な気分だったので帰宅するよう学校から言われたけど、どうしてそんな気持ちになったのかでさえ説明できなかったし、自分をコントロールすることもできなかった。私の両親にも理由がわからなかったし、「きっと迫りくるテストに不安なだけだよ！」という感じだったから"**。

彼女はこの問題に数年間もがき苦しんだのち、自身の人生を大きく変える趣味を見つけた。楽器を手に取り弟のエアジェイとともにバンドを始め、のちにヘイルストームとなるプロジェクトにチャレンジしていく。彼女は正真正銘の天職といえるロック・スターとしての姿を見つけただけでなく、

自身の気持ちを処理する方法をも見つけ出したのだ。

“父さんはガレージに私の居場所を作ってくれて、音楽と呼べるものを作るはるか前からノイズを作っていたわ（笑）。父さんは時折やって来て「大丈夫かい？　君はハッピーな子供なのに、かなりダークなものを書いているね！」と言ってくれたり。それについて私は「これが私なりの吐き出し方なんじゃないかしら？」と考えるようになったみたい。音楽はそれ以来驚異的なツールとなったし、それはこれからも続いていくでしょうね。これは公開日記であり、特定の考え方や抱える問題を曲という形で昇華させていくのよ。「よし、私は対処することができたわ。これから世界に出ていくために、次の一手を始めなくちゃ」といった感じでやっているの。音楽っていうのは私にとってセラピーの一環なのね。自分のキャリアと呼べるものになったのは喜ばしいことでもあるけど、そうなっていなかったとしても、自宅の地下室で同じことをしていたと思う”。

実際、彼女は着実にキャリアを築き上げてきた。現在はまだ36歳なれど、同世代のなかでは最もリスペクトを集め認められたロック・アーティストのひとりとして、リジーは夢を追いかけ続けている。グラミー賞の受賞を果たし、評論筋から4枚のアルバムが認められ、彼女は夢に見たこと以上の成功をつかんできた。

さらに人々の生活に本物のインパクトを与えるプラットフォームを作りだし、自身が若い頃に抱えてきたメンタルヘルスの問題が下の世代で繰り返されないようにと啓蒙もしている。

“私でも世の中の注目を集めることができるのではないかと気づいたのは、数年前にハントレスのフロント・ウーマン、ジル・ジェイナスが自殺したときのことだった”とリジーは告白した。ジルが自らの手で命を絶ったのは2018年の8月14日のことで、ここ数年で自殺によって命を絶った有名なミュージシャンのひとりとして警鐘を鳴らされており、彼女の死についてリジーは特に身近な出来事として捉えている。

“彼女の胸中を私が語ることなんてできないけど、彼女は積極的に自分が抱えている問題を口にしていたと解釈している。そしていくつかの経緯もあって、なるべくして

結末を迎えてしまった。それが私にはかなりショッキングな出来事で。孤独を感じている人って本当にたくさんいるものだと知ったわ"。そしてこの頃に《Raise Your Horns》活動が始まる。このプロジェクトは単にジェスチャーをするための活動として始まったが、次第にもっとパワフルなものへと変化していった。

"私が習慣的に行なっていたものを、自分のソーシャルメディアにアップする形で始めたの。「もしあなたや知り合いが心の病を抱えていたら、角を掲げた(※指でホーンを作る)あなたの写真を撮影してみて」と"。

そして多くの人々が角を掲げ始め、それは数千もの数に上っていった。すぐさま"ロック系のツイッター"ではファンたちが角を掲げ、各々の話を語り始めている。そのメッセージは明快で、"我々は悪魔を前にしても、ひとりではない"ということ。

"野に放たれた火のように次々に広まっていったわ。多くの人が「えっ、君も同じような問題を抱えていたの？」となるさまを目にするのは美しいことでもあって。みんなで集まって互いを助け合うのを目にするのは、とても素晴らしいことね"。

それ以降、リジーは心の病についてロック界における最前線に立つスポークパーソンとなり、《Raise Your Horns》活動を単なる心地いい一過的なジェスチャーではなく、むしろひとつの成熟した運動にさせることを決意した。メンタルヘルスについてはどういうわけか依然として声に出して議題にしづらいところがあり、それに対抗するための武器と化している。

"私は医者じゃないし、セラピストでもない。そもそもあなたが置かれた状況を変えなくちゃいけないわけでもない。でも、あなたが抱える孤独感を減らすことはできるわ"。

ジョシュ・スミス (b)、ジョー・ホティンジャー (g)、エアジェイ・ヘイル (d)、リジー・ヘイル (vo、g) ／L to R

"JILL JANUS DYING REALLY SHOOK ME"

——ジル・ジェイナスの死去は、私にとってとても大きなショックだったわ。

リジーにとってロックダウン期間はヘイルストームの新たな素材に取りかかるいい機会となった。"大体、1日1曲ペースで作曲をしている"と話すが、メンタルヘルスに関する真言はさらにレベルアップし、独自のショウを司会するに至っている。

"ツイッターでの反響を受けて、《Raise Your Horns》というショウ（ネット番組）を始めたの。これは素晴らしいもので、私たちは音楽の力やメンタルヘルスについて語り、特に後者については世界が末期的な状況に進んでいる現代において、そういった問題を抱えていることの意味を問いているの"。

リジーのロック・スター仲間をゲストに招き、ロックとメンタルヘルスについて語るプラットフォームを提供したのみならず、ちょっとしたサプライズをも生み出している。エヴァネッセンスのエイミー・リーの出演回では、ふたりでヘイルストームの楽曲「ブレイク・イン」（収録『ストレンジ・ケイス』2012年）のカバーを披露。

"今ではインタビューを行なう人たちへのリスペクトの仕方が大きく変わってきていて、もちろんあなたもそこに含んでいるわよ！"とジョークを放つ。"インタビューされる側がどれだけ楽なものなのか、やっと気がついたわ。流れるような会話をしてゲストからベストなものを引き出すために、インタビューする人間は事前に予習しておかなければならないものね。これってけっこうな仕事よ。でも自分の快適な領域から踏み出すことに関しては慣れっこだし、自分でも楽しんでいて"。

ロックダウン中のロックの世界において、リジーは真のスターのひとりとなった。彼女は自分のことだけに時間を使っていたのではなく、もがき苦しむ人たちに支えの手を提供していた。もちろん彼女自身の苦しんだ過去がなければ、彼女がロック界のメンタルヘルスの広報大使となることはなかっただろう。加えてファンたちは彼女に"最も深くて、暗い秘密"を告白するよう求め続けプレッシャーを与えていたが、それに潰されないよう自分を強く持つ必要があった。それでも彼女は自信とともに持ちこたえ、これからもこの活動を続けていくことだろう。そして何よりも、彼女が11歳の頃に怯えて困惑しながら帰宅させられたあのときとは、喋り方がまったく異なるのである。

"ロックやメタルのコミュニティの一員として過ごしていると、虐げられ、除け者とレッテルを貼られ、バカにされることには慣れっこになるのよ。でもそれは同時に、このジャンルに足を踏み入れた理由のひとつにもなっている。大人でも子供でも、誰にも理解されなければ孤立した気持ちになるでしょうし、そういった状況から逃げ出したくなるものよ。でも今じゃ音楽産業にいる多くの人たちがこのことについて話し合っていて、私みたいな人たちが言葉として発するようになり、メンタルヘルスの問題を抱えた人がどう感じているのか、世界中の多くの人が共有化するようになった。私たちはみんな、声を上げられない人たちの声になろうとしているの。こうやって私の話を聞いてくれることは、前進する大きな一歩なのよ"。

The latest article from UK

Interpretation by Tommy Morly
Original by 『METAL HAMMER』338

THE HU Gala

ザ・フー　ガラー

待望の初来日を前に、新型コロナ・ウィルス蔓延の影響を受け、すんでのところで日本公演がキャンセルになってしまったバンド……モンゴル出身の4人組、ザ・フー。民族楽器も導入した新しいフォーク・メタルを楽しみにしていた人も多いはず。彼らはそのツアーのなかで、滞在先であったオーストラリアに留まらなくてはいけないという自体にも陥る。そのとき彼らは！？

ヴォーカリストのガラーが語る、パンデミックによるオーストラリア滞在記

ガラー（モリン・ホール、ホーミー）、ジャヤ（口琴、ホーミー、他）、エンクシュ（モリン・ホール、ホーミー）、テムカ（トプショール）／L to R

——どうしてオーストラリアで隔離ということになったのでしょうか？

僕らは２月初頭にワールド・ツアーに出て、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、チリ、アルゼンチン、ブラジル、北米とまわる予定だった。それがオーストラリアに着いた頃には新型コロナ・ウィルスのパンデミックが拡大し、多くの国がイベントの制限を行なうようになって。僕たちの最後のパフォーマンスはブリスベン（オーストラリア）で、それ以降のツアーで訪れる予定だった国々の日程はすべて延期かキャンセルになってしまったんだ。こういった状況だったのでツアーをキャンセルして家路につかざるを得なくなってしまってさ。ただ不運にも、当時モンゴルは（COVID-19の感染拡大の防止のために）入国を完全にしめ切ってしまったので、家に帰れるようになるまで、僕らはオーストラリアのシドニーに留まることにしたんだよ。

——バンドでの共同生活はいかがでしたか？　どのようにして過ごしていましたか？

ひとつの家に一緒に住んでみたんだけど、これはなかなかの経験になったよ！　ツ

“LIVING IN A HOUSE TOGETHER HAS BEEN A BLAST!”

——ひとつの家に一緒に住んでみたけど、これはなかなかの経験だったよ!

アー中っていうのは常に街から街へと移動しているので大抵は忙しいものだけど、その最中にリラックスできたっていうのは皆にとっていいものでもあったと思う。次のアルバムの曲に取りかかったり、トランプとかゲームに興じたり、一緒に料理なんてこともしていたよね。特に料理については《HU's In The Kitchen?》という YouTube チャンネルでチェックできるよ。

——どうしてクッキングの動画シリーズを始めることに?

前回の北米ツアー中、デトロイトの会場には楽屋にキッチンがあって、僕らのために料理をするツアー・マネージャーのダンの姿を、マネージャーのツーガが撮影していたことがあって。ツーガはそれを《HU's In The Kitchen?》というタイトルで僕らの YouTube チャンネルにアップロードしてくれたんだ。するとけっこうなリアクションがもらえて、それでやり続けることにしたって感じなんだ。

——“ボーズとニースレル・サラダ”(※モンゴル風の点心とポテト・サラダ)をオーストラリアからの最新ビデオに選んだ理由は?

ボーズはモンゴルではよく知られた料理で、ニースレル・サラダはそのつけ合わせとしてはパーフェクトなんだ。両方ともモンゴルの祝いごとの場では一般的に出てくるもので、モンゴルでのパーティなら大体テーブルに置いてあるよ。(ツアー・ギタリストとして参加している)ジャンバの誕生日を最新のビデオで祝っていて、だからボーズとニースレル・サラダはマストだったんだ!

——材料を入手するのは難しかったのでは?

ボーズを作るためのおもな材料は結構シンプルで、小麦粉と肉さえあればいいから、それらを手に入れるのは簡単だったかな。ニースレル・サラダはジャガイモをベースとしているためシンプルな材料で足りるので、オーストラリアのローカルなスーパーで全部買うことができたね。

——ザ・フーのなかで最も料理がうまいのは?

エンクシュ(モリン・ホール、ホーミー)だね。《HU's In The Kitchen?》にアップロードしているビデオをどれでもいいから見てみれば、エンクシュがバンドの誰よりも料理がうまいことはすぐにわかってもらえるはずさ。

——ロックダウン期間中に新曲を書いたようですね。どんなサウンドになりましたか?

僕たちの新曲はフンヌ・ロック(※フン族のロック)になるよ! ロックダウンの期間中には『スターウォーズ』の TV ゲームのために新曲を録音し、それは近い内にみんなの耳に届くことになるだろうね。

ザ・フーによる《ボーズ》のレシピ

モンゴルのメタル野郎たちが、おいしい牛肉の点心の作り方を教えてくれた。

■材料

- 300g のミンチもしくはサイコロ切りの牛肉
- 150g の小麦粉
- 肉の味付けに用いる調味料。どんな調味料でも、お好みの量で。
- 玉ねぎ
- ニンニク
- 塩(牛肉のジューシーさを引き立てるために、少量の水に溶かしておくこと!)
- 黒コショウ

■調理方法

❶小麦粉を水と混ぜてこねる。生地は緩すぎず、硬すぎないように注意すること。
❷生地を 15 分ほど寝かせる。
❸生地を小さく切っていく。作りたいボーズのサイズに応じて調整すること。しかし僕らは大きいの好きだね!
❹生地の塊を薄く円形に伸ばしていく。
❺牛肉を味付けし、生地で包む(YouTube で公開している“ジャンバ”のテクニックをぜひ参照!)。
❻ 15 ～ 20 分蒸し、肉にしっかりと熱が入っていることを確認するように。
★完成>ボーズをエンジョイすること!

メタルだったら部屋でも激音

最強の“卓上＆小型”ギター・アンプを探せ！

新型コロナ・ウィルスへの警戒は、この冬もまだまだ継続中。なかなかに“スタジオやライヴハウスで爆音プレイ”とはいきませんが、メタル・ギタリストだったら“家だとしても激音でギターが弾きたい！”……ですよね。そこで各メーカーが誇る卓上＆小型サイズ・アンプを、LOVEBITESのmidoriとmiyakoがメタル的視点でじっくりとチェック！　この冬は、ルーム・サイズながら迫力のサウンドを鳴らす11台のミニ・アンプでロック＆メタル！

これが、ヘヴィメタルを弾きたくなる卓上&小型アンプ11台だ!

ここで改めて今回の試奏者＝midori＆miyakoを紹介しよう。メロディク・スピード・メタルからスラッシュ・スタイルまで、幅広い音楽性を持つ楽曲を堅実かつ流麗なプレイで支える、LOVEBITESが誇る華麗なるギター・コンビだ。クール&ビューティなステージングとも相まって、欧州を筆頭に世界中のメタル・ファンを魅了している。

今回の試奏では、それぞれの愛器(midori／ESP製E-Ⅱ HORIZON QM/FR Reindeer Blue、miyako／ディーン製ICON Flame Top-Faded Denim)を使用。各モデルのコメント欄には、ふたりがアンプを持ったカットも掲載しているので、相対的にサイズを知る参考にもしてほしい。

アンプ解説:菊池真平

LOVIBITES INFORMATION

新曲「Winds Of Transylvania」が、押井守総監督・西村純二監督の新作シリーズ・アニメ『ぶらどらぶ』オープニング主題歌に決定！　また、来年からは待望の有客ライヴ・ツアー《RIDE FOR VENGEANCE TOUR 2021》も始まる。
詳しい情報はバンド・オフィシャルHPにて
＜https://lovebites.jp/＞

● RIDE FOR VENGEANCE TOUR 2021
1月24日(日)／神奈川@KT Zepp Yokohama
1月31日(日)／東京@TOKYO DOME CITY HALL
2月5日(金)／愛知@名古屋DIAMOND HALL
3月5日(金)／大阪@なんばHATCH

● on sale
『ファイヴ・オブ・ア・カインド～ライヴ・イン・トーキョー 2020』
ビクター／VIXL-319（Blu-ray）

最新ライヴ作が発売中。ツアーが始まるまでは、本作で予習を！

BLACKSTAR	BOSS	BOSS	LANEY	MOOER	OGANGE
FLY3 VINTAGE	KATANA-AIR	KATANA-MINI	MINISTACK-B-IRON	SILVEREYE 10	CRUSH 12
P.84	P.85	P.86	P.87	P.88	P.89

ペンタグラム・チャートについて

各機種には、アンプの特徴を示した"ペンタグラム・チャート"をつけています。各項目は5段階で、ふたりの総合的意見から設定。個人的な印象による目安として参照ください。

小型度
今回集まった11台を相対的に見たサイズ感を示しています。全機種ともに一般的なアンプに比べて小サイズですが、そのなかでもより小さいモデルが＜5＞となっています。

音圧感・耳の迫力（ヘッドフォン使用時）
出音から感じられる音圧・音量感を示しています。最大音量でのヴォリューム感を基本に、小音量時でもパンチ力があるかなども考慮して判定しています。

音色の幅
クリーン〜クランチ〜ディストーションなど基本音色から、ディレイやリバーブなどのエフェクトと、本体内でどれくらいの音色を作ることができるかを示しています。

歪み力
やはり、メタルにとってディストーション・サウンドは命！　ということで、ここでは最大にゲイン・アップした音色での歪み量を示しています。特に深く・細かく歪むタイプが＜5＞となります。

ルックス
この項目は純粋に、ルックス面をふたりの趣味で査定。アンプとしての機能には関係なく、また特に個人的嗜好に左右される点でもあるので、あくまでも参考として（笑）。

miyako

※アンプ・ヘッド・タイプに関しては、ヘッドフォンでの試聴を基準にし、適宜マッチング・タイプのキャビネットでのサウンドも参照しました。

POSITIVE GRID SPARK P.90
VOX ADIO AIR GT P.91
YAMAHA THR10 II WIRELESS P.92
HUGHES & KETTNER SPIRIT OF METAL P.93
PEAVEY 6505 PIRANHA HEAD P.94

BLACKSTAR
FLY3 VINTAGE

ワット数	サイズ(mm)	重量
3W	170[W] 102[D] 126[H]	900g

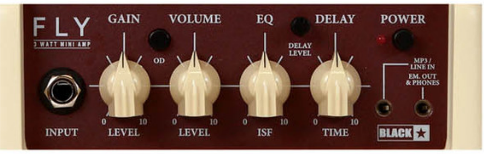
価格：10,000円（＋税）
問い合わせ：コルグ／KIDお客様相談窓口 ☎0570-666-569
Ⓒhttps://www.korg.com/jp/

伝統のロック・サウンドを生む卓上アンプ

元マーシャル出身のスタッフが立ち上げたブラックスター。英国メーカーらしい伝統的なロック・サウンドを踏襲しており、本モデルは3W出力ながら2チャンネル仕様で、歪みチャンネルでゲインをアップさせればサイズ感以上の歪みを得ることができる。テープ・エコーをシミュレートしたディレイも秀逸だ。電池駆動可能で、群を抜いて軽量なのも"卓上派"にはうれしいところだ。

SPECIFICATIONS

- ●入出力端子：インプット、ライン・イン、ヘッドフォン
- ●コントロール：ゲイン、ヴォリューム、EQ、ディレイ、オーバードライブ・スイッチ、ディレイ・レベル
- ●電源：ACアダプター、電池



モコモコからジャギジャギまで、音の作り込みができそう。――midori

miyako サイズ感は見たまんま小さいので、お家に置いておきたくなりますよね。それで音が悪かったら本末転倒ですけど、ブラックスターらしさもあって、しかもこのサイズなのにヴォリュームを最大にするとかなり音量が出るし、よく歪む。

midori タッピングをしても音が途切れないくらい歪んでくれるのがスゴいです。トーン・ノブはひとつですけど、モコモコからジャギジャギまで振り幅が大きいので、自分のギターに合わせた音の作り込みができると思います。

miyako ディレイにはレベルとタイムもついているので、小型なのにいろんなことができますよね。

midori 電池もOKなのでお外にも持っていけますし、遠征先のホテルに持っていっても良さそう……爆音にしなきゃ（笑）。

BOSS
KATANA-AIR

ワット数	サイズ(mm)	重量
30W	350[W] 144[D] 181[H]	2.2kg

価格:オープン・プライス(市場実勢価格:40,000円前後)

問い合わせ:ローランドお客様相談センター ☎050-3000-9230
©https://www.boss.info/jp/

無限大のサウンドを ワイアレスで弾きまくれ!

ワイアレス・トランスミッターが標準装備のこのモデルは、ACアダプターに加え、単3乾電池8本でも駆動するため、屋外も含めた完全なワイアレス環境での演奏を楽しめる。5種類のアンプ・タイプ、ボスが誇る高品位な50種類以上のエフェクターも搭載。さらに専用アプリで緻密な音色エディットが可能なため、ブラック・サバス的初期メタルから近年のラウド系サウンドまで、その出音は無限大。

SPECIFICATIONS

- ●入出力端子:インプット、AUXイン、ヘッドフォン/レック・アウト、USB
- ●コントロール:アンプ・タイプ、ゲイン、ヴォリューム、ベース、ミドル、トレブル、BST/MOD、ディレイ/FX、リバーブ、マスター、トーン・セッティング・ボタン×3、ほか
- ●電源:ACアダプター、電池

今どきの歪みが好きな人には、ドンピシャなサウンド。——miyako

midori ワイアレスでつないでも、レイテンシーが全然ない!

miyako アンプの遠くにいてもいいんだけど、逆に狭いお部屋でもシールドがジャマにならなくて良さそうですね。

midori しかもかなり高機能で、外部エフェクターもいらないんですよ。アプリを使えばプレゼンスなどもいじれるので、さらに幅広い音が作れます。もちろんアンプのノブだけでも、例えば[ブラウン]タイプはかなりジャキっとした歪みにもなって、好きな音が1発で作れてわかりやすいと思います。

miyako どのエフェクターの音にもボスらしさを感じましたし、今どきの歪みが好きな人には、ドンピシャなサウンドだと思います。路上ライヴができるくらいの音量も出るし……でも路上でメタルはやらないか(笑)。

BOSS
KATANA-MINI

ワット数	サイズ(mm)	重量
7W	230[W] 116[D] 181[H]	1.2kg

価格:オープン・プライス(市場実勢価格:10,000円前後)
問い合わせ:ローランドお客様相談センター ☎050-3000-9230
Ⓒhttps://www.boss.info/jp/

“WAZA AMP”ゆずりのサウンドをこのサイズに

同社のフラッグシップ・アンプ[WAZA AMP]のエッセンスを取り込んだKATANA AMP。同シリーズ最小となる本機は電池駆動OKながら、アナログ・ゲイン回路による表現豊かなドライブ・サウンドが楽しめる。クリーン〜歪みの3つのアンプ・タイプを持ち、卓上サイズながら3バンドEQを搭載するのも音作りの強い味方。あの“ブラウン・サウンド”を彷彿させる伸びやかなハイ・ゲインは、メタルの導火線にも火をつける!

SPECIFICATIONS

- ●入出力端子:インプット、AUXイン、ヘッドフォン/レック・アウト
- ●コントロール:ゲイン、ヴォリューム、ベース、ミドル、トレブル、ディレイ・タイム、ディレイ・レベル、アンプ・タイプ・スイッチ
- ●電源:ACアダプター(別売)、電池

見た目以上に軽いのに、ゲイン半分くらいでも充分に刻める。——midori

miyako さすがボスさんって感じで、小型なのに歪みますね〜。正直物足りなくなるかもと思っていたんですが、充分にメタルができます。[クランチ]は“真空管入っているのかな?”っていう音でもあって。

midori 見た目以上に軽いのにファットな音というか、小型だけど太さがあってイイ感じですよね。[ブラウン]だったらゲインが半分くらいでもリフやバッキングが充分に刻めます(笑)。ノブもそんなに多くないので、直感で回せばいい音が出るという。

miyako EQも3バンドあるので、細かく音作りもできる。私は特にトレブルの効き具合が“ボスっぽい”と思いましたね。ディレイでは好きなポイントを見つけてもらって、そこでソロを弾いたら気持ちいいと思うな。

LANEY
MINISTACK-B-IRON

ワット数	サイズ(mm)	重量
6W	205[W] 105[D] 295[H]	2.6kg

価格：8,980円（＋税）
問い合わせ：サウンドハウス
©https://www.soundhouse.co.jp/

スタック・アンプの迫力を机の上で完全再現！

スタック・アンプはロック・ギタリストの憧れ。それを卓上に鎮座させられるのがこの1台。ドライブ・チャンネルを有し、2段積みのルックスに違わぬ深い歪みと音圧感が得られるのだ。付属のLSIケーブルでスマートフォンなどをつなげば、専用アプリを介して本体のディレイ以外にもさまざまなエフェクトを使うことができる。電源アダプター（別売）のほか、電池での駆動も可能だ。

SPECIFICATIONS

- 入出力端子：インプット、ヘッドフォン、AUXイン、LSI
- コントロール：ゲイン、レベル、トーン、ディレイ、ヴォリューム、ドライブ・スイッチ、ディレイ・レベル
- 電源：ACアダプター（別売）、電池

家ではないようなサラウンド感にテンションが上がる！——miyako

midori まずはこのルックス……2段積みの雰囲気が味わえてアガりますし、ヘッドが光るのもめっちゃカッコいいですよね(笑)。

miyako スタック・アンプを弾いている気分になってテンション上がります(笑)！ ドライブ・チャンネルでゲインを上げれば、メタルでも歪みが足りないってことは全然ないですね。

midori 歪みは荒々しい感じなので、リフを刻む系のギタリストにお薦めしたいな。ミドル域に特徴があってトーンがよく効くんですけど、その効き方が自然なので“使える音”も作りやすいなと。

miyako ディレイとスピーカーの相性も良くって、家ではないようなサラウンド感にますますテンションが上がるという。タイムも調整できて、これはソロを弾くときにもいいですよね。

MOOER
SILVEREYE 10

ワット数	サイズ(mm)	重量
10W	168[W] 292[D] 168[H]	3.3kg

価格:オープン・プライス(市場実勢価格:15,500円前後)
問い合わせ:LEP INTERNATIONAL ☎0198-23-6600
Ⓒhttps://www.lep-international.jp

高音質での メタル・セッションに興奮せよ

超小型のエフェクターを手がけるムーアーから、ギター・アンプと音楽を楽しむBluetoothスピーカーが融合したアンプが登場した。出力は10Wで、3インチのフル・レンジ・スピーカーを2発搭載したステレオ仕様。また独自のバスレフポートで低域をブースト。高品位な音楽再生ツールでもあるため、メタル・ナンバーを流しながらのセッションは、まさにスタジオで本人たちとジャムっているかのようだ。

SPECIFICATIONS

- ●入出力端子:インプット、AUXイン
- ●コントロール:ヴォリューム、ゲイン、トレブル、ベース、マスター、EQトグル・スイッチ、Bluetooth
- ●電源:ACアダプター

70年代HRに持ってこいの、ふくよかさがある温かい音。——midori

midori 高級感のあるブティック・アンプ的な音だと思いました。ブラック・サバスとかレッド・ツェッペリンとか70年代のハードロックには持ってこいの、ふくよかさがある温かい音というか。

miyako うん、真空管がたくさん入っているような音でね。ほかにもジャズとか、歌を大切にしたロックをプレイする人にも刺さるアンプだと思います。EQも急激に変わるんじゃなくて、マイルドに変わっていく感じ。狙ったなかでの“さらにここ”というポイントを見つけられるとイイんですよ。

midori どこに設定しても、“このアンプの音”というのが明確に存在している感じかな。カバリングの質感もイイですよね。

miyako リスニング用としてもバッチリ使えて、しかもお部屋に置いていたら“映え”そう(笑)。

OGANGE
CRUSH 12

ワット数	サイズ(mm)	重量
12W	305[W] 175[D] 290[H]	4.7kg

価格：16,000円（＋税）
問い合わせ：黒澤楽器店 ☎03-5911-0611
©https://www.kurosawagakki.com/

ヴィンテージ・ライクな出音が弾き手の個性を生かす

オレンジ社は近年、小型アンプにも力を入れており、このモデルは12W出力だが、自宅では充分過ぎるほどの音量が得られる。ヴィンテージのチューブ・アンプを彷彿させる音質で、モダンなメタルよりも、ぜひ弾き手のニュアンスを生かす骨太なハードロックをプレイしたい。クリーンは癖がなくエフェクターの乗りも良好で、ハイ・ゲイン・ペダルとの相性もいい。ブラックのカバリングもラインナップ。

SPECIFICATIONS

- 入出力端子：インプット、ヘッドフォン
- コントロール：ヴォリューム、トレブル、ミドル、ベース、オーバードライブ、ゲイン
- 電源：ACアダプター

私的にはこれでアイアン・メイデンが弾きたい！——miyako

miyako 昔、イギリスのロック・バンドがこういう音で鳴らしていたんだろうなっていう、まさにブリティッシュ・サウンドという感じ。私的にはこれで初期のアイアン・メイデンが弾きたい！　ギター側のヴォリュームを絞れば、オシャレなクランチ・サウンドも出るし、このサイズでもしっかりとオレンジの音がするんですよ。

midori 歪みのザラツキ感に特徴がありますよね。ゲインで基本の歪みを作って、そこにオーバードライブで足してあげるという音作りがコツかも。両方をうまく使っていいところを探したいですね。出力的にも余裕があるので、エフェクターをひとつ足してガッツリ歪ませるという使い方もアリだと思います。

miyako あとは、なんといっても見た目がカワイイ！

POSITIVE GRID
SPARK

ワット数	サイズ(mm)	重量
40W	350[W] 190[D] 180[H]	5.2kg

価格:34,000円(+税)

問い合わせ:Media Integration ☎03-3477-1493

©https://www.minet.jp/brand/positivegrid/top/

専用アプリと連携で味わう 1万の音色+最新機能

数々の受賞歴を持つBIASトーン・エンジンにより、良質なサウンドが得られるSPARK。本体には<メタル>を筆頭に7種類のアンプ・タイプ、ディレイやリバーブを内蔵するが、ここはやはり専用のアプリから得られる著名なギタリスト等が制作した1万を超える音色を活用したい。本体にプリセットが記憶できるほか、アプリには“ジャム機能”、“コード解析機能”など最新機能も充実。

SPECIFICATIONS

●入出力端子:インプット、ヘッドフォン、AUXイン、USB
●コントロール:アンプ・タイプ、ゲイン、ベース、ミドル、トレブル、マスター、モジュレーション、ディレイ、リバーブ、アウトプット・ヴォリューム、ミュージック・ヴォリューム、プリセット・ボタン×4、タップ/チューナー・ボタン
●電源:ACアダプター

これで歪ませて弾くと、ギター・ヒーローになれちゃう。——midori

miyako 音色はやっぱりクリーンから歪みまで、物足りないって感じはまったくないですね。

midori [グラッシィ]や[クランチ]でもけっこうしっかり歪むので、歪み方の違いを楽しむこともできるかな。ほどよいコンプ感もあって、リードを弾いていてもツヤのあるミッド、それからコシがあるというか。あとリバーブの広がり方がすごいですね、ビックリしました。これで歪ませて弾くと、ギター・ヒーローになれちゃう(笑)。

miyako 確かに。弾いているお部屋が本当にホールになっちゃうような感じなんですよ。弾いていて気持ちのいい音を出してくれるから、うまくなった気がしちゃいます(笑)。音量もしっかり出るから、例えばバーくらいのスペースで演奏するのにも使えるんじゃないですか。

VOX
ADIO AIR GT

ワット数	サイズ(mm)	重量
50W	360[W] 165[D] 163[H]	2.9kg

価格：19,800円（＋税）
問い合わせ：コルグ／KIDお客様相談窓口 ☎0570-666-569
©https://www.korg.com/jp/

ポップな見た目に包まれた充実の音色バリエーション

レトロなフォルムが印象的なこのアンプは、約2.9kgと軽量コンパクトながら、25W×2（※ACアダプター使用時）という出力を誇る。本体にはアンプ・モデル11種類を始め、コーラス、フランジャーなどを4種、ディレイ、リバーブなどを4種搭載し、ジェント系激烈サウンドも余裕でカバー。さらに専用アプリを使えばさらなるサウンドメイクが可能になる。お気に入りの設定を記憶できるのもうれしい。

SPECIFICATIONS

●入出力端子：インプット、AUXイン、ヘッドフォン、USB
●コントロール：アンプ・タイプ、ゲイン、トレブル、ミドル、ベース、ヴォリューム、FX1、FX2、インストゥルメンツ、オーディオ、バンク・スイッチ、ユーザー・プログラム×4、タップ、ワイド、Bluetooth
●電源：ACアダプター、電池

いろいろできるので、どの音で弾くか迷っちゃう（笑）。——miyako

midori 金色のロゴがゴージャスでかわいいし高級感もあって、その見た目でまず優勝（笑）。サウンドの幅広さはクリーンからヘヴィメタルまで、アンプだけでもなんでもできるって感じですよね。スピーカーが2発あるからか、音にも太さと厚みが感じられるんです。

miyako アンプのタイプもそれぞれ特徴を捉えていて、スゴく研究したんだなって。細かくいろいろできるので、どの音で弾くか迷っちゃいそう（笑）。だからまずは各アンプのタイプを順番に試して、自分の好きな歪みを見つけるといいと思います。

midori 後半に設定されているアンプ・タイプなら、ゲイン半分でも充分にメタルできちゃうみたいな。明確に"こういう音がほしい"という人は、アプリでの作り込みも楽しめると思います。

YAMAHA THR 10Ⅱ WIRELESS

ワット数	サイズ(mm)	重量
20W	368[W] 183[D] 140[H]	3.2kg

価格：オープン・プライス（市場実勢価格：48,000円前後）
問い合わせ：ヤマハミュージックジャパン ☎0570-056-808
Ⓒhttps://jp.yamaha.com

ハイ・ゲイン・サウンドを ワイアレス環境でプレイせよ

ポータブル・アンプの最新シリーズで、専用アプリと連動させ、ハイ・ゲイン・サウンドも得られる最大15種類のアンプ・タイプ、さらに8種類のエフェクトも使える20Wステレオ出力モデル。別売りのワイアレス・トランスミッター［LINE 6 RELAY G10T］を用いれば、イングヴェイばりの派手なアクションでもストレスなくプレイが楽しめるぞ！　オーディオ・インターフェースとして音楽制作での活用にももってこい。

SPECIFICATIONS

●入出力端子：インプット、ヘッドフォン、AUXイン、USB
●コントロール：アンプ、ゲイン、マスター、ベース、ミドル、トレブル、エフェクト、エコー／リバーブ、ギター・アウトプット、オーディオ・アウトプット、タップ／チューナー・スイッチ、ユーザー・メモリー・スイッチ×5、Bluetooth
●電源：ACアダプター、充電式バッテリー

※画像のトランスミッター
LINE 6 RELAY G10Tは別売

デジタル系アンプのなかでも、温かみのある音が特徴。——miyako

midori アンプだけでもクリーンからかなり深い歪みまで作れますし、アプリを使えばさらに歪みの種類が作れちゃう。もちろんディレイとかはアプリでさらにいじれるという。

miyako どのアンプ・タイプでもミドルとトレブルの使い方がキモだなと思っていて、この2ノブで音の質感やヌケがけっこう変わるので、そこを研究してほしいです。ローもよく出ていて、デジタル系の多機能アンプのなかでも温かみのある音が特徴なのかな。

midori そこがヤマハの音なんだよね。それがこのサイズでも一貫してあるんですよ。音量も出るので、家でフルテンで鳴らしたら怒られちゃうと思います。

miyako 充電式でワイアレスでもあるから、海でも山でも演ってください！

HUGHES & KETTNER
SPIRIT OF METAL

価格：29,800円（＋税）
問い合わせ：パール楽器製造 ☎047-484-9111
©https://pearl-music.co.jp/hughes-and-kettner/

完全アナログ回路が実現する メタル対応高速レスポンス

メタル・バンドにも愛用者が多い独ブランドが展開する3種類の小型ヘッドから、クラシカルからモダン・ヘヴィまでをカバーするのがこの“スピリット・オブ・メタル”。完全アナログの回路による高速レスポンスは、速弾きギタリストでも高い満足度が得られるはず。スピーカー・エミュレーター搭載のヘッドフォン・アウトで家練習、キャビネットにつなげてバンド練習と使い方はいろいろ。

SPECIFICATIONS

- ●入出力端子：インプット、ヘッドフォン、ライン・アウト、スピーカー・アウト、ライン・イン
- ●コントロール：マスター、サギング、トーン、ゲイン
- ●電源：ACアダプター

VARIATIONS

▲SPIRIT OF METALには、兄弟機となる2モデルもラインナップ。VINTAGE（画像左）は温かみのあるクリーンを主体に、オールド・ロックなクランチ・トーンも作り出す。ROCK（同右）はチューブ・アンプらしい骨太な歪みを創出。幅広い音色が作れるので、本機でハードロックをプレイするのもいいだろう。このサイズ感であれば、常に3台持ち運んで使い分けることも可能だ。

知っているケトナーの音が凝縮されているイメージ。——midori

miyako さすが“メタル”ということで、歪みは9時くらいでもスラッシュからデス・メタルから、充分いけると思います。トーンの位置によって音の表情が想像以上に変わるので、ここの好きなポジションを見つけるのがコツかも。

midori コントロール・ノブが少ない分、どれもしっかり効くようにしているんでしょうね。トーンは“上のほうが、より上まである”というイメージで、少しずつ回して探していくのがいいかも。イヤフォンで聴いていても知っているケトナーの音がここに凝縮されている印象で、その持ち運びできる版という感じですね。

miyako キャビネットを足せばさらにロー感も出て、これはライヴでも使えちゃいます。世界中のヘッドがこのサイズになればいいのになぁ（笑）。

PEAVEY
6505 PIRANHA HEAD

ワット数	サイズ(mm)	重量
20W	178[W] 132[D] 82[H]	1.13kg

価格：19,800円（＋税）
問い合わせ：逸品館MI事業部 ☎045-633-7530
©http://ippinkan-music.jp

プリに真空管を用いた 分厚いディストーション

エディ・ヴァン・ヘイレンの愛機[5150]を生み出したピーヴィー。この6505 PIRANHA HEADはプリに真空管を1本使い、パワー部がソリッド・ステートのマイクロ・ヘッド。使いやすい2チャンネル仕様で、出力は20Wながら重厚感のある分厚いディストーション・サウンドが魅力だ。AUXインとヘッドフォン・アウトも装備しており、家庭用練習にもバッチリと対応。音量環境に余裕があれば、マッチング・サイズのキャビネット(別売)もお薦めだ。

SPECIFICATIONS

●入出力端子：インプット、AUXイン、ヘッドフォン、センド／リターン、スピーカー・アウト
●コントロール：ゲイン、EQ、ヴォリューム、チャンネル・スイッチ
●電源：DCアダプター　※付属：キャリー・バッグ

センド＆リターンがあるのも私的には嬉しいポイント。——miyako

miyako “ピーヴィーって、あそこのジャリ感がいいんだよな”っていう音を、小型化してもしっかり残しているんです。[クランチ]チャンネルでギターのヴォリュームを絞ればクリーン的な使い方もできるし、[リード]チャンネルにすればより抜けてくるので、カッコいいリフを弾くにはいいだろうなって。

midori ザラッとした歪みがすごく感じられて、ザクザク感が好きな人にお薦めしたいですね。重量はスゴく軽くて、片手で持てちゃいます。専用のキャビも小さいんですけど、かなりヴォリュームは出せますし。

miyako 4発のキャビにつなげてライヴをやってみたいなぁ。センド＆リターンがあるのも私的には嬉しいポイントだな。

midori なかに真空管が入っているのが見えるのもカッコいい(笑)！

11機種の試奏を終えて

たっぷりとメタル・フレーズを弾きまくってくれたmidoriとmiyako。それでは11機種の卓上&小型ギター・アンプを弾ききったふたりに、その総評を語ってもらおう。

midori　小さいなかにすごい技術が詰め込まれている。

miyako　ヴォリュームが小さかろうが、音を直接感じたほうがいい。

◎令和系小型アンプの傾向

miyako　私がギターを始めた頃に比べたら、小型アンプってこんなに進化を遂げているんだってビックリ。しかも、どのアンプもそのメーカーらしい音作りをしているんですよ。使いこなせれば本当に無限大の可能性を秘めていて、令和ってすごいですね。

midori　ちっちゃいアンプからこんなすごい音が出て……どれも練習用アンプとして気持ちよく弾けました。それぞれ特徴もあって、アプリと一緒に使えるとか、Bluetoothでつながるとかワイアレスで弾けるとか、すごい技術がこの小さいなかに詰め込まれている。イイ時代だな（笑）。

◎セレクトのポイントは？

midori　これは自分がどうしたいかによりますね。パッとつないでやりたいのか、めっちゃ作り込みたいのかでも、選ぶ機種は変わってくると思います。逆に自分の好みが決まっていない人は、いろんな音が出るモデルを試して“自分が好きな音”を知るのもいいと思います。

miyako　部屋のサイズに合わせてもいいですよね。机の上にポンッと置けるくらい本当に小型なものもあって、もちろん“小さいと音が悪いとか、大きければ音がいい”という時代でもないので。あとは、インテリア的に考えるのもアリだと思います。今日弾いたなかで“見た目はいいけど音はダメ”なんてアンプは全然なかったですから。充電式もありがたいですよね。ただ、私の性格だと充電のし忘れがあるかも（笑）。

midori　これくらい小型なら、楽屋とかツアー先のホテルで練習するときにも持って行けるのでいいですよね。

◎スピーカーを鳴らすことの重要性

miyako　もちろんヘッドフォンで聴くのかスピーカーで音を出すのかは環境に合わせてとなりますけど、もし人前で弾くプロを目指している人ならば、やっぱり“アンプを鳴らしてナンボ”というところもあるんじゃないですか。スピーカーから出ている音を勉強するためにも、ヴォリュームが小さかろうが大きかろうが、音を直接感じたほうがいいなと思いますね。

midori　私も家ではアンプにしろモニター・スピーカーにせよ、実際に鳴らすことが多いですね。奥行き感などから、いろいろ気づくことがあるんですよ。もちろんヘッドフォンで気づけることもあるので、交互に使い分けられるとイイかもしれませんね。

miyako　私も練習がキツいなってときは、イヤフォンでディレイをかけまくって気持ちよくなって弾いてます（笑）。

◎小型アンプでメタルをしよう！

midori　シンプルにこだわったタイプからめっちゃ作れるタイプまで本当に幅広いので、最初に言ったように、まずは自分がどうしたいかが大切。自分の用途に合うもので、ピンとくるものを。メタル用アンプとしては……どの機種も歪むので、どれを選んでも安心です（笑）。

miyako　今はコロナ禍ということもあり、試奏して買うのがなかなか難しかったりするとは思います。考え方にもよりますが、まずはお手頃価格のモデルから手を出して小型アンプの沼にはまるも良し、最初からいろんなことができるタイプを選んでも良し。どちらも使いこなせれば、きっとハッピーなギター・ライフになると思います。迷ったときも、自分の直感を信じてください！

11モデル［スペック早見表］

ラストは、今回試奏した11モデルのスペックを早見表としてまとめてみた。自室にマッチするモデルはどれだ!?

	出力	サイズ	重量	チャンネル／アンプ・タイプ	エフェクト	ヘッドフォン出力	AUXイン／ライン・イン	アプリ連動	バッテリー
BLACKSTAR FLY3 VINTAGE	3W	170×102×126mm	900g	2	○	○	○	—	○
BOSS KATANA-AIR	30W	350×144×181mm	2.2kg	5	○	○	○	○	○
BOSS KATANA-MINI	7W	230×116×181mm	1.2kg	3	○	○	○	—	○
LANEY MINISTACK-B-IRON	6W	205×105×295mm	2.6kg	2	○	○	○	○	○
MOOER SILVEREYE 10	10W	168×292×168mm	3.3kg	1	—	—	○	—	—
OGANGE CRUSH 12	12W	305×175×290mm	4.7kg	1	—	○	—	—	—
POSITIVE GRID SPARK	40W	350×190×180mm	5.2kg	7	○	○	○	○	—
VOX ADIO AIR GT	50W	360×165×163mm	2.9kg	11	○	○	○	○	○
YAMAHA THR 10 II WIRELESS	20W	368×183×140mm	3.2kg	8	○	○	○	○	○
HUGHES & KETTNER SPIRIT OF METAL	50w	190×90×90mm	720g	1	—	○	—	—	—
PEAVEY 6505 PIRANHA HEAD	20W	178×132×82mm	1.13kg	2	—	○	○	—	—

※[サイズ]は、幅(W)×奥行き(D)×高さ(H)の順で表記しています。
※[チャンネル／アンプ・タイプ]はアンプ本体での音色バリエーションで、アプリは含みません。
※[AUXイン／ライン・イン]は、ワイアード／ Bluetooth接続のどちらの場合も○としています。
※[バッテリー]は、電池／内蔵バッテリーにて駆動するものに○をしています。並行してアダプター駆動するモデルもあります。

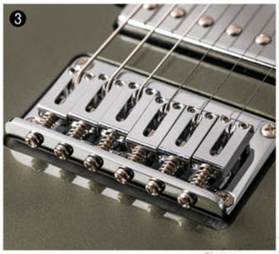
METAL HAMMER JAPAN

Let's get loud with FENDER

MADE IN JAPAN MODERN SERIES で鳴らす最新ラウド・サウンド！ Vol.4

専用に開発されたハムバッカーを搭載するなど、ラウド・ミュージックにうってつけのギター＆ベースをそろえる［MADE IN JAPAN MODERN］シリーズだが、このなかでも特に“ヘヴィ系ミュージシャン待望”と言えるのが、TELECASTER HHではないだろうか？　テレキャスターならではのシルエットとモダン・サウンド＆プレイアビリティを持つ新次元の本器を、AKIHIDEの実演とともにフィーチャー！

●お問い合わせ：フェンダーミュージック
☎0120-1946-60　©FENDER.CO.JP



❶トラディショナルなテレキャスターにはないボディ裏のコンター加工。体への密着度が上がり、ギターとの高い一体感が感じられる。❷ハイ・ポジションへのスムーズな移動に配慮し、かつ充分な強度を保つネック・ジョイント部。❸各弦の調整が可能な独立型サドルを採用。弦の裏通しでテンションも得られ、安定した弦振動が期待できる。

MADE IN JAPAN MODERN TELECASTER HH

ラウド・サウンドを生み出す新次元テレキャスターをクローズアップ!

ハードなサウンドやプレイに特化した本テレキャスター HHは、例えるなら、従来のテレキャスターとは“性別が変わったくらい”の変化がうかがえる1本。

ボディ表面の緩やかなアール加工、裏面のコンターやヒール・レス加工により、抱えたときのフィット感が格段にいい。ネック・グリップにもひと工夫がされており、ロー・ポジションは握りやすいCシェイプだが、ハイ・ポジションに向かって親指をネック裏に添えやすいDシェイプに変化していく。加えて指板Rもハイ・ポジションにいくに従いフラットに変化する円錐指板を採用しているので、ポジション移動や演奏性に大きく関わる弦高も低くセッティングすることが可能。これは高度な演奏が求められるモダンなラウド系ギタリストには大変にありがたい。

本シリーズ専用のピックアップは、ノイズが少なく両ポジションの音量バランスも申し分ない。実践的かつシンプルなコントロール部を含め、演奏に集中できると言えよう。

トラディショナルなテレキャスターはその仕様のためメタル系には少々使いにくいが、本モデルはノイズ対策や演奏性の向上を念頭に開発されているのでその心配は皆無。ひたすらラウド&テクニカルに弾けるテレキャスターなのである！

（文：梶原稔広）

Specifications

●ボディ:アルダー ●ネック:メイプル ●指板:セレクテッド・ローズウッド ●フレット:22 ●ピックアップ:モダン・モディファイド・ハムバッキング×2 ●コントロール:ヴォリューム、トーン、ピックアップ・セレクター ●ペグ:デラックス・キャスト／シールド・ロッキング ●ブリッジ:6サドル・アメリカン・テレ・ウィズ・クロームド・ブラス・サドル

価格:170,000円＋税

Color Variation(HH)

- ジャスパー・オリーブ・メタリック（画像）
- ブラック
- ディープ・オーシャン・メタリック
- オリンピック・パール
- サンセット・オレンジ・メタリック

MADE IN JAPAN MODERN TELECASTER

価格:170,000円＋税

同シリーズには、もう一機種テレキャスターがラインナップ。こちらは第4世代のノイズレス・シングルコイル・ピックアップを2基載せた1本だ。より、オーセンティックなアプローチと高い演奏性を融合させたいというギタリストは、ぜひこちらもチェック。

Playing Impression

AKIHIDE × MADE IN JAPAN MODERN TELECASTER HH

それでは早速、AKIHIDEによる実演レビューをお届けしよう。日頃からテレキャスターも愛用し、自身が所属するBREAKERZやソロ・ワークなどで、ヘヴィ系～メロディアス系とさまざまな演奏を聴かせるAKIHIDEに、この新しいテレキャスターはどう映るのか!?

Voice

僕自身、テレキャスターは何本か所有しているんですが、このギターを持ったときの第一印象は“なんて持ちやすいんだろう！”。テレキャスターって僕のなかでは、いい意味で“こっちから歩み寄らないといけない”ギターなんです。ボディの感じもそうだし、音色的にもプレイ的にもこっちから寄り添わないと、ちょっと弾きづらかったりもします。ただ、それが良さであり、ハリのある音にもつながっていると思うんです。でも今回のテレキャスターHHは体にジャスト・フィットするんですよね。

歪みサウンドはすごく粘るなと思いました。これまでのテレキャスターが持っているカラっとした感じとはまた違って、貼りついてくる感じがすごくモダンな印象です。なおかつパワフルなハイも出ていて、例えばツイン・ギターだったり、シンセだったりがあっても、きっとヌケてくるんだろうなと思います。オールドのギターが持っているハイ感よりも上のレンジというか、そこがモダンなサウンドの軸のひとつになっていると思いますね。そうなると、やっぱり“ノイズ問題”が気になるところですが、そのノイズが全然なかった。そのへんもすごく考慮されているピックアップですね。ゲインを下げても、多分嫌味なく素直に落ちていくと思いました。近年のメタルはクリーンの重要性も高くなっていますよね。そういう意味ではアタッキーなクリーンも出せて、最新のメタル・スタイルに合う印象でした。

ヴォリュームの効きがすごくいいのもポイントでした。いわゆるハイ・ゲインのピックアップだと、ヴォリュームを下げると色もなくなる印象がありますが、そうではなく自然に下がっていく。ヴォリュームは下がるけどレンジは落としませんよ、みたいな。

ネックは、ロー・ポジションで弾いたときの“ガッツリつかんでいる感”がすごくあって、ただそのままでいくと、今度はハイ・ポジションが弾きづらくなるかなとも思うんですけど、このギターはハイポジでもモダンな弾きやすさが加味されている。すんなりいっちゃうというか、スルスルと手をすべらせていけるというか。指板の具合も含めて、タッピングだったりチョッパーだったりといろいろ対応できると思います。ヒール・カットは特に立って弾くときに重要で、メタル的な速いフレーズを立って弾くときの大変さを、かなり軽減してくれるんじゃないかなと思います。

トップ面のアーチ加工は右手の落ち着きどころがすごくわかりやすいし、なにより高級感が出ますよね（笑）。見る角度によって変わる光の映り具合は、モデルとしてのランクを一段、二段と上げている感じもしました。ピックガードは、ある意味フェンダーにとってのシンボリックなものですが、あえてそれを付けないことで、よりシンプルにプレイとステージングを見てくれっていう心意気みたいなものもある。バインディングがあるから、メタル系の暗いステージでも映えますね。日本製という点も、ちょっとテンションが上がりますよね。地産地消じゃないですけど、そういうのが好きなので（笑）。

BREAKERZはギターがふたりいて、差別化ということからもシングルコイルのギターを使うことが多かったんですけど、このギターはもう一方のギターとも違う、共存できる新しい感じのモダンさがあるので、BREAKERZのヘヴィな曲でぜひ使ってみたいです。

もちろん、初心者から中上級者の方まで使えるギターだと思います。当然モダンでヘヴィな音が出せるんですけど、クリーン、クランチの切れ味も出せちゃう。初めての1本目としてヘヴィなリフを弾いていき、その後渋いブルースやジャジィなことをやりたいときにも対応できる。モダンなこと、ヘヴィなことをやりつつ、さらにプレイの幅を広げることができるギターだと思いますね！

楽器探しのアシスト・メディア
デジマート マガジン
デジマート・マガジンにて動画が公開！
Webサイト[デジマート・マガジン]では、AKIHIDEによるTELECASTER HHの試奏動画を公開中！　エッジィなプレイはもちろん、ドロップDチューニングでディレイを使ったプレイにもトライしているので、エフェクトとのコンビネーションもぜひ確認してほしい！
デジマート・マガジンHP　https://www.digimart.net/magazine/

Information

● *Release*
ソロ８枚目となるアルバムが発売中！
『LOOP WORLD』
ZAIN RECORDS／ZACL-9120（通常盤）

● *Live*
クリスマス・ライヴが決定！
《AKIHIDE SPECIAL LIVE X'mas LOOP WORLD》
12月19日（土）／東京・大手町三井ホール
問：ディスクガレージ　☎ 050-5533-0888

AKIHIDE

2001年にロック・バンドFAIRY FOREのギタリストとしてメジャー・デビュー。2007年にDAIGO、SHINPEIらとともにBREAKERZを結成し、同年7月に『BREAKERZ』にてメジャー・デビュー。2013年からはBREAKERZと並行してソロ活動を開始する。ギタリストとして以外にも、イラストや言葉といったさまざまな表現での制作活動も行なっており、絵本の出版や自身の作品のデザイン・アートワークも手がけている。

Ⓒ https://akihide.com

LET'S TALK METAL!

水野真紀

**コロナ禍で強く感じたのは、
私たちの仕事は真っ先に影響を受ける……
それは不要不急じゃないとみなされているから。
それでも音楽って素晴らしいよね！っていうのを、
ライヴ映像に映っているファンの姿から感じるんです。
その“支えて、支えられて”という人間関係が
最も密なのがメタル（笑）。**

去る８月、ひとつのブログ記事が話題となった。女優・水野真紀が『女優的養生訓～一日一健～』にて、“新たにヘヴィメタルに触れ、その素晴らしさにハマった”と語る。デビュー時から清楚な品を纏い、プライベートではやさしき母でもある彼女がメタルを題材に話を進めるのだから、そのインパクトは大きく、メタル・コミュニティはにわかに湧いたのだった。ブログに載せるまでに至ったヘヴィメタルの印象を改めて聞いたこのインタビューでは、水野真紀という人が持つ、“いいものは、いい”と認め楽しむ探求心と広い心を実感することができた。

取材・撮影：オカミ・タカヒデ

『女優的養生訓～一日一健～』

水野真紀のオフィシャル・ブログ。毎週月曜日に更新され、身の回りの話題を個性豊かな文体で、ときにコミカルに紹介している。８月 17 日には「五十路を超えてヘヴィメタる」と題し、我らがガルネリウスに初めて触れたときの感想をつづっている。ほかにも「再びヘヴィメタる」、「メタルと配線」などメタル関連の投稿が続く！

◎ https://ameblo.jp/mizuno-maki/

こっそり呟いている感覚で、
同世代の人にクスッとしてもらえれば。

―― 本日は、去る８月のブログ記事で“水野さんがメタルにハマった！”と話題になったことから、直接そのお話をうかがえればと参上いたしました。

もともとブログの記事は、何の気なしに……という感じだったんです。私は今、幼児教育に関する勉強をしているんですけど、指で作る狐の形って、角度によってはメタルのサインになるんですね。

―― 知らず知らずのうちに、ロング・ホーンを出していたという（笑）。

ハワイ好きの知人と写真を撮った際、“シャカ”というハワイ独特のフィンガー・サインをしたつもりが、その“ロング・ホーン”を出していたことにも気づいて。だからちょっとおもしろいなと思いブログで出したら、いつの間にか反響がすごいことになっていて驚きました。

―― お手元にも反響が届いたんですね。

ネット・ニュースで話題になっているという話も聞いて。本当にブログってすごいなと思いましたね。私はこっそり呟いている感覚で、同世代ぐらいの人にクスっと笑ってもらえればいいかなと思って書いたものが、いつの間にかあのような展開に。

―― 一般のニュースでも取り上げられましたが、やはりメタル界隈ではより大きな話題になりました……“なんで水野真紀が！？”と。メタルって現代の音楽シーンでは決してメインストリームではないので、ちょっと日が当たった！みたいな感じもあり。

聞けば、メタル・ファンの人たちって私と世代が近いようですね。だからその点でも盛り上がったのかなという印象は持ちました。

―― そもそも、ヘヴィメタルという音楽との出会いは、ブログで取りあげねばと思うくらい大きいものだったんですね？

“皆さん、もっと知っていてもいいんじゃない？”という思いからかな。ブログは共有や表現の場だと考えているんです。よく突っ込まれますが（笑）、ブログで“カルロス・トシキ愛”を叫び続けるのも同様です。カルロスさんは母国ブラジルへ戻り、今は年一回の来日ライヴのみの活動なのですが、一世を風靡して世の女性をときめかせてくれた貢献度や、彼のルーツである日系ブラジル人の受難の歴史を知るほどに、応援せずにはいられないという気持ちです。そんな風に、みんなにももっと知ってほしいなということをブログでは書いているんです。

―― 多くの人と話題を共有する場所がブログなんですね。そのひとつの話題となったヘヴィメタル……ガルネリウスを知ったきっかけは何だったんですか？

息子が視聴したＪポップの名残かな？ YouTubeにクリスタルキングの「大都会」が出てきて、すごく懐かしくて観ていたんです。すると次は小野正利さんの「You're the Only…」が現われて、こんな素敵な曲あったなって思っていたら、動画の横に白っぽい画面が出ていて。それがガルネリウスの「DESTINY」だったんです。何これ？と観始めたら……すごいですね。冒頭からハイ・トーンがドドーンと押し寄せて、ガッツリつかまれました（笑）。演奏も素晴らしいでしょ？　そこからいろいろ調べちゃって“こんな素晴らしい世界がありましたよ”と紹介させていただいた次第です。

―― なるほど、そういう現代的視聴スタイルらしい流れがあり、それがブログにつながったんですね。そのブログのタイトルが「五十路を超えてヘヴィメタる」で、自然とヘヴィを“う点”にしていたのも好感度高しでした（笑）。

聖飢魔IIに『悪魔が来たりてヘヴィメタる』（1985年）ってあったでしょ？　それで「五十路を超えてヘヴィメタる」にしようと（笑）。

音そのものからも
その人の人生が見えてこないと。

―― もともとの音楽的趣味というと？

それが、あんまりないんです。子供のときも、家でクラシックが流れていたわけじゃないですし。そのときに家族が聴いているものに影響されるという感じで。

―― そのなかの一環として、カルロス・トシキさんの音楽に触れたわけですね。

カルロスさんは自分の青春時代に引き戻してくれるんです！　あとね、彼自身が今、ブラジルでニンニクのスペシャリストとしての新たな道を歩んでいるんです。私、どうやら“おじさんの生き様”に胸を打たれやすいみたい（笑）。小野さんにしても圧倒的な歌唱力をもって、Ｊポップやアニメにゲーム関係のテーマ曲、そしてガルネリウスにも参加され、歌一本で勝負しておられる。紆余曲折あったであろう、その歴史に感動してしまうみたいです。

―― 音楽と同時に、その人の人間的背景も重要になってくると。

音からもその人の人生が見えてこないと。重ねてきたものが見えることにも感動するような気がします。もちろんガルネリウスさんはとにかく演奏者としても本当に素晴らしくて、それぞれがその道で真剣にやられている。とにかく、みんな音楽が好きなんだなって。純粋に好きなんだなっていうのは羨ましくも感じます。

―― なるほど。

でもそこには責任ものしかかってくるじゃないですか、人生の。コロナ禍で強く感じたのは、私たちの仕事は真っ先に影響を受ける……それは不要不急じゃない、と世間一般からみなされているから。それでも音楽って素晴らしいよね！っていうのを、映像に映っているファンたちの姿から感じるんですよね。

―― 盛り上がり腕を上げている姿ですね。

ライヴ映像では客席も映すでしょ。その“支えて、支えられて”という素晴らしい人間関係が最も密なのがメタル（笑）。

―― 密ですね〜。

密ですよね！　質問です。座席を用意しているメタルの会場ってあるんですか？

―― 座席のある会場で行なわれることもあります。ただ“モッシュ”というすし詰め状態でぶつかり合って、人の上に人がいてっていうのがメタル系ライヴの醍醐味でもあったりして。

アハハ、それ醍醐味ですね！

紆余曲折あったであろう、
その歴史に感動してしまうみたい。

―― そういった、ある意味異質にも映るヘヴィメタルという音楽スタイルですが、偏見を持たず興味を持って楽しめるという姿勢にはとても感銘を受けます。スタートから“え〜、メタル？”という拒否反応の人もいますから。

ブログにも書いたんですが、中高6年間お世話になった音楽の先生がメタル／ロックを毛嫌いしておられたんです。高校生は文化祭でライヴをしてましたけど。1980年代の半ばぐらいっていうのは、勢いがあったんですよね？

―― メタルに限らず、バンド活動自体がすごく盛り上がっていた時代ですよね。

同じクラスの女の子で、頭をガンガン振っていた子がいましたよ。ただ、きっとその先生の影響ですね、当時私はまったく興味を示さなかったんです。

―― では10代のときに同じようにガルネリウスを観たとしても、あんまり興味は湧かなかった？

湧かない（笑）！

―― ご自身もいろいろ経験したからこそ、“その人の背景も含めて好きになる”ということなんでしょうね。

やはり、この年になったからでしょうね。小野正利さんのFORT BRAGG時代を観たことあります？　そこに関しては“小野くん”って呼んでいます（笑）。学生時代だったら絶対付き合わなさそうな、縁もなさそうな小野くんが、動画サイトを通じて、今観るとしびれるぐらいカッコイイんです！

―― ハハハ。今の感覚で観ると、小野青年がすごくカッコイイ。

歌がうまいの、とにかく上手。それにしてもYouTubeって恐ろしい世界です。SYUさんが“てけてけてけ”と両手で弾く動画、YUHKIさんの超高速キーボード演奏……あれこれ出てきてしまう。鍵盤なんか前傾しちゃって、冒涜しているとしか思えない！（笑）

――ハハハ、きっと学校の先生が観ていたらそうおっしゃったことでしょう（笑）。

とにかく魅力的、“魅せる”んですよね。この間

は《METAL FOR KIDS UNITED! All-Star Charity Jam》に日本からはSYUさんが参加して。

――世界の名だたるメタル・ミュージシャンと「紫の炎」をセッションするというものですね。

拝見したのですが、そこに出ている皆様がとても楽しそうで。音楽っていいなって、今さらながら思いました。事務所には“こんなのがオススメです”っていうメールをくださる方もいたりして。先日、学生時代の友達とハマっているものについて語り合ったんです。みんなは韓国のBTSだったりするなか、私がガルネリウスを推したところ、私の友達でお嬢さんが趣味でドラムをやるような音楽好きの家族がどハマり。

――もう、メタルを紹介する側にもなってる！

逆に彼女からも“今度これも聴いてきて”とか（笑）。そんな交流も楽しいですよね。

何かをやり続けることの幸せと大変な部分って表裏一体。

――水野さんには『水野真紀の魔法のレストラン』という代名詞的TV番組もあります。“新しいものへの興味”ということでは、例えば食べ物に関しても、未体験の食材や調理法、味つけにも戸惑いはない？

食べたことのないものは大体試しますね。基本的に食べ物って命をいただいているから、それに関して文句を言うことはないです。そこには人の手もかかっているので、食材に対しても、作ってくれた人にも感謝することが大切です。それと、その場にある調味料で味変するのもけっこう好き。変化をつける楽しみ方もアリだと思います。

――お店やそのメニューではどうでしょう？　ついつい同じ店、同じメニューになってしまう人も多いのでは、と。

そこは行き当たりばったりです。お店選びも人間関係だと思っているので、ご縁がある人との関係は大切にしているかな。メニューに関しては、どちらかと言えばバランス良く栄養が摂れてるかなとか、そっちのこだわりですね。野菜を摂りたかったら中華に行くとか。お肉も食べるし、いろんな意味でバランス良くが大事！

――やはり、何事もバランスが大切なんですよね。音楽でもひとつのサブ・ジャンルに固執せず、バランス良くいろいろ聴いて応援できると、もっと楽しいのになと思うこともあって。

メタルのなかにもすごくジャンルがあるんですよね。それってちょっと知的な感じがしませんか？　こんなにも細分化されていて、私は大雑把感ではないところが、こだわりが強くていいなとも思いますよ。

――そう、そのこだわりがメタルの良さでもあるんですけど、逆に自分の好きなものしか聴かないということにもつながりかねなくて。新しい世代のメタルが出てきても“俺には関係ない”って人も少なくないんですよ。水野さんのように、良かったものを良かったと言える気持ちをみんなで持つと、このジャンルはもっと大きくなると思うんです。

アーティストとともに年を取るという考え方に対しては共感するところもありますね。カルロスさんが昔の曲を歌うと若かりし頃を思い出しますし、ガルネリウスは私にとっては“新しいモノ”ですが、これはこれで味わい深いですよ。ところで、若い子でヘヴィメタルの後継者っています？

――多様な音楽とクロスオーバーしたメタル・バンドがいろいろ生まれていますが、80年代、90年代に比べると表舞台には出づらい状況ではありますね。

それこそYouTubeなどのSNSで発信して武道館でコンサートができるようになるとか、そういうビジネス・モデルを若い人たちが作ってくれたら、上の世代からファンを引っ張ってくるんじゃなくて、新たなファンを開拓できるのかなって。だって今のベテラン演奏者さんも、80年代は同世代の若者を取り込んだんでしょ？

――確かに。

若いバンドには、若い人なりの取り込み方があるんじゃないのかな。YouTubeのコメント欄だったかな、“好きなギタリストが亡くなって俺のメタル人生も終わりだと思ったけど、SYUが出てきてくれてまた楽しみが広がった”と書いていた人がいて。尊敬していた人が亡くなったとしても新しい才能が出てくると、人は応援したくなる。応援せずにはいられないのかなってすごく感じました。

――さて、件のブログでは、今度はガルネリウスの配信コンサートを観ると書いていましたね（※配信は10月下旬のこと）。

もうチケットも払って、投げ銭も完了（笑）！　コンサートができない大変さを考えると、心して応援しなくては。

――水野さんがどんな感じでライヴを観るのか想像がつかないんですけど（笑）。

私は気分が乗るとこんなんして（と手を挙げ頭を振る）。

――アハハ、ご家族もびっくりですね。

水野がヘヴィメタルに興味を持つかっけのひとつとなったのが、ギタリストSYU擁するガルネリウス。ブログでは画像を交えながら彼らのプレイ・スタイルを紹介し、彼らがどのようなサブ・ジャンルにカテゴリーされるのかも研究している！　バンドは10月25日に、新ドラマーLEAの初ステージでもある配信ライヴを開催した。

On Sale

『FALLING INTO THE FLAMES OF PURGATORY』
ワーナー／WPZL-90220/2
（Blu-ray通常版）

ひっそりね。でも息子にはこんな世界観もあると教えています。コンサート画面を観ていると、みんな楽しそうですよね。そういうのを心から“いいな！　うらやましい！”って思える自分になっているのは、不思議な感じがします。10年前には想像できなかった。これはきっと、息子が青年になりつつあって、自分の好きなことを確立して手がかからなくなってきたというのも影響していると思います。

――だから、自分の趣味に時間が割けるようになってきたとか。

あと、必然的におうち時間が増えましたでしょ？　コロナ禍のときにいろいろ考えて。何かをやり続けることの幸せと大変な部分って表裏一体で、それを誰もが痛感したと思うんです。特に私たちの仕事は、その最たるもの。ある意味、リスクを背負いながら頑張る姿に感動します。人をつなげていくこと、みんなに幸せを届けたいとか、何かしら自分を表現せずにはいられない気持ち。そういったものが音楽、特に密なメタルで起きているな、と感じますね。

――そうですね、メタルのイイところのひとつは、団結力だとも言えます。コロナが明けた際には、ぜひ実際のコンサートにも足を運んでそれを体感していただければ！

楽しみにしています。でも、ヘヴィメタルのコンサートに関しては、席を離した着席だと演奏する側も盛り上がらないかもしれない。

――ファン同士がもみくちゃになるのも、メタルの楽しみですからね。

カルチャーだと思うし、憧れみたいなものがあります。私がそういう世界を知らなかっただけに、今ようやくその素晴らしさを感じています。

――ぜひ今後とも、いいバンドに出会った際にはブログでコメントしていただけると、メタル・シーンがより盛り上がってくるのではと！

バンド好きの友人が教えてくれたり、お薦めをメールでくださったりする方もいて、そのリストを取ってあるんです。先日もエディ・ヴァン・ヘイレンさんが亡くなったというニュースがありました。当時、興味を示さなかったかもしれないけど、「ジャンプ」のMVを改めて観ましたが、本当にカッコイイ。いいものは色褪せないですね！

みずのまき●1970年3月28日生まれ、東京都出身。1987年、第2回《東宝シンデレラ》審査員特別賞を受賞し、ＮＨＫ連続テレビ小説『凜凜と』で本格デビュー。パナソニック電工のコマーシャルでの初代“きれいなおねえさん”として、世代・性別を超えて支持され、その後もドラマやＣＭ、映画、バラエティなど幅広いステージで活躍。調理師免許を持ち、司会も務めるグルメ情報番組『水野真紀の魔法のレストラン』（ＭＢＳ）は、20年目を迎える。
◎オフィシャルHP：https://www.toho-ent.co.jp/actor/1091#profile

OLIVER SYKES BRING ME THE HORIZON

オリヴァー・サイクス　ブリング・ミー・ザ・ホライズン

Interview by Toshiya Ono(FLJ)　Live Photo by Masanori Naruse

パンデミックの時代になったときに、今のヒップホップやポップ・ミュージックとは違う、本当のことを歌った歌こそが必要なんじゃないかと思って。

先行配信され、来年1月にはCDとしても発売が決まったEP『ポスト・ヒューマン：サバイバル・ホラー』。同作ではBABYMETALを筆頭にさまざまな新進気鋭のミュージシャンと共演しており、その反応はこれまでになく大きく早いという。近年は実験的な曲作りもしてきた彼らだが、ここに収められたのは、発想の瞬間を大事にしたキャッチーなメロディとヘヴィなサウンド、そして現実を見据えた世界観だった。ここ日本でも、本作を持って彼らへの熱気はさらに上昇することだろう。フロントマン、オリヴァー・サイクスの[オフィシャル・インタビュー]をお届けしよう。

『ポスト・ヒューマン：サバイバル・ホラー』
ソニー／ SICP-6467
※ 1 月 27 日に発売の国内盤 CD には、配信の 9 曲に加え、ボーナスとしてライヴ音源が 3 曲追加！

歌詞が冷酷な気持ちにさせるのではなく新しい考えを持つ機会になれば。

――『ポスト・ヒューマン：サバイバル・ホラー』は、タイトルからして未来の人間のあり方を意味していますが、これまでのあなたの問題意識とコロナ時代の到来とが奇しくもつながってしまいました。コロナ時代に何を考え、それをどのように音楽にしていったのでしょうか？

「ルーデンス」をリリースしたとき（2019年）から始まったんだと思うよ。この曲は小島秀夫監督の『DEATH STRANDING』のために作った曲なんだけど、自分の頭のなかで描いていたことを形にしていったんだ。僕たちの音楽は常に人間の感情、人間のあり方について歌っている。「パラサイト・イヴ」も作ったのは去年のパンデミック前で、当初はサバイバル・ホラー的な曲を作りたいと思っていたんだ。今の世界を見ると、地球温暖化の副産物としてさまざまな弊害が起こっているよね。例えば、気温の上昇によって新たなバクテリアが出てきたりとか。そういう問題意識があったうえで書いた曲なんだけど、まさかこれほど早く直面するとは思ってもいなかったよ。

――「パラサイト・イヴ」はその内容のきわどさから、一度は制作を止めていたそうですね。

もともとは未来についての曲なんだけど、パンデミックが拡大して、しかもイギリスはひどい状況になってしまった。曲を作っていくうちに、コロナ・ウィルスでの死亡者数も 500 人……1000 人とどんどん増えていった。それで僕も当初はこんな曲を出すのは無神経なんじゃないかと思ってさ。歌詞に＜When we forget the infection / Will we remember the lesson?（僕らがこ

の感染を忘れたときに／そのときの教訓を思い出せるのか？）＞という一節があるんだけど、もともとは＜When we survive the infection / Will we remember the lesson?（僕らはこの感染を生き延びたときに／そのときの教訓を思い出せるのか？）＞だったから、あまりいい気持ちはしないよね。でも、しばらくしてみると、現実から目を背けてばかりではいけないと思ったんだ。このクレイジーな現実は存在するわけだから、この曲はリリースすべきだと思うようになっていって。

―― 確かに。

音楽は聴き手にモチベーションを与えるような、スゴくパワフルなツールになり得るわけだからね。僕の歌詞が聴き手を冷酷な気持ちにさせるのではなく、何か新しい考えを持つような機会になればいいと思っているよ。そこには今世界で起こっていることが描かれているわけだから、例えそれがどれだけダークなものであったとしても、出すことに意義があると思ったんだよ。

多くの人に何かを感じてほしい。
そうすれば僕たちも前進できる。

―― 4枚のEPをリリースしていくプロジェクトの一環とのことですが、アルバムではなく、EPというフォーマットを選んだ理由は？

今まで何枚もアルバムを出してきたけど、今回は違うことがやりたくなってね。アルバム制作で2年間も曲を作り続けるなんて、ハードワークすぎるよ。インスピレーションは浮かんではすぐに消えていくものだし、今の時代をテーマにした曲をすぐに出すわけだから、その反応が早ければ次のレコードにも反映できるだろ。それに、4枚のEPはそれぞれが独立したものになるから、EPごとにテーマもサウンドも変えられるしさ。

―― 4枚のEP全体のアイディアは考えているんですか？

抗議デモみたいな感じだね。何千人もの人たちが抗議をしているようなもの……それがEPのアイディアだよ。僕としてはなるべく多くの人たちに何かしらを感じてほしいと思っている。そうすれば僕たちは前に進むことができるし、人類が種として進化できると思うな。このEPではほかのみんなと同様、僕たちが頭にきて、恐れ、怒っているという事実を認めてほしいというのが大きいね。それでスゴく攻撃的な内容になっているんだ。だからサウンド的には、今まで以上にヘヴィで怒りに満ちているだろ。それは歌詞やテーマと自然とつながっているからなのさ。僕たちは過去に生きているバンドじゃないし、新しいものを作るのであれば、今までとは違うものにしなくてはいけない。それで今回はサイバー・フラッシュ・パンクで、ディストピアで、ビデオ・ゲーム的で、SF映画のサウンドトラックのようなものを作りたかった。そのためにも新しいサウンドを導入したかった……今までとは違うエッジを持ったものにしたかったんだよ。

―― ミック・ゴードン（プロデューサー）を起用したのも、そういったサウンドを目指したから？

そう。僕はゲームの『DOOM Eternal』が大好きなんだけど、ミックはそのサウンドトラックを手がけていて。スゴくヘヴィで、インダストリアルで、超クールなサウンドなんだ。メタルにはないサウンドだし、エレクトロニック・ミュージック、ダブベースに近いんだけど、さらにヘヴィでパワフルで、しかもノイズなんかじゃなく低音とリズムが強力なものさ。今までは僕とジョーダン（フィッシュ／k）がサウンド作りをやってきたんだけど、今回は第三者を入れることで僕たちはよりソングライティングに集中したいっていうのもあって。おかげでこのEPにはスゴく強力なヴァイブスが宿ることになったよ。

――「オベイ」は明確な政治的メッセージを持った曲で、客演のヤングブラッドが新世代の声となってメッセージを発信しているのにも大きな意味があると感じました。

彼は僕たちのファンなんだよ。彼は自分自身にリアルだし新しい世代のロック・スターだから、いろんな人たちにとってのロール・モデルとなり得る男なんだ。性の違い、好みの違いを超えてアピールしてくるし、彼自身そういう違いなんてまったく気にしないから。

――「キングスレイヤー」では、BABYMETALを客演に迎えています。

BABYMETALとは、たぶんアメリカのフェスで知り合ったんだけど、彼女たちからはいつもいいエネルギーをもらっている。いつ見ても笑顔で、温かい気持ちをもらえるんだ。フェスの現場だと緊張感があったりするけど、そこに日本人の女の子たちがいいエネルギーを持ち込んでくれるんだよ。挨拶をしても、お互いのリスペクトが感じられるしね。いつだってナイスだから、何か一緒にやりたいとずっと思っていたんだ。彼女たちも僕たちとコラボしたいと言ってくれたし、去年は彼女たちの日本公演にもゲストで呼んでもらえて。

―― コラボはどのように進めたんですか？

まず、彼女たちには日本語で歌ってほしかった。スペシャルなものにしたかったから、英語の歌詞にはしたくなくてさ。僕は彼女たちが日本語で歌うのが好きだし、それがキャッチーだと思っているから。それに曲を聴いた人は“何を歌っているんだろう？”と思って調べるよね。それもいいと思ったんだ。歌詞作りもスゴく日本的だったよ。A案、B案、C案があって、かなり労力を使っていろいろ考えてくれたと思うな。結果、自然と素晴らしいものができあがったから、スゴくうれしかったね。できれば一緒にMVも作りたいよ。

―― このEP全体を通して、日本に対する愛がとても感じられます。小島秀夫監督の『DEATH STRANDING』に向けた「ルーデンス」から始まり、瀬名秀明の小説やゲームのタイトルでもある「パラサイト・イヴ」、そしてBABYMETALとの共演ですから。

日本は大好きだから（笑）。東京は大好きだし、ほかの土地も大好きさ。ビデオ・ゲーム、コミック、オモチャも大好きだから、僕にとって日本は天国みたいな感じだよね。バンドの人気の規模はほかの国に比べるとまだ小さいほうだけど、ファンベースはどんどん強くなっていて、去年は今までで最大規模の人たちが観に来てくれるようになったのもうれしいことなんだよ。

前作で以前と違う音を目指した結果、
再びヘヴィな音楽がやりたくなった。

―― EP本篇のラスト「ワン・デイ・ジ・オンリー・バタフライズ・レフト・ウィル・

ロックダウンになったとき、ごく自然に曲が作れるようになってね。

オリヴァー・サイクス(vo)、リー・マリア(g)、マット・ニコルス(d)、ジョーダン・フィッシュ(k)、マット・キーン(b)／L to R

ビー・イン・ユア・チェスト・アズ・ユー・マーチ・トワーズ・ユア・デス」ではエヴァネッセンスのエイミー・リーを客演に迎えていおり、これも素晴らしかったです。

これが実現するに至った経緯はけっこうおもしろくて。僕たちの前のアルバム（『モア』2019年）に「ニヒリスト・ブルース」という曲があるんだけど、エヴァネッセンスの曲に似てるって、彼らのマネージャーから訴えられそうになってさ。でもメールが来たときに、エイミー・リーが僕たちのファンだとも書いてあったんだよ。好きなバンドから好きだって言われて訴えられそうになるなんて、おかしな話だろ（笑）。それで「ワン・デイ〜」を作っているときに、エイミーにも歌ってもらえたらハマるだろうなと思ったんだ。それにこの曲はラブ・ソングだから、ふたりで歌えたら完璧だとも思ってさ。実際、彼女はオペラのように歌ってくれたから最高なものになったよ。

―― ヤングブラッド以外にも、新世代ではノヴァ・ツインズを「1 x 1」で迎えていますね。

家で制作をしていたときにランダムで曲を聴いていたら、彼女たちの曲が出てきてヤバいと思ったんだ。それまでノヴァ・ツインズのことは聴いたこともなかったし、存在も知らなかった。イギリスのグループかアメリカのグループかもわからなかったんだ。それでインスタをチェックしてみたら、僕のことをフォローしていたんだよ。DMでやり取りをしていくうちに“僕たちの曲で歌わないか？”って誘うようになって、コラボすることになったんだ。

―― そうだったんですね。さて『アモ』をリリースしたとき、あなたはロックが失ったエッジについて話をしていました。そして『アモ』は音楽的に非常にエクスペリメンタルなアプローチをしたアルバムとなりました。今回のEPでは、サウンドはスゴくロックしていながらも、未来への進化を強く感じさせるものになっています。あなたの音楽の旅は、現在どのようなところにあるのでしょうか？

『アモ』でそれまでとは違う音楽を目指した結果、再びヘヴィなロック・ミュージックをやりたいと思うようになったんだ。それに、パンデミックの時代になったときに、今のヒップホップやポップ・ミュージックとは違う、本当のことを歌った曲こそが必要なんじゃないかと思って。それで「ルーデンス」を作ったんだけど、曲を完成させるのにかかったのは5〜6日間だけだった。『アモ』のときは、1曲を作るのに何週間もかけたよ。そこで思ったのは、あまりエクスペリメンタルにはやりすぎず、もっと自然に曲を作ろうってことだったんだ。最初に曲を作ったときにいい感じだと思えたら、それをそのまま出せばいい。そこでいろいろいじってもしょうがない。「ルーデンス」はそうやってできた曲なんだ。リリース後のリアクションも早くて大きなものだったから、次のレコードでもこういう作り方でいこうと思っているよ。

―― なるほど。

いいソングライターでいることって難しいんだ。ときには作り込みすぎてしまうから。でもコロナ・ウィルスの影響でロックダウンになったとき、曲をごく自然に作れるようになってね。ヘヴィな曲にも自然とキャッチーなコーラスを入れることができて、誰にでも受け入れてもらえるものになった。その理由は、メロディもソングライティングも存在しているからなんだ。だから、ヘヴィな音楽なのにキャッチーなフックとメロディのある曲が生まれたんだよ。このEPはこの先も長く聴いてもらえるような作品になったと思うな。

The latest article
from UK

Text by Eleanor Goodman
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』341

spiritual healing

精神の癒し

ゴーストメーンは、エリック・ホイットニーが2010年からスタートさせたプロジェクトであるが、ラップ、インダストリアル、ノイズなどをまとったこの“Trap Metal／トラップ・メタル”は、日本のメタル・リスナーにはまだ敬遠されがち……というか、今もって目にすら入っていないかもしれない。しかし、彼は90年代ニュー・メタルの刺激を多分に持ち込み、すでに世界を熱狂させるアクトとなっている。ぜひ本誌読者にも、これまでの嗜好を一度横へ置き、彼の音に感電してほしい。

GHOSTEMANE Eric Whitney

ゴーストメーン　エリック・ホイットニー

2019年の[ロラパルーザ・フェスティバル]の群衆は、エリック・ホイットニーがステージに駆けつける前にSEとして流れたKORNの「Freak On A Leash」に釘づけとなった。体に死体のようなペイントをして、ドレスや網タイツをまとい、もうひとりの自分の名前である“ゴーストメーン”のブラック・メタル調の電飾ロゴをバックにして、彼は飛び跳ねながらラップを繰り出す。程なくしてひとりのファンが係員によりストレッチャーで運び出された。ライヴ中をそのまま救護所で過ごすことになったファンの顔には、ゴーストメーンの歌詞がタトゥーとして刻み込まれていた。

インダストリアルなノイズにアグレッシブなヴォーカル、そしてビートをミックスした、いわゆる“トラップ・メタル”と呼ばれる音楽の最前線にいて、それでいて彼は私たちと何ひとつ変わらない存在である。自身のアイドルであるトレント・レズナーのサウンドはもちろん、ヒップホップへの愛やマリリン・マンソンが貫いてきた美学を混ぜ合わせ、90年代のメタル文化を2020年代に提唱した。新たな世代へと再パッケージし、これらの音楽の境界を曖昧化させている。

彼は同世代のジャンル破壊者であるコード・オレンジにサポートされ、スリップノットのクラウンに師事し、そして伝説的なプロデューサーであるロス・ロビンソンとともにレコーディングを行なっている。端的に言う

『Anti-Icon』輸入盤

8枚目となるニュー・アルバム。プロデューサーにロス・ロビンソンを迎えるなど、ダークかつヘヴィなメタル感が作品を支配している。決してトラップ・メタルのひと言ではくくれないサウンドを聴くことができるはずだ。

と、彼はここ10年におけるはみ出し者の王様なのだ。

“90年代のニュー・メタルに大きな影響を受けたことについて、何か説明する必要はないだろう。だってあの頃って、まさに音楽が開拓されようとした頃で、すべてのバンドが実験を重ねて自分のスタイルをさらけ出し、ルールなんて一切なかった時代なんだから”と、写真撮影の準備をしながら語ってくれた。青白い化粧を施し、目は“いつもどおり疲れてやつれた感じ”になっていて、デザイナーとして活躍する知人から提供されたスーツを着用する。

“あのムーブメントはミクスチャーの頂点だったと言えるだろうね。レイジ・アゲインスト・ザ・マシーン、KOЯN、スリップノット、ほかにもたくさんのバンドがいた。あれほどの黄金時代はもう起こらないだろうけど、かといって俺が考えついたものを、俺の音楽が好きなキッズに聴かせたからといって何も問題はないだろうし”。

エリックの音楽的教育背景は、そもそも継ぎはぎだらけだった。彼はフロリダで育ち、本人曰く**“複雑な育ち方をした”**という。彼の父親は彼が4歳の頃に自動車事故に巻き込まれ、腰に長期的な障害を抱えることになり、瀉血専門医としてのキャリアを終わらせざるを得なかった。そして事故当時にエリックの弟を妊娠していた母は、父を24時間介護することとなった。両親が常に家にいる環境にはプライバシーがまったくなく、父親にすべてを支配されていた。オールAの成績を取らなければ父は激怒し、インターネットを使うことなど許されるはずもなかった。

エリックは学校では優秀だったが、社交性の面では苦労していた。**“俺は友達と呼べる人たちがほとんどいなくて、そもそも誰かと関わり合うことを、苦手なゲームのようだとも感じていたよ”**と回想する。**“どことなくルールがあって、必ず言わなきゃならないことや言ってはならないことがあったり、振舞わなくちゃならないこともあった。そして自分ではそれが何なのかわからなかった。そして次第にフラストレーションが溜まることになって、終いにはギブアップせざるを得なくなったよ。特にハイスクールに通うようになってからは、ほとんどの時間を自分の殻のなかで過ごすようにしていたから”**。

しかし彼は現実逃避の術を学ぶ。13歳の頃にグリーン・デイ、NOFX、MxPx、ペニーワイズ、そして［ワープド・ツアー］のコンピレーション盤に出会い、夢中になっていったのだ。そしてヴィクトリー・レコードとメタルコアが次第に感情の捌け口となっていった。

“いくつかの曲でスクリームを聴いたんだと思う。「何だこれは！？　俺はもっとこういうのが聴きたいんだ！」ってさ。14歳の頃にはギターを手にして、すぐさまTVゲーム『TONY HAWK'S UNDERGROUND』のサウンドトラック盤を介してイン・フレイムスを知った”。

しかし彼は注意深く行動しなければならなかった。というのも、スリップノットのような過激なアートワークが施されたCDは、父によって禁止されていたからである。**“ヘヴィ過ぎるからということで、俺の家でメタルはタブーとなっていたよ。でもいつの日か、この音楽と本当の恋に落ちることになるとも感じていたね”**。

エリックが父と死別したのは17歳のときだった。父は肺炎を患い、当時の状況を家族から聞いたところ、彼は鎮痛剤を誤って過剰摂取してそのまま意識不明となったようだった。圧迫を与え続けた存在ではあったが、生涯をともに暮らしてきた身近な人の死は、彼の感情を激しく動揺させた。**“友人が作れないことを嘆くのをやめて、自分の人生をもっと楽にどう生きるかを考えることにした”**

“ROSS ROBINSON MADE ME A HEADCASE”
——ロス・ロビンソンは、俺を精神異常に追いやってくれたよ。

……その結果、髪の毛を染めてタトゥーを入れるようになった。最初に胸に入れたのは父のためのものであり、それは父が彼に読み聴かせてくれた言葉だった。

“この天使は子供を抱えていて、その子がある年齢になったら天使はその子に自分で生きていかなければならないと伝えるんだ。それがどことなく自分のなかに刺さり続けていてね。父は死ぬ日まで俺をガイドしていたっていうのかな……うまい言葉が見つからないけど……俺の生活のすべてをコントロールしていた。彼が死んでから俺は成長しなくちゃならなくて、実際にかなりのペースで成長していった”。

この詩は本来、ポジティブなことを意味していたはずだが、エリックにとっては苦いものとなっていた。**“どう感じたらいいのかわからなかった。もちろん父を失って俺はある程度悲しかったけど、彼に還ってきてほしかったわけでもなくて。亡くなってくれて嬉しく思うところもあった。そしてその考えはこれからも変わらないだろう。だって、もし父が亡くなっていなかったら、今自分がやっていることは実現しなかっただろうからね”**。

エリックが現在行なっているゴーストメーンは、彼が受けてきたさまざまな影響を、最先端かつ実験段階へと変化させるプロジェクトだ。来たる8枚目のアルバム『Anti-Icon』は、この10年間で彼が作り上げてきたアイデンティティが到達した最高点と言えるだろう。

ティーンエイジャーとして異質な環境で育ったのち、ローカルなシーンの人々とつながるよりも先に、ニューヨークに住むミュージシャンのいとこを介してCOLD WORLD、TRAPPED UNDER ICE、TURNSTILEといったハードコアを知っていった。学校を卒業後に彼は電話での勧誘販売で働き始めたが、21歳の頃にはNEMESISというハードコア・バンドやSEVEN SERPENTSというドゥーム・メタルのサイド・プロジェクトでもプレイし、さらにはヒップホップ、デス・メタル、ブラック・メタルといったものにどっぷりと浸かっていった。

ソロとして実験的な音楽を作っていくなかで「Ghostemane」という曲が生まれた。この［Ghoste］の部分は友人たちとのジョークの言い合いから生まれたものだった。社会を含む多様なものへの不安から、彼は頻繁に直前でプランを中止することがあって、それは［ghosting（＝ばったりと連絡が途絶える）］と呼ばれていた。残りの“mane”は、90年代の南部のフォンク(phonk)に由来している。

“もともと俺には社会からはみ出したところがあるし、言葉の響きがいいからってのもある。俺が自分のことを喋るようになってから、自分がどれだけはみ出し者であり不安を抱えているのかを知らしめようとも思った。こういうアーティスト名にすることで名誉ある勲章を付けている気分になれて、恥じるよ

うなところはまったくないね"。

ラップとハードコアを融合させる最初の試みは2014年に行なわれたが、芳しい結果には至らなかった。**"クールなサウンドにさせたいがためにやり過ぎた結果、フランケンシュタインみたいな継ぎ接ぎ感が強くなり、純粋な表現であることを置き去りにしていた"**と認める。しかしゆっくりながら彼は成長し、カリフォルニアに移住してからは、のちにラッパーであるリル・ピープを生み出したSchemaposseという集団に解散した2017年まで所属する。同年彼は「Hades」という楽曲をリリースし、そこには[95Marilyn with less regard for my actions]という一節が含まれていた。これは新アルバムのタイトル『Anti-Icon』、すなわち"アンチクライスト・スーパースター"のことを暗示している。**"彼は言うまでもなくゴッド・ファーザーだ"。**

マンソンは世界中のアウトサイダーたちの頂点に立っただけでなく、アメリカ社会が本当に最低であることを示し、ジャーナリストからミュージシャンに転身して以降、ときには存在しないことをも作り上げ伝えている。

"彼は若い頃の著書でこのことについて触れていて、昔、実在しないにも関わらず活動していた体で自分のバンドのことをローカルな新聞の記事にも残していた。このことに俺は共感するところが多くて、例えば、自分が実力のある人間だと見せようとするところとかね。音楽を始める前からそのエネルギーをもらっていたよ"。

マンソンがゴッド・ファーザーなら、トレント・レズナーは神そのものと言えるだろう。ナイン・インチ・ネイルズのダンス・フロアを激しく揺さぶる楽曲「クローサー」(収録『ザ・ダウンワード・スパイラル』1994年)でのラップ・パート[Fuck You LikeAn Animal' bumpin' in the background]という一節を引き合いに出し**"彼は俺のナンバー・ワンのアイコンだ"**と認める。**"俺は自分でプロデュースして作曲もするし、自分で多くを録音していて、それは彼も同じさ。彼は他人に頼り過ぎることもなくて、俺にもそうするようにと大きな影響を与えてくれたひとりだ"。**

しかし話はさらに続く。ドラッギーで痛々しい印象の、悪名高い「クローサー」を含むアルバム『ザ・ダウンワード・スパイラル』、そしてそれに続く『ザ・フラジャイル』(1999年)のあと、トレントはそれまでの破天荒な生活をやめ、結婚を機に落ち着くこととなった。そして新たなキャリアのピークを迎え、メインストリームでの成功を手にする。**"トレント・レズナーは自分にとって最も大きなインスピレーションの源となったよ。俺だって家族との関係があっての自分だと理解しているし、歳を重ねるものさ。それに俺は薬物の乱用による問題など一切抱えていなかったから"。**

しかしトレントの体験はエリックにも伝播するものであり、彼は『Anti-Icon』制作中に"オピエート(※麻薬成分の一種)の中毒となっていた。アルバムのラストを飾るアコースティック曲「Falling Down」は儚くそして自叙伝的な曲であり、スーパー・プロデューサーであるロス・ロビンソンが関与したことでかなりチャレンジングな曲となった。ロス

Photo by Mariano Regidor/Redferns

はアーティストからベストなテイクを引き出すために感情的かつ極限的な状況に持っていくという、論争を巻き起こすテクニックで知られている。

“彼は精神異常者にまで追いやるのが得意な人だよ。いいところや悪いところをすべて同時に増幅させてくるんで、彼が求めてくるものをこちらとしてはやらざるを得ないんだ。最初にレコーディングを行なったとき、俺はとにかく気分が悪くて体調も下向きになった。頭のなかが真っ白になりながらもいろいろなことをやらされ、次第に彼が俺の頭のなかから離れなくなっていったよ。かなり深いところまで追いやられ、どうしてその言葉を選んだのか延々と突き詰められた。でも自分が今までやってきたなかで最もグレイトなレコーディング経験にもなってね。さらには、もっと優れた人間になれたんだ”。

音楽における一種の慣例やキー・プレイヤーとなる存在、ひとりで模索し続けた年月、そして作曲や楽器をプレイすることも含めたアーティストとしての成長……これらすべてを含めて作り上げたものが“トラップ・メタル”とレッテルを貼られてしまうことはエリックを傷つけた。彼にとってトラップ・メタルとはYouTubeからビートを流用してくるサウンドクラウド上のラッパーや、歪んだ[808]のサウンドの上でスクリームするだけの人たちのことを意味している。しかし人々をヘヴィ・ミュージックへと再び振り向かせる、ニュー・メタルのような新たなシーンを彼は重視する。それでもトラップ・メタルと呼ばれてしまうことも受け入れるつもりである。

“俺のことが好きか嫌いを別にしても、結局は誰かに何かしらのものとして呼ばれるもんだろ。スリップノットのメンバーと話をするときも、同じことを言われたもの。彼らがシーンに出てきたとき、彼らはすべての音楽と完全に異なるものを作り、人々は「これは一体何なんだ！」となってニュー・メタルと呼ぶようになった。当時俺はそれを目の当たりにして、最悪だと思ったね。誰がなんて呼ぶかではなく、大切なのは誰がそれを聴いているかってことだろ”。

『Anti-Icon』はゴーストメーンの8枚目のアルバムであり、ほかにもおびただしい数のサイド・プロジェクトやゲスト参加をしてきたにもかかわらず、メタル・ファンたちは今になって彼を発見している。このことについて実は本人としては満足していて、パーフェクトなタイミングであるとまで主張している。彼にとって最もヘヴィなアルバムであり、完全に自分らしくあると感じているからだ。

さらに彼はブラック・メタル調のロゴをやめてしまった。それは影響を受けたものとしてロサンゼルスのホーム・スタジオで大切にしてきたダークスローンのアルバム『A Blaze In The Northern Sky』（1992年）のテスト盤に見られるロゴから頂戴したものだったが、借り物とも言えたこのロゴから離れて次に進む自信を確立したと感じている。そしてマンソンがかつて語ったように、エリックとゴーストメーンであることの乖離が縮まり、よりリアルな姿を手に入れたと語る。言い換えれば、現在の彼の姿は本物、ということなのである。

“ここ数年は潜在的にエリックをゴーストメーンのなかに取り込み、両者を同じ人格にしようと努力していたと思う。そうすることで、毎回切り換えて両者を往復しなくてもよくなるだろうと思ってね。ただ今じゃ両方とも同じ人間ということになったんだ”。

DISC REVIEWS P.118

11月1日～2021年1月31日リリースの新作をピックアップ！

METAL NEW GEAR P.122

メタル・ミュージシャンにお薦めのニュー・ギアを紹介！

KOIE&TERU × SLIPKNOT WHISKEY P.126

スリップノット・オフィシャル・ウイスキーとCrossfaithのふたりが激突！

Special Presents!

本誌だけのスペシャル・アイテムをドドンとプレゼント！
希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、希望アイテム（番号と商品名）を記入してください。
◎締め切りは［3月10日（水）］まで
当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております！

①METAL HAMMER JAPAN Vol.4オリジナルTシャツ
＜250名様＞
※サイズはLのみ

②midori＆miyakoサイン入りLOVEBITES Tシャツ
＜2名様＞
※サイズはL（白×黒）／M（グレー×黒）

③Koie＆Teru直筆サイン色紙
＜2名様＞

④ジム・ダンロップ製　高崎晃シグネイチャー・ピック
（AKIRA TAKASAKI Custom Primetone Pick）
＜2名様＞
※提供：モリダイラ楽器

...AND JUST A LITTLE INFO FOR ALL

『パワーアップ』
AC/DC

ソニー／ SICP-31394
※発売中
①リアライズ②リジェクション③ショット・イン・ザ・ダーク④スルー・ザ・ミスツ・オブ・タイム⑤キック・ユー・ウェン・ユア・ダウン⑥ウィッチズ・スペル⑦ディーモン・ファイアー⑧ワイルド・レピュテーション⑨ノー・マンズ・ランド⑩システムズ・ダウン⑪マネー・ショット⑫コード・レッド

FOR FANS OF：ガンズ・アンド・ローゼズ、エアボーン

シンプルな衝動を撒き散らす不撓不屈の王者 全米チャート初登場1位を見事に達成！

１曲目出だしのブライアン・ジョンソンの雄叫びから、気分は最高潮。6年ぶりの新作はミドル・テンポ主軸の曲調が大半ではあるが、一緒にシンガロングしたくなる歌メロが多く、自然と体が揺れ動くダイナミズムを刻みつけている。50年代のロックンロールに影響を受けたリフやコードを、これほどみずみずしく現代に響かせられるのは、AC/DC以外にいないのではないか。そのなかで「ディーモン・ファイアー」は速いテンポで突き進み、サビのキャッチーさも抜群。残念ながらマルコム・ヤングは2017年にこの世を去ったが、アンガス・ヤングは実兄マルコムとともに作り上げたストックから本作を構築。その意味では兄に捧げた魂の1枚と言っていい。

数え切れないほど多くのメタル・バンドに影響を与えてきたバンドが、今なお最強のロック作を発表し、全米チャート初登場1位を獲るのも実に夢がある。的を得た名言のように、噛めば噛むほど味が出るフレーズのキレ具合は半端じゃない。（荒金良介）

『ディスタント・メモリーズ ～ライヴ・イン・ロンドン』
ドリーム・シアター

ソニー／ SICP-311410 ～ 2（CD × 3）
※発売中
FOR FANS OF：DGM、フロスト

豊かな世界観を再現する 表現力に裏打ちされた 圧倒的な演奏力

COVID-19の影響で日本公演を含む数あるツアーがキャンセルになり、残念な思いを味わっているのはファン然りバンド・メンバー然りであるが、その無念を解消するギフトとして、ライヴ・アルバムという形で最新音源が届けられた。今作品は『ディスタンス・オーヴァー・タイム』をメインとするワールド・ツアーでの、ロンドン公演を完全収録したもの。非常に高い演奏力を持って、ステージでもスタジオ作品のクオリティを限りなく再現するバンドだが、やはりスタジオ音源にはないアレンジや独特の緊張感が楽しめる。特に近年の、いい意味で人間味のあるサウンドが心地いい。

CD 3枚組みの内容は聴きごたえ充分で、ディスク2&3には名盤『メトロポリス・パート2』の完全再現が収められているので、コレだけでも聴く価値はアリ！　だがファンならば、ぜひとも映像つき版（Blue-rey版は完全生産限定）をゲットして、ヴィジュアルを通して今作を味わってほしい。（梶原稔広）

『ア・ヴュー・フロム・ジ・インサイド』

レブ・ビーチ

マーキー／MICP-11583
※発売中

FOR FANS OF：ブラッド・ギルス、スティーヴ・リンチ

自身のルーツ＆理想を時間をかけ形にした意欲的作品

約20年振りの、“やっと出してくれたか”とも言えるソロ・アルバムだ！　近年ではホワイト・スネイクのバンド・マスターとしての活躍が目立つが、デビュー当時からいち目置かれていたテクニカルなプレイは今作でも遺憾なく披露されている。

しかも今作はオール・インストゥルメンタルで、彼のギターを十二分に堪能できるという、ギタリストのファンには余計に嬉しい内容と言えるのでは。以前から馴染みの深い①や⑨も今作用として新たにレコーディングしており、以前本人が気にしていたサウンド面の問題も解消され素晴らしい出来具合だ。ほかにも自身の経験やルーツ・ミュージックを消化し具体化しているさまがうかがえる、内容の濃い作品だ。

一皮も二皮も剥けた素晴らしいサウンドと衰えを感じさせないプレイで、しかも各曲適度な尺に収まっているためインスト作にありがちな間延び感がなく、アルバムを通して飽きがこない。待ちに待ったカッチョいいアルバムと言えよう！　（梶原稔広）

『サイバーブレイド』

シャドウ・ウォリアー

スピリチュアル・ビースト／IUCP-16328
※発売中

FOR FANS OF：アイアン・メイデン、ドッケン、アンセム

ジャパニーズ・メタルに影響を受けたポーランドの刃が一刀両断！

このジャケットとメンバー写真を見たら、聴かずにはいられない……ポーランドの親日家ミュージシャンによって2019年に結成されたバンドの1stフル。明瞭なメロディ・ラインやツイン・ギターのハーモニーからは初期のアイアン・メイデンなども想起させるが、やはりその骨子になるのは“ジャパニーズ・メタル”のそれと言っていいだろう。ハッキリとしたリフにプラスされる隠し技、哀愁漂うコード進行からは“古き良き”ヘヴィメタルの姿が垣間見える。

個性のひとつは女性シンガーというところだが、これがちょうどいいハイ・トーン具合で、いやに厳めつくしたりオペラティックにしたりという無用な味付けがなされていないところも馴染みやすさにつながっているのでは。正直、演奏力押しのテクニカルなバンドではないが、むしろ“頑張って弾いて、エディットで直したりはしない！”的なところも“サムライ魂”で好感度高し。日本版は枚数限定プレスなので、応援の気持ちも持ちつつショップへGo！　（岡見高秀）

『ジェネシス・ナインティーン』

ソドム

マーキー／MICP-11586
※発売中

FOR FANS OF：モーターヘッド、タンク、ヴェノム

F・ブラックファイア29年ぶりの復帰とツイン・ギター体制というWサプライズ

ドイツの重鎮、ソドムの新作。前作からトム・エンジェルリッパー以外のメンバーが総入れ替え。フランク・ブラックファイアが29年ぶりにバンド復帰というのも驚きだが、ソドムがツイン・ギター体制になったというのはもっと驚き。モーターヘッドやヴェノム・リスペクトのソドムは、トリオ編成にこだわりを見せていたのだと思っていたが、前作でプレイしていたふたりを解雇した理由は、セカンド・ギタリストの加入に反対したからというのだから、深い考えがあってのことなのだろう。

本作についてトムは“バンド史上最もタフで多様性に富んだ作品”とコメントしているが、むしろスラッシーな面が強く出た、実に彼らららしい作品という印象。ザッパやヴァイ好きのブラックファイアのリフやソロが実にカッコいい。②は元ソドムのドラマー、故クリス・ウィッチハンター、そしてバソリーの故クオーソンに捧げられている。実現こそしなかったが、バソリーは80年代、ソドムのメンバーを従えツアーをするというプランがあったのだ。　（川嶋未来）

『ディストピア・パート1』
ロイヤル・ハント

キングレコード／ KICP-4022
※発売中

FOR FANS OF：サイレント・フォース、シークレット・スフィア

壮大な世界観を表現する旋律とサウンドの融合

前作『キャスト・イン・ストーン』からおよそ3年ぶりの新作だ。今作は1曲目から最後の10曲目まですべてつながったコンセプト・アルバムとなっている。つまり、バンド・リーダーであるアンドレ・アンダーセンの“文学作品を楽曲化する表現力やアイディア”がより堪能できる1枚だということだ。

DCクーパーに加え、今作は壮大な楽曲群を表現するための力強いゲスト・ヴォーカルが多数参加しているのも特筆点。③で聴けるマッツ・レヴィンの楽曲への自然な溶け込みようや、④でハリのある伸びやかな歌声を披露するマーク・ボールズなど彼らの歌唱そのものも素晴らしいのだが、ミュージシャンを作品の一部として適材適所に起用するアンドレのプロデューサーとしての能力もまた素晴らしい。

もちろんバンド全体の演奏も円熟味を増しており、DCクーパーの歌唱やヨナス・ラーセンの人間味あるプレイはシンフォニックな各曲のエモーショナル的フックとなっている。（梶原稔広）

『The Wasteland』
NOCTURNAL BLOODLUST

MAVERICK ／ DCCA-77（通常盤）
※発売中

FOR FANS OF：メシュガー、テッセラクト、DEVILOOF

より強く、カッコよく……新ギタリスト加入で新章開幕！

衝撃的だった2ヵ月連続シングル配信のあとにドロップされた6曲入りミニだ。同タイミングで新ギタリストValtzとYu-taroの加入発表もあり、NOCTURNAL BLOODLUSTの新章の幕が上がった気がした。

②⑤では早速、そのふたりの実力が遺憾なく発揮される。弦跳びの複雑なフレーズから自然とユニゾンしていくハーモニーは、重厚感がより鮮明に伝わるヘッドフォンで堪能してほしい。④ではロー・ファイなネオ・ソウルをイメージさせるイントロから、バンドの代名詞と言えるスクリーモが展開。途中のジャングル・ビートを挟んだ縦ノリ全開の曲構成は、新生ノクブラだからこそできる離れ業だ。メロディアスでもありジャジィでもある⑥は、尋のヌケのいい高域とその歌唱力をうまく融合させた1曲で、バンドの持つポテンシャルの高さを見せつけるようなシメの一撃と言えるだろう。

確かにバンドとして苦難が続いたことは間違いない。だが今作を聴けば、“より強くカッコよくなって戻ってきただけ”だったことがわかるはず。（原田右恭）

『モーメント』
ダーク・トランキュリティ

ソニー／ SICP-6374
12月23日発売

FOR FANS OF：イン・フレイムス、アット・ザ・ゲイツ

ヨーテボリ・サウンドの元祖によるC・アモットを正式に迎えた12枚目

イン・フレイムス、アット・ザ・ゲイツとともに、いわゆるヨーテボリ・サウンドを確立したダーク・トランキュリティ。30年以上の活動歴を誇り、アルバムもこれで12枚目。途中ミカエル・スタンネが喉を痛めデス・ヴォイスが使えなくなる危機もあり、ゴシックへ活路を見出そうとした時期もあったが、その後はゴシックとメロデスを見事に止揚した世界観を作り上げてきた。

今年初め、オリジナル・メンバーのギタリスト、ニクラス・スンディンが脱退するも、後任として2017年からライヴ・メンバーを務めていたクリストファー・アモットとヨハン・ラインホルツのふたりが正式加入。そして制作されたのがこのアルバム。ギタリストが交代し、音楽性が変化するかと思いきや、さらにDT色が深まっているのがおもしろい。クリストファーも、イングヴェイが大好きというヨハンも、本作では一切速弾きを披露せず、哀愁溢れるメロディを丁寧に弾くことに専念しているのだ。冒頭からDT節がこれでもかと押し寄せるのだから、ファンはたまらないだろう。（川嶋未来）

『ロスト・マシン・ライヴ』
ヴォイヴォド

ソニー／ SICP-6373
12 月 23 日発売
FOR FANS OF：キング・クリムゾン、ヴェクター、コロナー

オリジナリティ溢れるバンドの入門篇にも最適なライヴ盤

カナダのベテラン・スラッシャーによる、2019年のステージをフル収録したライヴ盤。最新アルバム『ザ・ウェイク』から4曲、その前のEP『ポスト・ソサエティ』から2曲、残りはその他のアルバムから……と、新旧の名曲を楽しめるため、ヴォイヴォド入門篇としても最適。

彼らの場合、新も旧も同レベルで創造性に富んでいるのがすごいのだが、これは大学でジャズ・ギター講師も務めるチューウィーという稀代のギタリストの力に負うところが大きい。夏にリリースされたEPで聴かせた、ブラスを取り込んだジャズ・アレンジも素晴らしかった「ジ・エンド・オブ・ドーマンシー」（もちろん本作にも収録）の4度堆積リフなどは、コルトレーンあたりを思い起こさせる。当然作曲にはジャズ理論も応用しているのだろうと思いきや、チューウィーはほぼ感覚的に曲作りをしているというから、才能溢れる方は違いますな。

オフィシャル・サイトでは“ヴォイヴォド・タブ譜”が売られており、これを見ながら作品を聴くと、その創造性、独創性がさらにはっきりとわかる。　（川嶋未来）

『ポスト・ヒューマン：サバイバル・ホラー』
ブリング・ミー・ザ・ホライズン

ソニー／ SICP-6467
2021 年 1 月 27 日発売
FOR FANS OF：リンキン・パーク、BABYMETAL

EP連投プロジェクト第1弾がCD化 豪華ゲストを迎えた必携の1枚

全世界トータル・セールス400万枚、YouTube再生回数1億回を誇るブリング・ミー・ザ・ホライズン。彼らの2020年の新プロジェクトとしてリリースされてきたEPがフィジカル商品として発売する。やはりファンならばCDで持っておきたいものだ。

ヘヴィかつメロディアスなサウンドは健在で、先行配信されていた②や③のサビではオリヴァーのパワフルな歌声に引き込まれるだろう。①の疾走感溢れるギター・ソロや各楽曲の世界観をより深めているシンセ・サウンドにも注目だ。また、要チェックのポイントが豪華コラボレーション楽曲。④でヤングブラッド、⑦でノヴァ・ツインズ、⑨ではエイミー・リー、そして⑥ではBABYMETALが参加している。どの楽曲もそれぞれのサウンドや歌声の魅力が見事にマッチした、どちらのファンも楽しめる仕上がりとなっている。

さらに、国内盤には昨年11月にBABYMETAL公演に出演した際の音源を3曲収録。その熱気に浸りながら、ぜひ自宅で頭を振ってほしい。　（原見理香）

Reissue

ジェントの深化の軌跡が刻まれたスタジオ作が高音質CDとして続々リイシュー
メシュガー

『コントラディクションズ・コラプス』
マーキー／ MICP-30140
※発売中

『デストロイ・イレース・インプルーヴ』
マーキー／ MICP-30141
※発売中

『キャッチ 33』
マーキー／ MICP-30144
12 月 23 日発売

『伏魔殿』
マーキー／ MICP-30145
12 月 23 日発売

近代のエクストリーム・サウンドの始祖と言えるメシュガーの、その深化の歴史を刻み込んでいる各スタジオ・アルバムがSHM-CDとして続々と再発されている。スラッシーでありつつもすでに個性的なサウンドを聴かせていた1st『コントラディクションズ・コラプス』から、グイグイと密度を上げていった4th『ナッシング』まではすでに発売中。『キャッチ33』、『伏魔殿』、『ザ・ヴァイオレント・スリープ・オヴ・リーズン 』が12月23日発売となる（『オブゼン』はすでに再発中）。

来年はデビュー30年となり、新作の発表も控えているという。まずはこの機会に、これまでの激重音の軌跡を改めて聴き込んでおくべし。

試奏・文：梶原稔広
東京都出身、ALHAMBRAのギタリスト。数々のレコーディング、ライヴ・サポートを行ない、MI TOKYOにて後進の指導にも携わる。楽器メーカーの商品開発やデモ演奏のほか、ギタリスト向け教則本も執筆。
写真：鈴木千佳

ERNIE BALL MUSIC MAN

6-STRING JOHN PETRUCCI FIGURED TOP

価格：520,000円（＋税）

●お問い合わせ：コルグ／KIDお客様相談窓口
☎0570-666-569
◎https://www.musicmanguitars.jp/

Specifications

ボディ：メイプル・トップ／アルダー／マホガニー・トーン・ブロック（ドラゴン・ブラッド2種）、コア・トップ／ホンジュラス・マホガニー（アイランド・バースト）
ネック：セレクテッド・マホガニー（ボルトオン・ジョイント）
指板：ローズウッド（ドラゴン・ブラッド2種）、エボニー（アイランド・バースト）
フレット：24
ピックアップ：ディマジオ製LIQUIFIRE（フロント）、同社CRUNCH LAB（リア）、オリジナル・ピエゾ（ブリッジ）
コントロール：3ウェイ・ピックアップ・セレクター、3ウェイ・ピエゾ／マグネット・セレクター、ヴォリューム×2（ピエゾ、マグネット）、トーン
ブリッジ：オリジナル
カラー：ドラゴン・ブラッド・フレイム（画像）、ドラゴン・ブラッド・キルト、アイランド・バースト
付属品：ハード・ケース

洗練された設計とサウンドが匠の技で具体化

ジョン・ペトルーシ（ドリーム・シアター）のオリジナルBFRモデルを記念して作られた、最新のシグネイチャーだ。使用材の違いでバリエーションが用意されているが、今回はメイプル・トップの［ドラゴン・ブラッド・フレイム］を試奏してみた。

クリーン・サウンド ペトルーシ・モデルの特徴でもある、ピエゾ・ピックアップが内蔵されたオリジナル・ブリッジを搭載。通常のマグネット・ピックアップとの兼ね合いで、アコースティックなサウンドからクリスタル・クリーンまで幅広く音作りができるのが頼もしい。

歪みサウンド 厳選材を確かな加工で組み込んだ軽量で取り回しのいい小ぶりなボディからは想像できない、芳醇かつタイトで立ち上がりのいいドライブ・サウンドが堪能できる。以前の同モデルにも搭載されているディマジオのカスタム・ピックアップとの相性も抜群。

まさにドリーム・シアター的な色彩豊かなシーンを1本で作ることができる本器。美しいルックスもあり、メタル・サウンドだけに収まらないポテンシャルを持ったギターだ。

▲ボディとネックがプレートを介し5本のボルトでしっかりとジョイントされ、ガタつきもない。タイトで反応のいいサウンドは、このような構造からの影響も少なくない。

FENDER

MADE IN JAPAN MODERN SERIES JAZZMASTER HH

価格：170,000円（＋税）

Specifications

ボディ：アルダー
ネック：メイプル
指板：セレクテッド・ローズウッド
フレット：22
ピックアップ：モダン・モディファイド・ハムバッキング・タイプ1×2
コントロール：マスター・ヴォリューム、マスター・トーン、3ウェイ・ピックアップ・セレクター
ブリッジ：チューン・O・マティック・スタイル with ゴトー・ストップ・テイルピース
ペグ：デラックス・キャスト／シールド・ロッキング
カラー：ブラック（画像）、ミスティック・アイス・ブルー、オリンピック・パール、ディープ・オーシャン・メタリック、ジャスパー・オリーブ・メタリック
付属品：デラックス・ギグ・バッグ

新たな可能性を感じさせるメタル仕様のJM

本誌読者にはお馴染み、フェンダー製メイド・イン・ジャパン・モダン・シリーズの次世代型ジャズマスターを紹介しよう。

クリーン・サウンド 通常のジャズマスターは、“ジャズ”の名のとおりクリーン・サウンドを得意とするが、こちらはハムバッカー２基のメタル仕様。しかし出力が高すぎないピックアップのおかげで、艶のあるクリーンも出力できる。

歪みサウンド ボディの面積及び質量の恩恵もあり、低域から高域までバランスのいいドライブ・サウンドを出力してくれる。前述のピックアップは当シリーズのために開発されたオリジナルで、当然のことながら相性抜群。ボディ材であるアルダーの豊かな中域と粘りのあるサウンドを生かし、芯があり安定したサステインが体感できる。また良質なローズウッド製フィンガー・ボードによる音の締まり感も相まって、非常にバランスのいいサウンドに仕上がっているのだ。

既存モデルの概念を覆す“ジャズマスターならぬメタル・マスター”と言ってもいいのでは!?

▲フェンダーでは珍しいチューン・O・マティック・タイプのブリッジで、演奏性を考慮しザグリ処理を施してマウント。テイルピースとともに、本器の安定した弦振動にもひと役買っていそう。

●お問い合わせ：フェンダーミュージック
☎0120-1946-60
◎FENDER.CO.JP

JACKSON
PRO SERIES SOLOIST SL2

価格：オープン・プライス（市場実勢価格：174,000円前後）

▲スルーネック構造を生かしたなめらかなヒール。ハイ・ポジションへのアクセスが容易で、ストレスのないスムーズな移動が可能になる。

Specifications

ボディ：バスウッド
ネック：メイプル（スルーネック）
指板：エボニー
フレット：24
ピックアップ：セイモア・ダンカン製SH-6N（フロント）、TB-6（リア）
コントロール：3ウェイ・ピックアップ・セレクター、ヴォリューム、トーン
ブリッジ：フロイド・ローズ1000シリーズ
カラー：レッド・マーキュリー
付属品：ギグ・バッグ

メタル・ギターを象徴する正統後継器

メタル・ギターの老舗的存在＝ジャクソンから、目にも鮮やかなソロイストが登場した。

クリーン・サウンド メタル仕様にスクープしている当器だが、アンプがクリーンなセッティングではクセがなく素直で伸びのいい出音が確認できた。クリーン・サウンドがしっかりしているのは、作りがいい証拠でもある。

歪みサウンド リア＆フロント・ポジションともにセイモア・ダンカン製ディストーション・モデルを搭載しているので、音色を含めた出力バランスは上々。PU ポジション・チェンジ時のスムーズな音色の変化も素晴らしくアンプのゲインを上げても音が散らないため、厚くサステインの効いたドライブ・サウンドを堪能できるだろう。これはギター全体の作りもさることながら、グラファイトで補強された剛性の高いネックが芯のブレないサウンドに貢献していると思われる。

1980 年代のメタル・シーンを席巻したジャクソンらしいこのギターで、変化球ナシのヘヴィ・サウンドをプレイされたし!

●お問い合わせ：神田商会カスタマー・サポート
☎03-3254-3616
http://www.jacksonguitars.jp/

JIM DUNLOP

AKIRA TAKASAKI CUSTOM PRIMETONE PICK

価格：1,200円（＋税）（3枚入り）

Specifications

素材：Prime Tone Sculpted Ultex
厚み：1.4mm

▲エッジは職人が手作業でテーパー加工を施しているので、弦への当たりもスムーズ。新品にして、最高の使用感が得られるのだ。

サウンドの核と成り得る隠れたニュー・ギア

ジム・ダンロップの数あるピックのなかでも、耐久性やサウンドにこだわり製作される"プライムトーン・シリーズ"より、タッカンこと世界の高崎晃シグネイチャーが登場！　同氏が本モデルのもととなるミニ・トライアングル・タイプを使用した際には、これまでのピックとは違う感触やサウンドに魅力を感じたという。

素材は同社が"Prime Tone Sculpted Ultex"と呼んでいるもので、通常のウルテックスとは差別化が図られていると思われる。同じゲージのウルテックスとプライムトーンでは触ったときの感触や硬さ、ハジいたときの音が明らかに違う。

肝心のサウンドや使用感は……もともとが硬い素材に加え1.4mmと厚めなゲージのため、押しが強くひと回り音が大きくなるイメージ。1音1音がしっかりと発音されるので、かなりリラックスして弾くことができるのだ。表面の彫刻はすべり止めの効果もある。

ウルテックスは人の爪に近いサウンドと言われるが、本モデルは磨かれた大理石のような、硬く艶のあるサウンドが特徴である。

●お問い合わせ：モリダイラ楽器
☎03-3862-5041
https://moridaira.jp/

Koie & Teru [Crossfaith] × SLIPKNOT WHISKEY

MHJ流 ウイスキー的KNOTFEST！

ライヴで思いっきり暴れたい！　みんなで呑んで大騒ぎしたい！　いえいえ、今はもう少しの辛抱を……でも、我慢だけじゃね。そこで、そんなメタル・ヘッズの願望を家にいながらにして満たしてくれるリカーをご紹介！　今回はスリップノットのオフィシャル・ウイスキーとCrossfaithのKoie＆Teruが激突する、まさに“ウイスキー的KNOTFEST”である！

Slipknot No.9 Iowa Whiskey

希望小売価格：6,000円

45度

Slipknot No.9 Reserve Iowa Whiskey

希望小売価格：9,000円

49.5度

メンバーのナンバリングに継ぐ“#9”を冠する2本のオフィシャル・ウイスキー。バンドの拠点であるアイオワ州のトウモロコシを原料に、同州にて初めて地産バーボンを作ったシダーリッジ蒸留所が生産する、まごうことなき“アイオワ・ウイスキー”だ。ストレート・バーボン・ウイスキーとストレート・ライ・ウイスキーを6:4でブレンド。[No.9 Iowa Whiskey]は3～4年熟成したバーボンを、[No.9 Reserve Iowa Whiskey]には4～5年熟成させたバーボンを使用。どちらもアルコール度数が高くアタック感は強めだが、徐々に濃厚な甘みが溢れ出し、重層的な味わいを最後まで楽しむことができるだろう。

Koie

Teru

ストレート＆ロック☞ K [Slipknot No.9 Iowa Whiskey（以降：45度）]は1st『スリップノット』を思い浮かべるハジける感じ、[Slipknot No.9 Reserve Iowa Whiskey（以降：Reserve）]にはより熟練された温かみがあるというか。 T Reserveのほうが奥深さがあってドシンとくるね。これはストレートで呑んでほしい。45度のほうは甘みが強いなって印象が最初に来ましたけど、決して呑みやすいウイスキーではない。クラウンが作ったんだろうなって世界感がしっかりしている。 K ロックにすると……口に入れて体の熱で気化して返ってくる香りは、45度のほうが華やぐというか。膜がハジけて広がっていく感じ。Reserveだとストレートより薄まったはずなのに、逆に凶暴性が増した気がします。 T 確かに増した！　ロックのReserveからは、俺のなかでは「ザ・ブリスター・イグジスツ」が流れてくる（笑）。

ソーダ割り☞ K お、Reserveのほうがソーダ割りにすると呑みやすい気がする！　それに対して、45度のほうが“ミッドのあたり”が残っていて、みずみずしさがソーダ割りと合うのかな。 T みずみずしさ、俺も感じた。いい意味でのアクの強さが、ソーダ割りにしてもちゃんと残ってんねん。鼻にくる奥深さは、しっかり主張してくるというか。ブラックペッパーをまぶしたビーフジャーキーが食べたくなった（笑）。辛口のジンジャエールとも合いますね、めっちゃおいしい！ K 普通のジンジャエールだと甘みが出ちゃうので、辛口のほうが相乗効果があってオススメ！

スリップノットの名に恥じない、パンチのあるテイスト ── Koie

Kどちらにもスリップノットの名に恥じない、パンチのあるテイストがありました。そのかなでも、俺は45度のソーダ割りが好きでした。辛口のジンジャエールで割ったReserveもおいしかったですね。

T一番衝撃を受けたのはReserveのストレートで、そのロックが次で。45度も、俺はストレートで呑んでほしいな。

Kスリップノットが好きで記念に買うっていうのももちろんいいんですけど、"お酒は初心者だけど、彼らの出身地であるアイオアの世界観を楽しみたい"という人にもいいんじゃないですか。Teruみたいにウイスキーが好きな人ならストレートやロックで呑んで、スリップノットを聴きながらヘドバンする……ロック・バンドがお酒を出す意味ってそれですから(笑)。

Tスリップノットって、"みんな聴いてくれ"って気持ちで音楽を出しているわけじゃないと思うんです。このお酒も一緒で、ストレートの味にはそういう裸のままの初期衝動があって。やっぱりスリップノットに求めているものって刺激だったりで、45度、49.5度という高いアルコール度数も、彼らが世に出すものに対して示しているアイデンティティだと思う。

Kそう。お酒を出しているアーティストはほかにもいるけど、ありモノにラベルを付けただけでは違うと思うから。こうやってオリジナルでやっている意味が感じられるから、ファンの人には一回は呑んでほしい。呑む価値は絶対にあると思いますよ。

※

T俺は普段からウイスキーが好きで、ステージ・ドリンクもジャックダニエルなんですよ(笑)。音楽にも自分たちのライヴにも自由を求めていて、普段はなかなかお酒を呑む機会がない人にも、ステージ上でお酒を呑んでいる俺を観て"今日は何をやってもいいんだ"と感じてもらえればと。

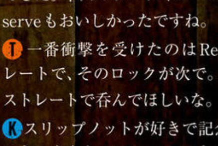
KTeruは海外ツアーでも、リカー・ショップがあれば絶対寄るよね。俺は普段ビールが好きで、海外ツアーでも各地のクラフトビールを楽しみますね。銘柄を覚えるよりも、"その場で呑んでおいしいやつがおいしい"って感覚。一緒に呑める人は友達やなって思うし、自分の鎧をはずしていくことやとも思う。二日酔いを共有するというか(笑)、そこで生まれる友情ってもちろんあるから。

T初めて交流するバンドとお酒を一緒に呑むのもイイ時間だなと思いますよね。

K2021年・2022年は、コロナを受け入れていかなければいけないと思うんです。その先に今までどおりの生活が戻ってくると信じていれば、ロックにおいてもすごい年になるんじゃないかなって。フラストレーションの反動で、いろんなバンドがありえないくらいのエネルギーを爆発させてくれると思う。

Tお客さんたちも、コロナでの自粛でいろいろ抱えていると思うんです。そのなかで突破口になれるものが音楽で……それが自分たちの音楽でありたいなって。今はその気持ちですね！

一番衝撃を受けたのはReserveのストレート ── Teru



本日のBar●Rock Inn DICE

新宿～大久保エリアにて、ラウド系から王道まで、幅広い音楽が楽しめるロック・バー。DJイベント、アコースティック・ライヴなども開催中！
持ち込み企画などお問い合わせは＜info@rock-inn-dice.tokyo＞まで。

住所●東京・新宿区百人町1-23-3 亀井ビル2F
Web●https://rock-inn-dice.tokyo/
Twitter●@DiceInn　Instagram●@rockinndice

※お酒は二十歳になってから。
未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

都商会ロック酒通販サイト
【MIYAKO WEB CHANNEL】

METAL HAMMER JAPAN
メタルハマー・ジャパン Vol.4

Rittor Music Mook

電子版　2021年1月1日　第1版発行
（底本　2021年1月1日発行　第1版1刷）

【発行所】
株式会社リットーミュージック
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
https://www.rittor-music.co.jp/

発行人　松本大輔
編集人　永島聡一郎

【本書に関するお問い合わせ先】
info@rittor-music.co.jp
本書の内容に関するご質問は、Eメールのみでお受けしております。メールの件名に『メタルハマー・ジャパン Vol.4（電子版）』と記載してお送りください。ご質問の内容によりましては、しばらく時間をいただくことがございます。なお、電話やFAX、郵便でのご連絡、本書記載内容の範囲を超えるご質問につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

編集長
岡見高秀

ビジネス・コミュニケーション部
吉田勇治
西澤文孝
横尾彰
原見理香
原田右恭

海外渉外担当
平井潤

表紙デザイン
村藤治（RAD）

デザイナー
山田直登（株式会社ナックスタイル）
辻井知（Design Works SOMEHOW）
石原崇子

表紙写真
宮脇進（PROGRESS-M）

電子版制作　大日本印刷株式会社

©2020 Rittor Music, Inc.

＊本書記事／写真／図版などの無断転載・複製は固くお断りします。
＊この電子書籍は固定レイアウト形式で作成されています。
　文字の拡大・縮小や、検索、ハイライトなどの機能は利用できません。
＊電子版は紙版とは異なる部分があることをご了承ください。

▲雑誌も団体も、立ち上げが一番大変。頑張れ＆頑張る！

METAL HAMMER　FUTURE

本書の記事は、Future plc グループ企業であるFuture Publishing Limited, UK 1983が著作権を保有またはライセンスを受けているMetal Hammerから翻訳または複製されています。 Metal HammerはFuture Publishing Limitedの商標またはライセンスを受けているものです。Used under license. All rights reserved.
Future plcグループが発行する本雑誌およびその他の雑誌の詳細については、http://www.futureplc.com へアクセスください。